

あなたが動く、時代が変わる

太陽の國

IZUMO



HNS (人間・自然・科学) 研究所



はじめに

ちゅうよう
中 庸

——^{かたよ}偏らざるをこれ中といい、^か易わらざるをこれ^{よう}庸という

中国古典『中庸』より

H N S（人間・自然・科学）研究所 理事長 小松昭夫

自分が置かれている環境をいったん肯定し、人の縁によって現在の自分があり、自然と歴史の中に生かされていることを自覚。同時に、現実を直視、「人類究極の目的にめざめ、状況に応じ、生かされながら臨機応変に生きる」。これが、私の考える「中庸」です。

ゼロから事業を起ち上げ、今日に至った道のりは、たくさんの方々との出会いと縁の賜物であり、感謝にたえません。と同時に、既得権益と因習の壁を臨機応変に突破していく戦いの連続でもありました。

その人生の途上において、いかに生きるべきかを模索する中から、「天寿が全うでき、楽しく愉快に持続的に生きられる地球社会の創造」という目的をめざすことが、人類が滅亡から救われるための条件であり、21世紀社会は、この目的に向かって自分の果たすべき役割に目覚めた人たちが共生していく社会であることを見いだしました。

人類の歴史は、飢えと殺戮^{さつりく}のない社会の創造をめざす過程で、文明・文化の交流・融合による新しい文明・文化の創出（陽）と、戦争による殺戮・破壊（陰）という状況とが繰り返されてきました。

今日、世界は、環境破壊と地域紛争の多発による人類破滅か、共通の目的を見出し地政学的役割分担と合意形成の中から「天寿が全うでき、楽しく愉快に持続的に生きられる地球社会の創造」に向かうか、その分岐点にあります。

世紀末の今こそ、多面的に現状を分析、歴史・地政学に照らし、それぞれの地域の目標を見出すべく、議論の場を設定するときです。さもなければ、現代社会

は崩壊しかねません。すでにその兆候はいろいろなところに表れてきています。

山陰地方では若い人たちが地域を去り、人口減少と高齢化が急速に進み、企業倒産も急増。島根県は高齢化・死亡率のいずれも日本一になっています。

このような切迫した状況下、政治・行政・学者の議論にとどまらず、企業を含めた市民社会総参加のもとで社会改革のための議論の場を設け、解決の道筋を見出す努力をしなければ、企業・個人の生存すら危ぶまれる「暗黒の21世紀」になってしまいます。すでに全国各地で同じような状況が出現しています。

社会心理学者アブラハム・マズローは人間の欲求を生理的欲求、安全欲求、集団欲求、尊厳欲求、自己実現（自己超越実現）欲求という5段階で説明しています。未来を拓くためのシナリオは、欲求段階を固定化させる文化（^{はどろ}霸道）から、進化を促す文化（王道）への転換なくしては描けません。

HNS研究所は、世紀末の社会問題、環境問題を同時に解決するモデル事業として「心のインフラ整備——人縁・感謝と戦争の歴史記念館」「心の首都（松江市市街地再開発構想）」「ゼロエミッション・小規模理想郷（中海・宍道湖圏域の新構想）」「未来を拓く研究・教育機関」の4大プロジェクト構想を提案します。

立案に至るまでには、1988年、商工会連合会と連携、県内若手経営者20名とともに、創業の地・島根県八雲村において「知革塾」をスタートさせたのを皮切りに、95ページの年表の通りの活動を積み重ね、また、森清著『母なる中海』（97年ダイヤモンド社刊）に記されているような経緯を経てきました。89年協同組合「テクノくにびき」設立、94年「HNS研究所」設立、出版活動とシンポジウムを通じた「一村一志運動」展開、94・95・97年の3回に及ぶ「縁むすび大会」（300～500名参加）開催、「中海本庄工区の未来構想発表会」をはじめとするシンポジウム開催などです。

こうした活動を通して、古くから「縁むすびの国」といわれてきた出雲には、地政学的・歴史的に考えたとき、行き詰まった社会を希望の持てる社会へ誘導する役割があるのではと気づき、4大プロジェクトの立案に着手しました。

この提案がひとつの契機となって議論の輪が広がり、研究・構想・調査・企画・設計・建設・運営というプロセスの中で、本構想の理念に共感する人々のネットワークが構築され、21世紀の国際共生社会への扉が開かれることを確信しています。読者諸兄のご意見・ご教示をたまわりたく、ご一報をお待ちしております。

目 次

はじめに	1
第1章 太陽の國出雲（地球ユートピアモデル事業）の目的	4
今を生きる人間の義務と責任	
人類究極の目的に向かって	
1200兆円の金融資産を流動化させるプロジェクト	
第2章 人類と人間	8
長期的・多面的・根源的に考える	
環境問題は地球誕生から考える	
人間社会の問題は人類誕生から考える	
□人類の特性とは	
□人間の定義とは	
第3章 今、地球は——現状認識	19
世界の危機	
アジアの危機	
日本の危機	
転換か滅亡か	
子供たちが暗黒社会の到来を敏感に察知	
第4章 何をなすべきか	25
危機をチャンスに	
政・官・民の新たな役割分担	
「出雲」の歴史的・地政学的意味	
第5章 4大プロジェクト	30
21世紀を切り拓く根源的自己発展型プロジェクト	
1 心のインフラ整備——人縁・感謝と戦争の歴史記念館	32
2 心の首都（松江市市街地再開発構想）	53
3 ゼロエミッション・小規模理想郷（中海・宍道湖圏域の新構想）	68
4 未来を拓く研究・教育機関	89
経営を語る	97

第1章

太陽の國出雲(地球ユートピアモデル事業)の目的

今を生きる人間の義務と責任

民族や宗教、地域や国家間の衝突・紛争、環境・食糧・エネルギー問題、極端なマネー至上主義経済、そして人心の荒廃――。

21世紀を目前にして、人類は国内では解決不可能で、国家間さらには地球規模で取り組まなければ解決できない様々な危機に直面しています。人類全体の存亡にかかわるこれらの危機を克服し、次の時代を担う子供たちに、豊かで生きがいのある21世紀社会のフィールドを提供することは、子孫に対する、今を生きる人間の最大の義務と責任です。

人類究極の目的に向かって

「天寿が全うでき、楽しく愉快に持続的に生きられる地球社会の創造」。

この人類究極の目的に向かって、応分の役割を担うことが、21世紀において「共生できる人間の条件」であると考えます。

今こそ歴史に学び、人間の定義に思いをはせ、哲学と自然の摂理に調和した社会に向けて、パラダイムシフト(飢餓と殺戮のない社会をつくるための枠組から、楽しく愉快に持続的に生きられる社会の枠組への転換)が必要です。

20世紀、飢餓と殺戮の恐怖を克服するため資本主義経済の仕組が構築され、科学・技術が急速に進歩し、その間いくたびかの世界規模の戦争を経て、今日の物質的に豊かな社会が築き上げられました。

ところが、とくに日本では、飢餓と殺戮を克服した後も同じ枠組が続いたため、平和の中で大量生産・大量消費・大量廃棄の傾向が強まり、今や自然の摂理と著

しく乖^{かい}離した社会になっています。

「物づくりとその普及のための社会の枠組づくり、人づくり」から、「楽しく愉快に持続的に生きられる人づくりのための社会の枠組づくり、事おこし、物づくり」への転換なくしては、21世紀の地球社会は持続不可能であることが、誰の目にも明らかに認識されるに至りました。

このパラダイムシフトを推し進めるため、今までの経過・現状認識と目的を共有し、歴史的・地政学的な背景に照らす中から使命観が生まれる、新たな事業を起こす必要があります。

事業のプロセスに感動を蘇らせ、「自己本位から他者への思いやりと共生へ」、「利己主義から利他主義へ」と人間の心の進化を促し、人類究極の目的に向かって自己発展していく「場」と「仕組」を、出雲の地につくることによって、全国、世界へ「人物」を輩出していく——これが本構想の趣意です。

1200兆円の金融資産を流動化させる ビッグプロジェクト

現在、日本の個人金融資産は200兆円、負債を差し引いた正味でも900兆円といわれています。このうち、東京・神奈川・埼玉の首都圏1都2県で、10億円以上の不動産を所有する4万人強の資産家が200兆円以上の金融資産を保有しているとの試算があり、富が一部の資産家に集中していることがうかがえます。

「ゼロ金利時代」の到来で銀行預金離れが起きつつある一方、最近「金」投資がブームになっています。それ自体としては何の価値も生み出さない「金」にマネーが向かい始めていることは、個人の資金が投資先を見出しかねていることを示しているといえます。

1998年12月19日に経済企画庁・自治省から「緊急経済対策」が新聞発表されました。この対策の一環に本プロジェクトを位置づけることができれば、「太陽の國出雲」構想に火が点き、1200兆円の金融資産流動化のきっかけとなり、バブル崩壊以降長い間求められていた景気反転の起爆剤として大きな役割を果たすことが期待できます。日本の内需拡大を求める海外の声にも応えることもできます。

そして、本プロジェクトの進行にともない、新たな時代を拓く「人物」を輩出し、ネットワークの輪が全国・世界に向けて広がっていくことは疑いありません。

「あらゆる財産と富は、正義に則し、人類の進歩のために責任をもって使われなければならない」。シュミット元首相ら国際政治家グループが提案している『人類の責任に対する世界宣言』案の中の条文です。

日本は、江戸時代、地政学と歴史を巧みに活用した制度と施策により世界に例のない独特の文化を生み出しました。そして明治以降、富国強兵・殖産興業を追求し富を築き上げましたが、その負の部分が次第に表面化、太平洋戦争に突入、そして敗戦によってその富は灰燼に帰しました。

しかし、アメリカの世界戦略の枠組の中、戦後復興、朝鮮戦争の後方支援、東西冷戦の前線基地、ベトナム戦争の補給基地という経過と、日本人の勤勉な努力とがあいまって奇跡的な経済発展をとげ、日本は世界第2位の経済規模の国になりました。

本来は、敗戦後ある程度国民生活が安定した段階で、人類が同じあやまちを繰り返さないよう、当事国として関係諸国に協力を仰ぎ、戦争に至る背景、原因、経緯を研究・議論、共通認識を深め、人類共有の知的財産構築をめざすべきでした。

しかし、戦後50年余を経た今日までその作業を怠ってきたため、いまだ歴史のくびきから解放されず、解決の糸口さえつかめていないのが現状です。今日の教育の混乱、子供たちの異常行動の遠因もここにあるのではないのでしょうか。

世紀末の今こそ、そういう経緯の上に蓄積されてきた富を用い、人間としての義務と責任を果たす最後の機会と考えます。

この機会に行動を起こさなければ、今を生きる我々は「人間としての基本的な要件を備えていない」という、世界各国および我々の子孫からの指弾を免れません。

人類の特性と人間の定義を考察する中から生まれた、人類が共有する究極の目的「天寿が全うでき、楽しく愉快に持続的に生きられる地球社会の創造」に向か



飛躍へ。

【緊急経済対策】始動。

貸し付け対策	5.9兆円程度	社会資本整備	8.1兆円程度	住宅政策充実	1.2兆円程度
雇用対策	1.0兆円程度	地域振興策	0.7兆円程度	アジア等への支援	1.0兆円程度

●金融システム安定・信用回復対策と、即効性、波及性、未来性の3原則に沿った異次元政策を緊急に実行します。

金融システム安定・信用回復対策	即効性・波及性・未来性の3原則に沿った異次元政策	世界経済リスクへの対応
1. 金融システムの安定化 2. 信用回復対策 3. 日本銀行による資産買入れの積極的な実施	1. 3月1日開始の緊急経済対策 2. 3月1日より、緊急経済対策 3. 3月1日より、緊急経済対策	1. アジア諸国の経済危機への対応 2. アジア諸国の経済危機への対応 3. アジア諸国の経済危機への対応

●緊急経済対策の「即効性」を確保し、金融市場の安定化を図るとともに、信用回復対策の緊急実行を図ります。

●緊急経済対策の「波及性」を確保し、金融市場の安定化を図るとともに、信用回復対策の緊急実行を図ります。

●緊急経済対策の「未来性」を確保し、金融市場の安定化を図るとともに、信用回復対策の緊急実行を図ります。

(日本経済新聞 H10.12.19)

って、今こそ一人ひとりが、自分の拠って立つ基盤、状況に応じた役割を担うときです。

生命と衣食住の保証を前提に、主権在民、基本的人権の尊重、自由（移動と言論）を基盤とするなかで、「天寿が全うでき、楽しく愉快に持続的に生きられる地球社会の創造」という目的を追求することによってのみ、競争と共生が矛盾なく両立でき、社会に平和と活力と信頼関係がもたらされる。そのプロセスにおいて人類進化のサイクルが始まる。科学・技術が急速な発展をとげた20世紀末、人類誕生以来初めて、その環境が整ったと考えます。

21世紀を切り拓く本プロジェクトをスタートさせることによって、世紀末の閉塞感を打破、共に、新しい歴史の第一歩を踏み出そうではありませんか。

第2章

人類と人間

長期的・多面的・根源的に考える

18世紀末の産業革命以来、資本主義の仕組を導入した国では、自然科学と技術が急速に発達し、飢餓と殺戮のない社会の構築に成功しました。しかし、その後も同じ仕組を継続してきたため環境汚染が著しく進み、人類は自らの手によって存立基盤をも脅かすようになりました。

繁栄か崩壊か——地球と人類の存亡のかかった危機に直面している今こそ、宇宙、生命、人類、人間、国家、科学・技術、経済・企業などあらゆることから、長期的・多面的・根源的に考えてみる必要があります。

長期的——環境問題は地球誕生、生命誕生から、人間社会の問題は人類誕生から考える。

多面的——我欲のある自分、組織人としての自分、組織としがらみのある中の自分、国家という枠組の中の自分、国家としがらみのある国々の人たちを含めた中の自分、世界人類とその歴史の中の自分、あらゆる生命体の中の個としての自分という面から考える。

根源的——人類の特性・人間の定義の中から考える。

一方、短期的・局面的・表面的なことがらとの整合性も保てなければ、経済的な基盤を確保できません。

その時代の最も困難かつ本質的な問題を解決するための目標設定に誤りがなければ、長期・短期—多面・局面—根源・表面という相反することを両立させる知恵が生まれてきます。その結果、自律的に目標に近づき、経済基盤も確立します。

人間の頭脳はそのような構造になっていると考えます。

環境問題は地球誕生から考える

ビッグバンによって誕生した宇宙に、地球が姿を現すのは今から約46億年前。できたばかりの地球は大小の隕石の衝突によって発熱し、1000度以上もある「マグマの海」に覆われていました。

やがて地球に落下してくる隕石の数が減り、火の玉のようだった地球の温度が下がってくると、水蒸気になって漂っていた水の分子が雨になり、何万年も雨が降り続き、地球に海が出現したといわれています。

約39億年前、宇宙から降り注ぐ強い紫外線によって煮えたぎる硫酸の海の中から、生命が誕生。

その10億年後には、太陽光によって水と二酸化炭素から糖分をつくり、植物のように光合成を行い、その廃棄物として酸素をつくりだす細菌が現れたとされています。シアノバクテリアと呼ばれるこの細菌が吐き出す大量の酸素は、当時の他の生物にとっては有害で、いわば「環境汚染」が始まったのです。

一方、酸素によって硫酸の海は水の海に変わっていきました。海中にあふれた酸素は、海底火山から流れ出た鉄と反応し、酸化鉄となり、人類の文明を支えてきました。

14億年前には、他の細胞に潜り込み、呼吸によって取り入れた酸素を使って糖分を燃やし、そのエネルギーを宿主の細胞に供給しながら「共生」するミトコンドリアという細菌が出現します。このミトコンドリアは、今日生きているあらゆる生物の細胞に存在しています。つまり、私たちの体内にも、太古より連綿と生き続けてきた細菌がいるのです。

そして6億年前には、海中で「カンブリア爆発」といわれる生物進化の大爆発が起こり、様々な多細胞生物が生まれました。そのほとんどは絶滅したとされていますが、このとき、私たちの遠い祖先ともいえる動物が出現しました。

光合成をする生物が増え、酸素が豊富になると、地球にオゾン層が形成されました。オゾン層によって紫外線が遮断されるようになると、生命は一斉に水中から陸上へと進出し、新たな生命が次々に誕生、大地には多様な植物が繁茂するよ

うになりました。そして今から4億年前、背骨を持つ魚の中から陸に上がるものも出てきました。

これら太古の植物、動物の遺骸は石炭、石油などの化石燃料となり、産業革命を経て近代社会の誕生に至る流れを促進しました。

人間社会の問題は人類誕生から考える

陸に進出した動物の中で隆盛をきわめたのが恐竜でしたが、7000万年前に突然、絶滅します。隕石衝突が原因といわれています。

恐竜が絶滅した後、哺乳類の発展が始まります。

そして、今から約1500万年前、アフリカ大陸東部で大規模な地殻変動が起き、標高2700メートルを超える大山脈ができました。この山脈の東側では雨が降らず、熱帯雨林が乾燥化して次第にサバンナ（熱帯草原）に変わっていきました。

西側に残った類人猿は森林の中で樹上生活を続けましたが、今から500万年前、東側の草原では、樹上生活を捨て直立2足歩行をするサルが出現、毛の薄い「裸のサル」への道を歩み始めたといわれています。

人類は未熟児（首が座らず、自分で移動できない）として胎内から出てきます。このときには、脳の中に「生きる」ための思考回路ができあがっていますが、肉体的な行動に移せない部分を残しています。次の段階で、介護者により一方的に「生かされる」という思考回路が後天的に芽生えます。その後、自立的に乳を飲み、移動するようになり、「生きる」という思考回路が肉体と連動するようになります。そして介護者に助けられつつ直立2足歩行を身につける中で未来予測・危機察知の思考回路が発達しますが、肉体的な発達の遅れから察知した危機に対処できないため、不安が高まり、夜泣きするようになります。この時の介護者の愛情により「生かされながら生きる」という思考回路の第1段階が完了します。その時の対処の仕方が、その後の人格形成に大きな影響を及ぼすことになります。

このような経過を経て、特別な教育を施さなくても、「天寿が全うでき、楽しく愉快に持続的に生きたい」という強力な思考回路を持つ哺乳類として、地球上

に「人類」が急速に増えていきました。

そして、1万年前になると、現在に続く間氷期が始まり、気候が安定します。それにともない、人類は狩猟採集から農耕牧畜へと移行。定住によって、食糧がそれ以前より安定的に確保できるようになり、天寿が全うできる可能性がより高まりました。しかし、さらに数が増えたことと天候異変により食糧不足を招き、人類の大移動が始まりました。

□人間の定義とは

「人間」という言葉は、その時々時代背景から生み出された意図によって、様々な定義を与えられてきました。文明の飛躍的発展か破滅かの瀬戸際にある20世紀末、「人間」はどう定義されるのでしょうか。

類人猿と人類とを分ける最も大きな相違点は、脳の大きさです。250万年前、人類の脳の容積は600ccほどでしたが、現在の人類の脳は平均1350ccもあります。

人類と同じ脊椎動物である魚類にも脳があります。脊髄の先端の神経細胞が増えてふくらんだものが脳ですが、魚類の脳は、呼吸や脈拍など生命を維持するのに最も重要な機能をコントロールしています。

魚類から進化した爬虫類には、生命維持の脳に加えて、闘争本能、子育て本能など生物が生存競争を勝ち抜くために必要な本能的感情や記憶を支配する脳が現れます。

さらに進化したネズミなどの下等哺乳類では、本能的な行動に状況判断を加える命令を下す大脳旧皮質と呼ばれる部分が発達してきます。

そして、人類になると飢餓と殺戮という極限状況をいかに回避するかの試行錯誤の中で、大脳新皮質が急速に発達。これは「理性の脳」とも呼ばれ、考えたり、高度な学習をしたりする脳です。

人類の脳は大脳新皮質の下に、下等哺乳類脳と爬虫類脳が隠されている構造になっています。隠された脳の発する本能的な欲求に従って行動すべきかどうかを、大脳新皮質が状況に照らして判断する仕組みになっています。

「理性の脳」を持つようになった人類の中のひとりが、「天寿が全うでき、楽しく愉快に持続的に生きたい」という願望を具現化するための道を探り始めます。

まず、その願望を可能とするような群れを作るための手段として、個々の特性に応じた役割分担が生まれるように、生活習慣、行事、仕組を確立。これにより、暗黙知としての原則が脳の中に育まれ、さらにそれが伝承される流れ（文化）が生まれます。その機能をより強固にするため、言葉と文字が生み出され、暗黙知が形式知に変えられます。これにより、飢餓と殺戮という極限状況を回避するという同一目的を持った巨大な集団が地球上に出現することになりました（国家の誕生）。

このような経緯の中で、「人間」という概念が生まれたと考えられます。

科学は、事実の上に「概念」を設定することにより「仮説」が立ち、急速に進歩、その実証によってテクノロジーが発達するという過程を繰り返し、今日に至っています。

1から9までの数字が目に見える数量をあらわしているとする、「零」は目に見えない「概念」です。インドにおいて空位を表わす「零」が発見されたことにより、あらゆる自然数を自由に書き表わすことが可能となり、「算術」から「数学」に大きく進歩したとされています。

「人類」が目に見える実体のある存在だとすると、「人間」の定義は「零」と同様「概念」です。「人間」という「概念」の設定と、自然環境、それによって生まれた民族の織りなす地政の影響が、人類の脳を、現代人の脳のように急速に変化させたと推測されます。

情報化、核兵器とその運搬手段、および交通機関の発達した20世紀末の社会では、「人間」とは「飢餓と殺戮がなく、楽しく愉快に持続的に生きられる地球社会の創造に向かって、応分の役割を果たすことに目覚めた人類」と定義されます。

環境問題と共に、今日の根源的な問題である個人および国家間の相互信頼関係の喪失、人心の荒廃という社会問題を解決する糸口を見出すためには、この「人間」の定義を原点として思考の枠組を再構築する必要があります。

これによって、社会の再構築と、新しい科学・技術の登場を促し、希望の持てる文明の扉を開くことが可能となります。

千年紀 見つめて

新たなミレニアム

この千年紀の最後にさしかかった時、我々が経験しているのは、過去の世界観が根柢から覆され、受け継いできた技術や、それに支えられた文化がたちまち遺物になりかねない激しい変化である。その一つが、地球を単位に考えるグローバリズムの流れだ。五百年前の一四九九年の初秋、ペネチアの町は、リスボンからの知らせに大騒ぎしていた。バスコ・ダ・ガマが率いる船隊がアフリカの南端、喜望峯を回ってインドに至る新航路を発見し、香料を満載して無事帰港したのだ。「地中海の女王」として海上貿易を生耳ってきたペネチアは、存亡のときを迎えた。

ところが、その七年前のコロンブスの大西洋横断は、当時のペネチアではさほどのニュースにはならなかった。一粒の胡椒（こしよ）も持ち帰らなかったからだ（塩野七生著『海の都の物語』）。つまりこの違いは、西洋史の「地理上の発見」が、その後の冷戦は、十九世紀の主権国家の安全保障概念

グローバリズム

情報革命

生命科学

速まる変化の奔流

す。古代ローマの地理学者ストラボンの時代に、既に地球は球だと知られていた。だが、西欧の拡張がもたらした地平・水平線の先に目を奪われていた時には、グローバリズムの世界観は生まれなかった。地球の全体性が意識されるようになったのは、つい先のところだ。江戸の儒学者、熊沢蕃山は「地球の全体性が意識されるようになったのは、つい先のところだ。江戸の儒学者、熊沢蕃山は

が、この千年の百大事件の中にRカーブン著『氷炭の春』を取り上げたのはそれが「地球規模の汚染」に警鐘を鳴らす、グローバル環境史観の登場だったからだ。

食卓に座りながら宇宙から送られてくる地球の映像を眺めることができる。国境を超えて普通の人が、同じ時空を生きている同時代性を感じながら暮らす時代は、人間の歴史にはかつてなかった。

最初の情報革命、グーテンベルク聖書の活版印刷は、一四五五年ごろ。当時は羊皮に印刷していたので、聖書一冊分に羊三百頭を殺さなければならなかった。それでも写本文化を覆す大事件だった。まもなく紙印刷が本格化し、独語訳聖書の量産が可能になると、『神の言葉』を記した聖書を唯一の権威とするルターがローマ教皇権批判が、教会権力を揺るがした。

られたのは、この千年紀のもう一つのキーワード「情報革命」の影響である。国際金融に象徴されるように、情報技術の革新は距離の桎梏（しご）を解消し、時間軸と空間軸を限りなく近づけた。

そして、デカルトやルソー、マルクスらの知識層の思惟（しゆい）が広く書物になって民衆を啓蒙（きもう）し、時には政治を転覆するパワーになった。だが情報の分野でも、汎用電算機の開発が始まる電子情報文化が、ほんのこの半世紀の間にグーテンベルク聖書以降の印刷文化を凌駕（りやう）する勢いだ。

展は、千秋一日の速さである。この三十年間に産出された情報量は、グーテンベルク以降の量をはるかに超えているといわれる。『歴史とは何か』の著者E・H・カーは、歴史を動かすのは相対程度まで数の問題だと言っている。

印刷技術は教会権力や迷信などから社会を解放したが、電脳メディアには、解放をさらに進めるべくトルと市民的自由を抑圧しかねない危険性が潜んでいる。なによりも双方方向の情報流通により、情報の生産と消費の境界が消え、だれもがグローバル社会に向かって情報を発信できるようになった。情報の収集、蓄積、検索も長足の進歩を遂げたが、半面、政府などがこれを乱用すれば、

グーテンベルクから四百年後に、C・ダーウィンの『種の起原』がもう一度、キリスト教世界の人間観を動転させた。それまでも進化論はあったが、科学として「創造主の神」を否定したところからダーウィンの衝撃があった。それから百年、人間が「神の領域」に手を突っ込んでからの生命科学の進歩も著しい。新しい生命倫理の確立が追い付かない。確かに遺伝子操作で難病治療に光明がさしているが、一方で「元々、人間一をつくる」とする試みは、不完全なものの統合として整合性がとれている自然界の摂理をねじ曲げかねない。（知の象徴）ミネソタのふくろは夕暮れになって飛び立つ（ヘーゲル）。時代を見抜く思想は成熟期に現れるという意味だが、グローバルも、電脳も、そして生命科学も、ようやく夜明けを迎えたところである。行き着くところが予測するのは難しい。だが、はっけりしているのは、せいぜいこの半世紀に起きた変革が、この千年紀に支配的だった価値や技術を覆し、時代をとてつもなく大きく変えていることだ。それを読み解けば、次の千年紀にますます重要になる人口・食糧・環境、宇宙などの問題を理解する手掛かりにもなる。

（編集委員 矢作弘）

年表～地球誕生・人類誕生から古代文明まで

50億年前	(46億年前)	地球誕生
40億年前	(39～38億年前)	海中で生命誕生 光合成を行うシアノバクテリア誕生
30億年前		真核細胞誕生
20億年前		細胞生物誕生
10億年前		カンブリア大爆発（種の大爆発）
5億年前	(5億7000万年前)	生命（植物と節足動物）の陸上進出 脊椎動物（魚類）の陸上進出
	(2億5000万年前)	哺乳類誕生
1億年前	(7000万年前)	恐竜絶滅
500万年前	(500万年前)	人類誕生 アウストラロピテクス（2足歩行） ホモ・ハビリス（道具の使用） ホモ・エレクトゥス（火の使用） ネアンデルタール人（最初の墓）
	(10～20万年前)	ホモ・サピエンス・サピエンス(現生人類) クロマニヨン人（美術の出現）
西暦紀元前		
前1万年	(前8000年)	最後の氷河期が終わる 農耕・牧畜開始 日本／縄文時代
	<古代文明>	
前5000年	(前5000～前2000年)	シュメール（メソポタミア南部）
	(前3400年頃)	最古の文字使用
前3000年	(前3000年頃)	鋤が使われる
	(前3000～前1000年)	古代エジプト（ナイル川流域）
	(前3000年頃)	ガラスが初めて作られる
	(前2500年頃)	ギザに大ピラミッド建設
	(前2800～前1750年)	バビロニア（ユーフラテス川流域）
	(前1750年頃)	ハンムラビ法典の成立
前2000年	(前2500～前1500年)	インダス（インダス川流域）
	(前2000～前30年)	古代ギリシャ（ギリシャ及び小アジア）
	(前600年頃)	ギリシャで初めて貨幣使用
	(前1650～前1027年)	殷王朝（中国北東部）
	(前1500～1200年)	ラピタ（西太平洋諸島）
前1000年	(前1027～前771年)	周王朝（中国北東部）
	(前1000～1697年)	マヤ（中央アメリカ）
	(前750～前612年)	アッシリア(メソポタミア及びナイル川流域)
	(前632～前331年)	ペルシャ(エジプトからインダス川流域)
	(前200～400年)	古代ローマ(イギリスからペルシャ湾)

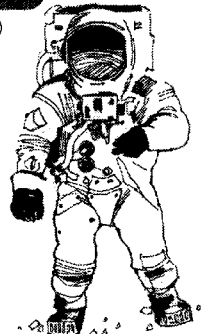
世界人口の推移と世界の歴史

(国連やコーリン・クラークの推計による)

●世界人口が10億人増えるのに要した年数

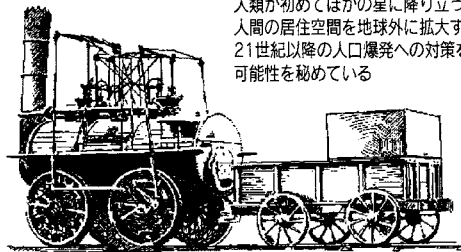
人類誕生→10億人	約200万年
10億人→20億人	123年
20億人→30億人	33年
30億人→40億人	14年
40億人→50億人	13年
50億人→60億人	12年(見込み)

(国連推計などによる)



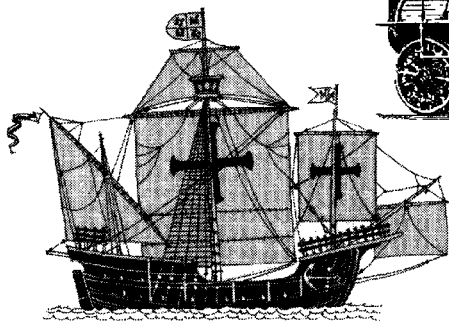
アポロ11号(1969年)

人類が初めてほかの星に降り立ったことは、人間の居住空間を地球外に拡大する道を開き、21世紀以降の人口爆発への対策を多様化する可能性を秘めている



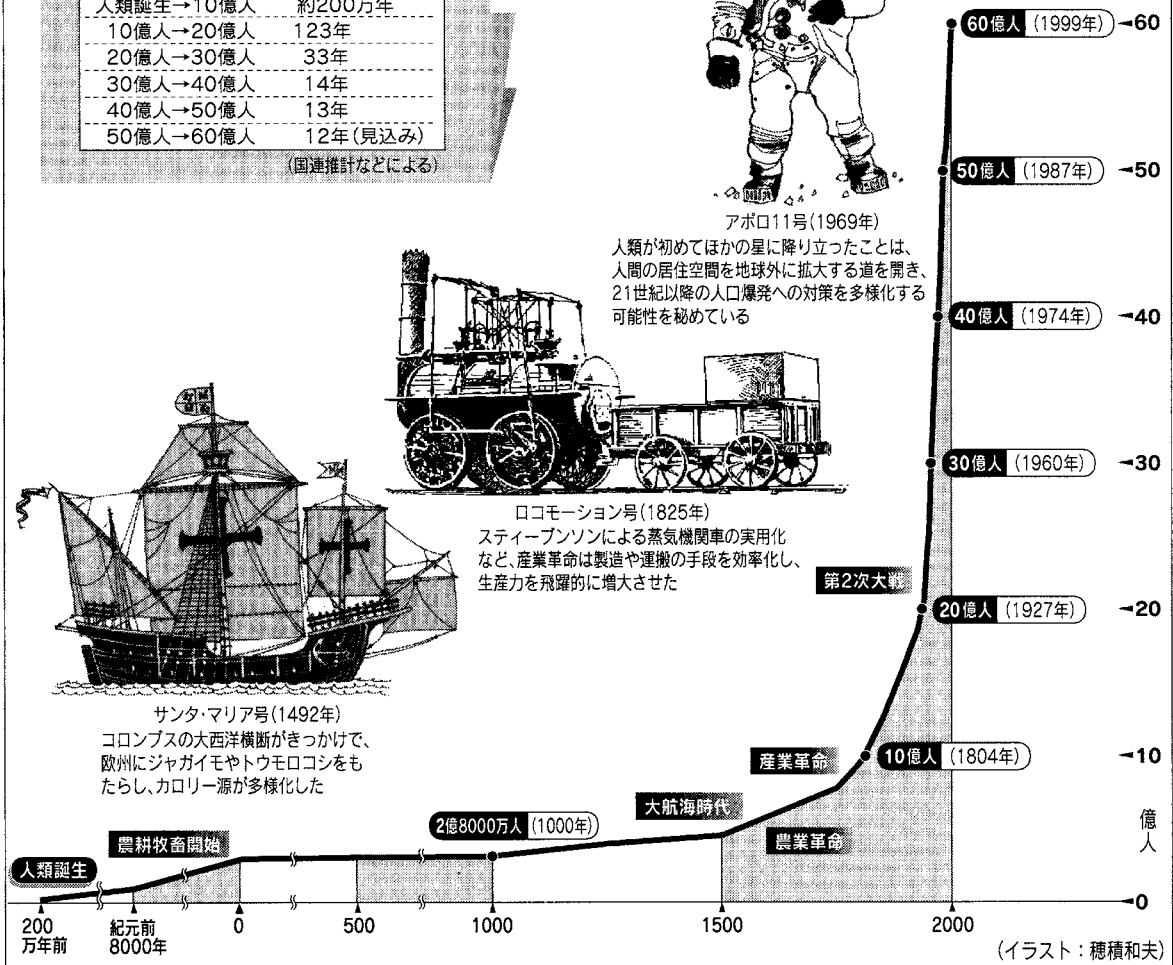
ロコモーション号(1825年)

ステューブソンによる蒸気機関車の実用化など、産業革命は製造や運搬の手段を効率化し、生産力を飛躍的に増大させた



サンタ・マリア号(1492年)

コロンブスの大西洋横断がきっかけで、欧州にジャガイモやトウモロコシをもたらし、カロリー源が多様化した



(日本経済新聞第2部ミレニアム特集 H 11.6.11)

この千年紀のメディアの発達史

- 5～15世紀 教会の僧が手紙で連絡をとり合う
- 1450年ごろ グーテンベルクが活版印刷技術を
発明
- 〃 15世紀後半に、それまでの写本の
数を上回る 800万冊の書物が印刷
されたという
- 16～18世紀 欧州に郵便が広がる
- 18世紀後半 産業革命
- ＜電気通信と放送の時代へ＞……………
- 1837年 (米) モールズが電信機を発明
- 1844年 (米) 電信機の実用化
- ＜今日の情報化社会の基礎を築く＞……………
- 1876年 (米) ベルが電話機を発明
- 1895年 (伊) マルコーニ、無線電信機を
発明
- 1920年 (米) ピッツバーグでラジオ放送
が始まる
- 1928年 (英) カラーテレビ実験に成功
- ▽以下、日本
- 1953年 テレビ放送開始
- 1960年 カラーテレビ本放送が始まる
- 1968年 ポケットベルサービスが登場
- 1969年 FM本放送開始
- 1973年 ファクスの全国サービス開始
- 1987年 携帯電話サービス始まる
- 1989年 衛星放送の本放送始まる
- 1990年代半ば～
- インターネットが急速に普及

(日本経済新聞第2部ミレニアム特集 H11.6.11)

千年紀記念事業 官民共同で推進

首相、競争力会議で表明

小渕恵三首相は五日、首相官邸で開いた産業競争力

会議で、二〇〇〇年が新たな千年紀（ミレニアム）の始まりとなるのを記念し、新産業の創出に向け官民が共同で取り組む「ミレニアムプロジェクト」を推進する方針を表明した。「高齢化、環境、情報化」の三分野を中心に、民間側の提案も取り入れながらプロジェクトの選定を進める。政府は省庁横断でプロジェクトに取り組み、二〇〇〇年度予算編成で予算を優先的に配分していく方針だ。

首相は席上「欧米各国では来年を新たな千年紀の始まりととらえ、記念事業が検討されつつある。我が国においてもミレニアムプロジェクトとも呼び得るよう官民挙げて求心力をもつて取り組めるようなプロジェクトとし、その実現に向けて検討を進めていきたい」と表明。内閣官房を中心に通産省など関係省庁が検討作業を進めるよう指示した。

首相は六月初めの前回合で高齢化、環境、情報化の三分野で官民合同の国家プロジェクトを進める意向を示し、経団連に具体案の提示を要請していた。これを受け経団連は超小型自動翻訳機やコンピュータの音声・視線入力システムを開発する「デジタル・ニューデイル構想」を提起した。ソニーの出井伸之社長は「まず東京都の完全情報都市化が必要だ」との意見を述べた。

政府は今後、具体的なプロジェクトの選定に入る。会合後に記者会見した与謝野馨通産相は「ミレニアムプロジェクトが中心となつて二十一世紀の新しい産業を創出していく」との見解を表明した。

(日本経済新聞夕刊 H11.7.5)

関西文化学術研究都市にある財団法人国際高等研究所では、「何を研究すべきかを研究する」ためのユニークな学際的共同研究を実施している。私も、「人類の自己家畜化現象と現代文明」という課題のプロジェクトを3年間お世話し、このたび無事終了することができた。

自己家畜化という概念は、ヒトの身体に野生動物とは違い、むしろ家畜に似た点があることに注目したドイツの人類学者によって、1930年代に提唱された。その基本には、ヒトが「文化」によって作り出した環境への適応を通じて、自己をあたかも家畜のように管理し、変えてきたとの考えがある。

われわれは、少々きついこの表現が、メタファー（隠喩）として現代文明下のヒトの危機的状況を理解する切り口になると考え、自然科学から人文・社会科学にいたる広い範囲の研究者を集めて共同研究を行った。

ヒトとペットを含む家畜の

間には多くの共通点がみられる。ヒトとサル、ブタとインシシ、イヌとオオカミのよう

に、近縁の野生動物と比べると、ヒトと家畜の間には、幽

霊な境界破壊、健康への不安、家庭の崩壊、こどもの教育な

どの大きな社会的問題はすべて、成人病や神経的状況にも

一致が見られる。これらは、ヒトが生物の大原則である自然淘汰から免れる文化的手段

に起きた平行現象で、いわば文明の影の部分である。

オーストリアの動物行動学者コンラート・ローレンツは、ノーベル賞を受賞した1973年に書いた「文明化した人間の八つの大罪」（日高

人類の自己家畜化に――考察

現代文明の危機にどう対処



尾本 恵市

おもと・けいichi 桃山学院大学教授（人類学、人類遺伝学）1993年東京都立大学名誉教授。著書に「分子人類学と日本人の起源」「ヒトはいかにして生まれたか」文化研究センター教授を経

てここに言い尽くされてい

る。しかし、個々の専門分野

からの対症療法的な発言は多

いが、そこにはローレンツが

指摘した文明とヒトの矛盾

には遺伝子ではなく、価値判

断にもとづく文化による適

応という過程が含まれる。

そして、人類の歴史からい

えれば、ごく短い過去1万年以内

の間に「文明」を発展させ、

一方的に人口増大を続けた。

しかし、この間にわれわれ

の行動の基礎となる遺伝的プ

ログラムは基本的に変わって

いないはずである。いかにえ

れば、脳は採集狩猟の段階の

ままであるのに、ヒトはいま

だかつて地球上に存在しな

かった科学技術文明によつて

たらされたあまりに急激な生

態系の変化に適応できないで

いる。

われわれが科学技術文明に

よつて大きな恩恵をうけてい

ることはいうまでもないが、

同時に地球全体にとって破壊

的な未来が予測されるという

危

界史の中で日本の評価が変

第3章

今、地球は——現状認識

世界の危機

東西冷戦は終結したものの、民族・宗教・文化の摩擦、地域や国家間の対立による紛争が絶えず、テロリズムの恐怖も去りません。

大気・水・土壌など生命をはぐくんできた自然の破壊が急速に進み、二酸化炭素の排出量増加による地球温暖化、フロンガスによるオゾン層破壊、地球の生命維持装置といえる森林の破壊、酸性雨、砂漠化などの環境問題は深刻化する一方です。

ダイオキシンをはじめとする環境に蓄積された化学合成物質が、生殖機能を破壊する「環境ホルモン」という、文字通り人類の生存を根本から脅かす問題も浮上してきました。

異常気象、開発途上国での人口爆発、これに加えて、耕地面積の減少や水産資源の枯渇による、世界的な食糧不足が心配されます。

石油・天然ガスであと40年、石炭もあと100年で枯渇すると予測され、資源・エネルギー危機も目前に迫っています。

さらに差し迫った危機は、経済危機です。

アジア発の通貨・金融危機はロシア・中南米を経て、世界の経済成長を牽引してきたアメリカにまで波及し、ヘッジファンドの破綻など金融界に大きな衝撃を与えました。国境を越えて瞬時に移動する、巨額の電子マネーが引き起こした世界規模の危機の連鎖でした。

世界は今、一触即発、世界恐慌、人類の破滅に至る崖っぷちに立たされています。

アジアの危機

97年半ばのタイの通貨暴落に端を発した金融危機は「アジアの奇跡」「世界の成長センター」といわれてきたアジア諸国の経済の土台を揺るがしました。その結果、タイをはじめインドネシア、韓国などがIMF（国際通貨基金）の管理下に置かれ、各国とも厳しい支援条件のもと企業倒産が相次ぎ、失業者が急増し、中にはインドネシアのように政治・経済に対する不満から群衆の暴動が発生している国もあります。

アジアの一員である日本はそれらの国々の大きな輸出先であり、アジア経済再起のためにも、不良債権処理や金融システムの安定化が急務になっています。

しかし、アジア諸国に膨大な投資をしてきた日本の銀行や企業は、アジアの経済危機で深刻な打撃を受けており、それが金融問題処理の足かせのひとつになっているという悪循環に陥っています。

経済危機の渦中にある韓国では、金大中大統領が登場し、民間の経済交流を活性化させ、北朝鮮との関係改善をめざす「太陽政策」を打ち出しました。韓国の財閥・現代グループの主催する北朝鮮の景勝地・金剛山観光事業もスタートを切りました。

その一方で、食糧危機の真っ只中にある北朝鮮は「テポドン」を発射。日本の緊張は一気に高まり、朝鮮半島が依然、世界の火薬庫の一つであることを改めて印象づけました。

日韓関係においても、漁業交渉の基本合意が得られた後も、漁業問題と竹島（独島）の領有権問題がくすぶり続けています。

中国、韓国・北朝鮮をはじめアジアの関係諸国との間では、歴史問題が解決されていないため、外交問題の解決にはつねに困難がともないます。

こうした中、去る98年11月、江沢民主席が中国の国家元首として初めて来日。その際、日本は「1930年代から全面的な対中国侵略戦争を起こし、その結果、中国は軍民3500万人が死傷し、6000億ドル以上の経済的損失を被った」と数字をあげて数回にわたり講演。具体的な被害規模について、中国要人が日本国内で触れたのは初めてのことでした。さらに、宮中晩餐会に、中国側は全員「中山服」に

て出席。こうしたことの意味をよく考えてみる必要があります。

また、在日外国人の参政権問題が論議されていますが、在日韓国・朝鮮人の生まれた歴史的経緯と、この問題が取り上げられるまで50余年もかかったのはなぜかという点も含め、国民の共通認識化を図る中で結論を出すべきだと考えます。

世紀末の今こそ、20世紀を総括、先送りされてきた多くの問題を総合的にとらえ、長期的・多面的・根源的な議論を起こし、未来への道筋を見出さなくてはなりません。

放置すれば、現在のアジア経済危機とリンクし、不測の事態さえ懸念されます。

日本の危機

日本国内では、バブル崩壊以降、様々な問題が一気に表面化しました。

不良債権と銀行・証券の不祥事に起因する金融不安、政治家・官僚の汚職、企業倒産、失業者の激増、子供たちの残虐な犯罪、司法の腐敗など枚挙にいとまがありません。

不況対策への税金投入と税収の減少により、財政は破綻状態です。1999年度末の国と地方自治体を合わせた借金は、98年度国内総生産（GDP）495兆円の1.2倍に当たる600兆円という金額に達しています。赤ちゃんや老人まで含めて、国民一人あたり約480万円もの借金を背負っていることになります。

行財政改革や経済構造の改革が叫ばれてはいますが、政・官・業の癒着構造の中で利益を享受してきた既得権益層の抵抗にはばまれて、遅々として進んでいません。

さらに、少子・高齢化、地方都市と農村の荒廃などの問題も深刻で、日本は暗黒のトンネルに入ったといわれています。

とくに最近、北朝鮮の「テポドン」発射に象徴される朝鮮半島情勢、無気味な様相を帯びてきた金融危機、失業者の増加、オウム真理教によるサリン事件以来ひんぱんに起きる毒物混入事件、自殺者の激増、政・官・財界の指導的立場にある人たちの汚職・疑獄事件の頻発など、社会に不安・不満が高まり、徐々に無気力と怒りが充満しつつあるように見えます。

転換か滅亡か

これら国内外の諸問題が、一気に表面化してきたのは偶然の所産でしょうか。さかのぼれば、1971年のドルショック、73年のオイルショックの頃を境に、戦後世界は揺らぎ始めました。そして1989年、東西冷戦が終焉を迎えて以降、新たな激動期に突入しました。

ソ連の崩壊は、社会主義計画経済の敗北、資本主義市場経済の勝利と喧伝されました。ところが、投機的な資金によって攪乱される金融市場が象徴するように、資本主義社会も混迷の度を深めています。

18世紀末、イギリスから始まった産業革命が、近代工業社会＝近代資本主義の出発点でした。

近代以前、人類は飢えと殺戮の恐怖に脅かされていました。その状況を克服するため規範と原則を定め、科学・技術の振興を図ることにより生存基盤を確立し、その長期的な安定化のため戦争を繰り返していました。

その間、平和時には科学が、戦時には技術が急速に進歩しました。この繰り返しの中、イギリスで産業革命が起こり、ヨーロッパ諸国、そして日本に伝播^{でんぱ}。生活環境の劇的な向上と、戦争形態の大規模化を経て、近代工業社会と資本主義経済システムが生み出されました。

そして第2次世界大戦中に核兵器が開発され、世界で初めて日本の広島・長崎に投下されました。核兵器の威力は広く世界に知れ渡り、その後、政治・経済的紛争を全面戦争で解決する道が閉ざされ、世界冷戦へとつながりました。

日本はその狭間で世界で類例のない大量生産・大量消費・大量廃棄のシステムを確立、経済的繁栄を謳歌してきました。その結果、近年とくにその負の部分が顕在化し、人心の荒廃と廃棄物の山を生み出し、だれの目にも継続不可能なことは明らかになってきました。

今、「飢餓と殺戮のない社会をつくるため」から「楽しく愉快に持続的に生きられる社会をつくるため」へ社会システムと科学・技術の方向を転換しなければ、日本のみならず地球と人類は滅亡への道を転げ落ちることになります。

子供たちが暗黒社会の到来を敏感に察知

日本は明治以来、欧米列強の圧迫に抗するため富国強兵策を取りました。その具現化のため諸制度と交通体系の整備、殖産興業、そしてその根源的システムとして教育制度の確立が図られました。貧しい生活の中で我欲が肥大化する環境を与え、原則・思想・恥の概念を植え付けることにより死に対する恐怖を昇華させ、同時に数字の教育を施すことにより大量・良質な工員と兵士（アブラハム・マズローの集団・尊厳欲求レベル）を生み出すことに成功しました。

日清・日露戦争の勝利、第1次大戦の軍需景気を経て、規格大量生産の工業化社会の仕組が完成したのは昭和16年（1941）のこととされています。

軍・官僚主導による戦時経済体制は、戦後も持ち越され、衣食住の極端に窮乏した戦後復興時に最も有効に機能し、アメリカの占領政策と東西冷戦構造の長期化のもと、世界で類例のない短期間での復興・繁栄を実現、「官僚神話」につながりました。

この過程においていったんは成功したかに見えたこの仕組も、そこに含まれていた官僚主導、土地本位制、メインバンク・株の持ち合い制、変動為替制度、金融派生商品等の要因が複合して資産バブルとその崩壊を招き、出口の見えない世紀末に至っています。今、大問題になっている子供たちの心の荒廃と廃棄物の山はこれを最も端的に表しています。

大量生産・大量消費は、衣食住の足りた、天寿を全うできる社会をつくるためには効率的な手法でした。しかし、先進国では、すでに衣食住が足り、天寿を全うできる社会に移行しています。

社会システム、教育も21世紀の「楽しく愉快地持続的に生きられる地球社会の創造」にふさわしい「人物」が生まれるよう、転換されなければなりません。

ところが、打たれる数々の施策はますます混乱に拍車をかけ、一時的には効果があるように見えますが、本質的には旧時代のままであり、将来国民を再起不能な状態に追い込む以外のなにものでもないように思えます。

子供たち自身が、暗黒の社会の到来を敏感に察知しており、その不安が、続発する少年事件の原因になっているのではないのでしょうか。

夢のない日本

「21世紀は希望の社会」 4カ国で最低

「人類にとって21世紀は希望のある社会になる」と考えている高校生は中国で89%、米国64%、韓国63%に対し、日本はわずか34%。文部省所管の財団法人「日本青少年研究所」(千石保理事長)が13日に公表した4カ国の中・高校生の意識調査でこうした結果が明らかになった。さらに日本の中・高校生の人生の目標では「その日その日を楽しく暮らす」が支持され、将来の希望の職業は、中学生では「公務員」について「アルバイト」が人気に。調査の報告書は「他国に比べ日本の生徒は将来に対する夢や希望が極端に少ない」と結論づけている。

報告書は「中学生・高校生の21世紀の夢に関する調

人生「その日を楽しく」

査」。昨年未から今年2月にかけて4カ国の中学生と高校生それぞれ約1000人ずつ、計8000人に調査した。

「国民生活は今より豊かになるだろう」と答えたのは中国、米国の中・高校生で8割、韓国でも7割近くあったが、日本は3割にとどまった。「希望のある社会になる」という回答同様、日本の中・高校生の悲観的な意識が目立っている。

「将来就きたい職業」を26の職種から複数回答で選んだ結果では、日本では中・高校生とも「公務員」が最も高く(中26%、高32%)、

教育評論家、尾木直樹氏の話「21世紀に希望が持てない、今を楽しむという生徒が多いのは至極、当然の結果ではないか。失業が増える中、大人自身が自信を喪失し、社会に大きな不満を持っている。中・高校生はそれを敏感に感じとる。」

希望の職業は「公務員」

(毎日新聞 H11.5.19)

第4章

何をなすべきか

危機をチャンスに

複雑に入り組んだ諸問題に対して、現在の社会の枠組の中には、どんな解決策もありません。

これらの問題を一つひとつ解決しようとするとう袋小路に入ってしまう。ところが、すべてを一度に解決するのは意外に簡単です。

今日まで繁栄を続けている文明圏の歴史をひもとくと、社会が行き詰まったとき、従来の価値観を最大限に活用、問題の本質を解決するための糸口となる「巨大プロジェクト」が立ち上げられています。立案・議論・研究・企画・建設・運営というプロセスの中で、たくみな施策と富の再配分を通じて意識変革を進め、次の時代を担う人物の創出をうながし、新しい文化と文明の創造に成功、今日の繁栄につながっていることに気づきます。

日本では明治以降、欧米列強の外圧と報道媒体をたくみに活用、恥と義務と強迫観念の文化を普及させ、国家とその関連機関の要求に対して「志願」「納入」で積極的に応える国民を養成してきました。

そして日清・日露戦争の勝利、第1次世界大戦特需を経る中で生活向上意欲が高まり、欧米からの生産財の輸入に加え、生活様式も流入するようになりました。これを背景に、松下幸之助氏に代表される、創意工夫とマーケティングの「企業家の時代」を迎えました。

この間、卓越したリーダー不在の中、持続不可能な金融システム、国債の大量発行、郵便貯金を財源とした財政投融资の不適切な運用などにより、いびつな社会インフラの建設と極端な需要の先食いが行われました。それによりバブルが起き、またバブル崩壊後の底無し不況の原因ともなっています。

同時に、現状に対する不満と未来に対する不安が高まり、多くの人たちが無力

感に襲われ生命力が落ち、これが少子化と病気につながり、また過去最高の自殺者数を記録する事態になっています。

このような社会状況下、「不安を安心」「不満を満足」「怒りを喜び」に——危機をチャンスに——変えるべく構想されたプロジェクトが、この『太陽の國出雲——地球ユートピアモデル事業——』です。

危機をチャンスに

飢餓と殺戮に対する恐怖が人々の意識の中で顕在化しているときは、その恐怖から逃れるため、大量の物資が必要な「物」の時代です。

その恐怖が顕在化しなくなったら、「楽しく愉快に持続的に生きられる地球社会の創造」という次の時代の目的に向かって、その具現化のプロセスの中で「心の進化と満足」を得られるシステムに転換しなければなりません。

この転換の遅れが脱却困難な財政赤字の膨張と、政・官・業の既得権益層のさらなる癒着・硬直化につながり、日本の改革をいっそう困難にしています。

このことは既得権益に連なる人々の思考能力を奪い、極端な場合には人格崩壊にまで追い込むことになります。

また、未来を担う若者の中に無力感が急速に広まり、奇怪な事件も全国的に多発、天変地異や内外の人為的な事件をきっかけとする連鎖的な社会崩壊現象が懸念される状況となっています。

では今、何をなすべきでしょうか。

つねに危機意識をもって自らの態勢をつくり上げてきた、既存の業界と縁の薄い民間人が中心となり、危機意識を共有する学識経験者・政治家・官僚と連携し、閉塞状況を打破するため、地政学、歴史、そして現状とここに至る背景・原因・経緯を議論する。

この議論を通して、国家および地方が国際共生社会で生かされるために担うべき役割が明確になり、国・地方・企業・その他の団体・個人各々の役割が見えてくるのではないのでしょうか。

「官」は「政」「民」の依頼による議論の場の設定、事業が効率的に進展する

ためのコーディネート、関係機関・個人間の調整、法律や税など制度面でのサポートなどを行う。

「政」は、社会の進むべき方向を示し、「民」が提示したアイデア、もしくは自らのアイデアを、「官」の設定した「政」「民」合同の会議に、議論のきっかけとして提供する。開かれた議論によってまとまった事業計画の遂行を決断し、責任を負う。「民」の意欲、創意工夫と勇気をさらに高めるため、功績の表彰と広報を行う。また、国内外の地域間の役割分担を調整する。

今、このような政・官・民の新しい役割分担を確立する転換期を迎えています。

さらに、これからの公共事業は、たんなる社会インフラ整備にとどまっていたは改革につながりません。ビッグプロジェクト遂行のプロセスの中で合理的な価格形成と新産業の創出が促進され、「自己本位から他者への思いやりと共生」、「利己主義から利他主義」へと心が進化し、自立的に行動する志を持った「人物」を生み出すようなありかたを模索していく必要があります。

ここに、公共事業改革を契機とした、21世紀に向けたパラダイムシフトの糸口があります。

「出雲」の歴史的・地政学的意味

出雲中海・宍道湖圏は朝鮮半島の対岸に位置し、北西の季節風と対馬海流により、古来より大陸・半島の様々な影響を受けてきました。ローマ、ペルシャより発したシルクロードはユーラシア大陸を横断、朝鮮半島を経て日本海を渡り、出雲の地に達し、終着地の奈良・京都に文化の華を咲かせました。

出雲は大陸・半島文化の上陸地点、また日本文化の出発地点として、古来「緑むすびの国」とされ、多くの人々の交流により独自の出雲文化を形成してきました。

明治時代、松江で教鞭を執ったラフカディオ・ハーンは、著作の中で、出雲を「神々の国の首都」「民族の揺籠」といっています。今日なお、豊かな歴史遺産と自然環境とが保たれています。

一方、島根県は戦前の富国強兵策、戦後の経済大国化政策から縁の薄かった特

異な地域として、日本の過去・現在・未来が凝縮され、今を生きる人類の抱えるテーマを考えさせられます。

とくに近年、高齢化と人口減少が急速に進んでいます。経済的には、ほとんど大部分を地方交付税交付金、補助金に依存してきました。その弊害は様々な面に及んでいます。

変化が激しく先行き不透明な中で、国際化のますます進む21世紀の世界には適応の難しい、依頼心と現状維持志向の強い県民性が根づいています。

地元生え抜きの製造業に全国展開の上場企業は1社もありません。既得権益を固守しようとする政・官・業の相互依存体質が民間企業の自立心をむしばんでいます。近年、ベンチャー企業育成が叫ばれる全国的な流れの中で、県内でも様々な施策が採られていますが、それは形だけのものがほとんどで、新興企業の台頭を妨害しているのが実態です。しかも始末の悪いことに、「妨害している」という自覚はなく、「支援をしている」と思い込んでいるようにさえ感じられます。

また、都市の中心部の空洞化が進み、街中での独居老人の孤独死という深刻な問題も発生しています。

韓国とは竹島（韓国名・独島）の領有権問題を抱え、こじれにこじれている北朝鮮に最も近い所に位置しています。

このような現状を認識し、歴史的・地政学的に考察する中から、出雲の果たすべき役割、使命が浮き彫りになってきます。

出雲こそ、過去から未来に向かう歴史的な時間軸に沿って、人の心の進化をうながすパラダイムシフトをめざした事業を立ち上げるのに、格好のインフラが整った地といえます。

「楽しく愉快に持続的に生きられる人づくりのための社会の枠組づくり、事おこし、物づくり」の実践の過程での人との出会いを通じて目的に目覚め、それを具現化するための目標を定めて行動を起こす「人物」。すなわち「21世紀社会のリーダー」の資質を持った方が集まり、切磋琢磨し、次々と育つ仕組と場を創り出す。

その結果出雲に、人類の進むべき道筋を模索するために、世界各地から人々が集まり、さらに出雲での実験をモデルとして、世界各地に各種の事業が誕生する。こうして、出雲発の日本の構造改革のためのプロジェクトが世界に波及し、「持

「持続可能な地球社会の創造」につながる流れをつくり出すことに通じる。

これが、本構想の趣意です。

この取組は、それぞれ独自の歴史的・地政学的な背景を持つ地域間の「役割分担・進捗度競争」を誘発するものです。これにより、競争と共生が矛盾なく両立、心の進化を促す「場」、輝かしい21世紀文明誕生の地となることも夢ではありません。

米子、松江、出雲の3市 環日本海交流拠点に

第4次
中国地方
開発計画案まとまる

国土審

国土審議会（首相の諮問機関）の中国地方開発特別委員会は十八日、第四次中国地方開発促進計画（目標「多軸・分散ネットワーク型発展」を目指し、長期的に日本海、西日本両国土軸年次二〇一〇―二〇一五年）案をまとめた。大小の

決定する。第五次の全国総合開発計画を受けた同開発促進計画は、今後の中国地方の自治体の施策に反映される。計画は①分散型都市が連

携②多自然居住地域の創造③産業集積を生かし創造的産業社会へ転換④世界に貢献し交流する中国一を重点課題とし、四国地方と密接に結びつく「環三海二山交流圏」の可能性にも着目した。

都市間の連携促進では、規模に応じた役割分担を提示。瀬戸内海側は広島圏、岡山・倉敷圏が中枢拠点となり、東広島、呉、岩国市などの近隣都市圏と機能分担を図る一方、松江、米子、出雲市を「環日本海交流」の拠点とする方向を打ち出した。

こうした多軸・分散ネットワーク型発展のため、山陰自動車道、中国横断自動車道などの整備を進める。関門海峡道路構想は、周辺への影響や費用対効果などを検討する。

産業面では、自動車、造船、セメントなどの産業集積を生かして構造転換と高度化を図るべきだと指摘。地域産業や中小企業の活性化のため、松江市のソフトビジネスパークなどを整備し産業・研究拠点を形成。新産業創出や新規分野への展開に向け、産学官のネットワークを整備する。

（日本海新聞 H11. 3. 19）

第5章

4大プロジェクト

21世紀を切り拓く根源的自己発展型プロジェクト

21世紀に向かって新たなスタートを切るため、日本文化の原点たる出雲の地に、具体的な事業の場を創出。

議論・研究・構想・調査・企画・設計・建設・運営、そして投資、寄付のプロセスを通して心の進化を促し、新しい時代の政・官・民の役割を確立する糸口を見出します。

各々の参加者が、事業の役割分担によって、人類究極の目的に目覚め、その目的を具現化するために、各人が立脚している基盤、置かれている環境に応じて定めた目標の実現に向かって行動を起こす機会を提供。

そのために、次の4つのプロジェクトからなる『太陽の國出雲——地球ユートピアモデル事業——』構想を提案します。

本構想においては、以下の4大プロジェクトを推進。

◇心のインフラ整備

人縁・感謝と戦争の歴史記念館

◇心の首都（松江市市街地再開発構想）

◇ゼロエミッション・小規模理想郷（中海・宍道湖圏域の新構想）

◇未来を拓く研究・教育機関

（以上の各プロジェクト名は、現段階での仮称です）

これは、10年の歳月をかけて、大恐慌脱出、夢とロマンに満ちた21世紀を切り拓く根源的自己発展型プロジェクトとして起案されたものです。

今日の根源的な問題は相互信頼関係の喪失という社会問題と環境問題です。

本プロジェクトは、この2つの問題を解決する糸口を見出すため、各プロセスを関係諸国と、このプロジェクトに関心のある世界の方々との「共創」で推進。世紀末の閉塞感を打破、人類の新たな歴史の第一歩につなげることをめざして構想されたものです。

1. 心のインフラ整備

人縁・感謝と戦争の歴史記念館

趣旨・概要

本プロジェクトは、人類の進化と恒久平和のための最も貴重な財産——人間の勇気と悲しみ、英知と血の結晶としての「知的共有財産」の構築をめざすものです。

東洋と西洋の文明・文化が長い歴史の中で融合、そして現在の日本があります。人と人との出会いによって伝えられ、練り上げられた知識や技術が日本の発展の原動力でした。

出会いを「陽」とすれば、人類の歴史には戦争という「陰」の面もあります。DNAの螺旋構造、^{らせん}「出雲大社」のしめ縄のように、時間軸の中で陰陽からまり合って今日に至っています。この陰陽両面を直視しなければ、未来に向けて新たなパラダイムは構築できません。

海外から日本に知識や技術をもたらした「人」と、それを受けとめ発展させた「人」に焦点を当て、日本と歴史的に関わりのあった国々に協力を願い、史実を調査、展示。

過去の戦争に関しては、関係諸国に協力を願って、被害国・加害国となった背景・原因・経緯を調査・研究、議論を行う中で、当事国双方の中に共通の事実認識が生まれたものから未来志向で昇華。

その成果を、世界の平和と繁栄に資する人類共有の知的財産として、現代を生きる当事国の両国民と世界の人々およびその子孫にわかりやすく展示する「心のインフラ整備」としての記念館です。

この最も基本的な財産の構築を怠れば、今を生きる人たちは将来「子孫に対する義務と責任を放棄した世代」「人間としての基本的な要件を備えていなかった世代」という指弾を免れないばかりではなく、日本は混乱の極みに至り、急速に内部崩壊することは明らかです。

本プロジェクトの議論・研究・構想・調査・企画・設計・建設・運営という流れの中で、信頼関係が深まる環境が整うものと考えます。

そして、日本に対する世界の信頼回復にも道筋がつき、歴史の重圧に苦しむ世界の人々にとってモデルケースとなり、世界各地に同じようなプロジェクトが動き出し、「持続可能な地球社会の創造」につながることを確信するものです。



心のインフラ整備——人縁・感謝と戦争の歴史記念館
イメージ



「未来に向かって確かな一歩。
竹島(独島)に、
地球共生・縁結びの像を」
イメージ

〈提言〉

竹島＝独島を地球共生縁むすびの島に

「われわれ両国が善き隣人、善き友人同士として手を握り、21世紀を開拓していくのに、克服できない障害はありません」。韓国の金大中大統領は日本の国会でこう演説されました。各国国民が、文化・技術・経済の活発な交流によって、豊かで生きがいのある人類共生の未来を切り拓く。そのために重要なのは「善き隣人、善き友人同士」としての信頼関係という「心のインフラ」です。この後世に残す最も基本的な財産の構築を怠ることは、金大統領も言われたように、「将来の子孫に対して恥ずかしく、かつ、指弾されるべきこと」です。

私たちは「天寿が全うでき、楽しく愉快に持続的に生きられる地球社会の創造」という人類の根源的にして究極の目的に向かって応分の役割を担うことが21世紀において「共生できる人間の条件」であると考えます。では、今を生きる日韓両国民と在日韓国人はどんな役割を担えばいいのか——それは両国の地政学的な位置と歴史の両面に照らせば自ずと明らかになってきます。

私たちは「人縁・感謝と戦争の歴史記念館」をインターナショナル・プロジェクトとして建設する構想を提案しています。日本の国際交流の歴史を「人」に焦点を当て、日本と歴史的に関わりのあった国々の方にご協力をお願いし、史実を調査。一方、過去の戦争に関しても、関係諸国の方々にご協力を願って事実の調査を行い、当事国双方が共通の認識に至った事実の背景・原因・経緯を検証します。その成果を、世界の平和と繁栄に資する人類共有の知的財産として、現代を生きる世界の人々と子孫にわかりやすく、未来志向で展示する記念館です。

私は今、「善き隣人、善き友人同士」として日韓両国民と在日韓国人も、独自の共同事業を立ち上げるときがきたと考えます。

金大中大統領訪日時の国会演説により、新しい日韓関係が開かれたことを契機に、竹島＝独島にモニュメントを建設し、「地球共生・縁むすびの島」にしようではありませんか。現代グループの鄭周永名誉会長のご努力により開始された金剛山観光事業とリンクさせていただければ、日本の境港、竹島＝独島、束草市、金剛山を結ぶルートで「地球共生・縁むすびクルージング・ツアー」の企画も可能となります。出会いを通じて、各人が21世紀の世界で、どんな役割を担い、どう行動していけばよいかを考える糸口を見出す。これが「地球共生・縁むすび」の意味です。

このプロジェクトにご興味のある方、ご連絡をお待ちいたしております。

(<http://www.hns.gr.jp>)

島根の小松電機産業

韓国企業と業務提携

シートシャッターを販売

将来は現地生産も

小松電機産業（島根県八雲町、小松昭夫社長）は十六日、オリジナル商品のシートシャッターを韓国で販売するため、韓国企業と業務提携を結んだ。初年度は年間百台の製品輸出を目標にするが、今後の需要拡大が見込まれるため、二、三年後には技術提携を強化しKD（現地組み立て）生産を計画している。小松電機産業は昨年からは台湾で試験販売を開始し、今回の業務提携に続いてドイツ、アメリカでも販売ネットワークの検討するなど海外戦略を強めている。

小松電機産業と業務提携 設計業の東友TRADING
したのは、貿易・工場設備 G&ENGINEERING



業務提携調印後に握手する、右から小松電機産業の小松昭夫社長と韓国側の曹秀煥、秋成泰代表

G社（ソウル市、曹秀煥代表）。韓国は大陸的気候から冬は氷点下〇度以下、夏は四〇度近くにもなる。作業環境の改善、省エネについての関心が高く、シートシャッターを六月から試験販売したところ、大手の家電、自動車メーカーが三千台を導入。その後、引き合いも多いことから正式に業務提携することにした。

当面は東友が韓国の総代理店となり、販売・アフターケアを担当。東友は来年、シートシャッターの製造、組み立て工場を建設する予定で、工場完成後、提携をさらに強化し、韓国での製造・販売拠点になる。韓国での販売目標は、本年度（平成三年三月末まで）百台、来年度が五百台。ブランド名は日本と同じ「門番」で、既に韓国で商標登録している。

この日、松江市内のホテルで開かれた調印式には、

小松社長、東友の曹秀煥、秋成泰代表が出席。提携書に調印し、今後の関係強化を確認した。

シートシャッターは小松電機産業が昭和六十年に開発。超音波センサーで接近する車両などを検知し、ビニール製のシャッターが自動開閉する仕組み。高速で自動開閉できるため、冷暖房の必要な工場、倉庫で利用され、ヒット商品になっている。平成二年七月期の売上高は二十四億円で、シートシャッター三千五百台を販売。三年七月期は五千五百台の販売を計画している。

（山陰中央新報 H2.10.17）

◎企業家から社会改革家へ

東宇技研株式会社 代表理事 曹秀煥

1990年4月半ば、私は初めて出雲空港に降り立ちました。空港で名刺交換をすますと、小松社長は私を会社にではなく、まず出雲大社に案内してくださいました。参拝後、境内を1時間ほど散策しながら、出雲の歴史、日韓・日中関係の歴史的な経緯などについて話され、私も自分なりの歴史観や世界観について、心を開いてお話ししました。

ビジネスの話は最後の数分間だけでした。しかも、シートシャッター「門番」を私の会社（当時は東友トレーディング&エンジニアリング）が韓国で販売するという話が、ものの5分で決まったのです。当時、他の韓国企業多数から引き合いがきている状況下での即断即決でした。

小松社長は後に、ある雑誌の記事の中で、「東友さんを選んだのは、私と向こうの社長が意見をぶつけ合うなかで、同じ理想をもっていることを確認したからです」と述べておられます。こんな見識の高い日本人に、私は初めて会いました。仕事で日本に100回以上も出張した経験のある私の日本人に対するイメージは「細かな話にこだわって、決断がとても遅い」というものでした。小松社長は、私のそんなイメージを打ち破る、大きな人物でした。

その第1回目の面談で、「半年間テスト販売をし、正式の業務提携は10月」と決まり、1992年2月には、小松社長の「友好関係で結ばれた企業ネットワークによる世界展開」というビジョンのもと、製造技術、設計図とも無償提供いただき、現地生産を始めました。

今では、小松社長を「兄貴」のように思っています。意見があれば面と向かって、率直に言うようにしています。相談事は、まるで同じ会社の中のように、実に簡単に解決します。

そして、直接会っているときは、仕事の話はほんの2～3%の時間だけというのは今も変わりません。しかし、1990年当時の小松社長が一企業家だったとすれば、今の小松社長は社会改革家の面が強くなっているように感じられます。これは大きな変化です。

人間と自然、人間と科学、国と国といった関係を根本から見直し、調和の取れたものにする。そのハーモニーが、小松社長の掲げておられるユートピアだろうと私は理解しています。これは大事業です。とくに大きな変化を断行することが苦手のように見える日本では難事業だと拝察します。

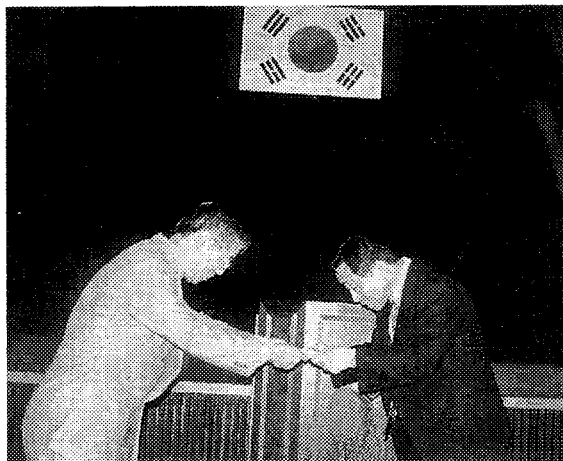
しかし、果敢な行動力で築いてこられた同志のネットワークが力を発揮すれば、大きな夢が現実のものになることを、私は信じております。

「歴史を共有したい」韓国・独立記念館に寄付

島根の小松電機産業

小松電機産業（島根県八束郡）の小松昭夫社長（53）は21日、韓国の独立記念館に100万円を贈呈した。同社は95年から毎年、社員研修で同記念館を訪れている。「歴史を共有し、韓日両国の発展の礎になりたい」と、小松社長は動機を語った。

（東京本社・李相兌）



朴維徹・独立記念館館長（右）に100万円を手渡す小松昭夫社長

社員研修で毎年訪韓 韓日親善にと100万円



小松昭夫社長

東宇技研（曹秀煥社長）と業務提携を結んだ。その曹社長に独立記念館を案内されたことが、転機になった。

「独立記念館を見て、この過去を直視し、どう未来に結び付けていくか真剣に考えた」（小松社長）結果、まず社員に見せる必要があると考え、95年に17人、96年に19人の韓国研修

小松社長が韓国とかわるようになったのは、同社の主力商品である「門番」（センサーで自動開閉し、空調・省エネ効果を高めるシャッター）が、韓国でも販売されるようになった90年からだ。

当時、日本国内で人気の高まっていた「門番」に対し、韓国での販売打診が大手の韓国企業などから来たが、小松社長は同じベンチャー企業という親近感で、視察団を派遣した。研修では「門番」を使用している三星電子水原工場を見学した後、独立記念館を訪れ、帰国後は社員に報告書をまとめさせるなど、韓日現代史の知識を、社内全体で共有するように努めている。

第3回目の研修視察団は今月21日から24日まで行った。社員19人のほかに、取引先の企業関係者9人を含む28人で独立記念館を訪れたが、「日韓両国民の歴史認識が深まり、新たな人類の未来の活動の輪が広がることを願って」100万円を、独立記念館に寄贈した。

独立記念館側は当初、寄贈を辞退したが、「韓日親善に役立ててほしいという小松社長の熱意を尊重して受け取る」（朴維徹館長）ことに決定した。日本人の献金は、これが初めてである。

現在、小松社長は「人の縁と感謝・戦争の歴史記念館」建設構想を立てている。

出雲に戦争の歴史を展示する記念館と研究所を作ろうというもので、その展示物に独立記念館から協力を受けたいと朴館長らに相談、独立記念館の写真の一

部復写と、展示物の一部提供で内諾を得ている。「出雲の地から平和と共生社会の声を、世界に向けて発信したい」と、小松社長は抱負を語る。

（東洋経済日報 H9.6.27）



韓国の建国英雄の碑に日本人として初めて献花（1997年6月）



小松電機産業第3回訪韓研修団、独立記念館・朴維徹館長を囲んで（1997年6月）



日本の官憲による独立運動家への拷問の情景を再現した韓国「独立記念館」の蠟人形



修学旅行で、韓国「独立記念館」を訪れた日本の高校生



韓国の「独立記念館」はソウルから南に100kmの忠清南道天安にあります。約400万㎡の広大な敷地に、7つの展示館、民族の家など75棟（建坪約4万㎡）の施設が配置され、時系列で韓国の歴史を学習できるようになっています。

1982年に日本の教科書検定問題が日韓の外交問題に発展、反日感情が高まったことをきっかけに83年8月着工。以後4年の歳月をかけて、87年8月15日に開館しました。企業および広範な国民からの募金为建设費用に当てられました。

このため「独立記念館」は韓国国民で知らない人はいない施設になっていますが、日本人のツアー・コースに組み込まれることはありません。ただ、修学旅行は例外で、現在まで2万5千人を超える日本の高校生がこの記念館を見学、「とてもショックを受けた」「日本人に生まれたことが悲しい」といった感想文を残しています。

98年11月には、ソウル市内に「西大門刑務所歴史館」も開館。日本の植民地時代の独立運動家たちの精神を学ぶ歴史教育の場になっています。

韓国以外のアジアの国々でも、中国の12カ所を筆頭に、戦後、歴史記念館が次々に建設されており、41ページのリストの通り、アジア全体で30カ所を超えています。それらの記念館を多くの人々が訪れ続けているという現実があるのです。私たちはこの現実を踏まえて、今、何をなさねばならないか、考えてみる必要があるのではないのでしょうか。

●アジアの「戦争と平和」博物館

〈中国〉中国人民抗日戦争記念館、蘆溝橋、
九・一八事変博物館、
侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館、
侵華日軍第七三一部隊罪証陳列館、
東北烈士記念館、
孫呉県日本侵華罪証陳列館、
平頂山殉難同胞遺骨館、
撫順戦犯管理所陳列館、
張学良公館、中国人民革命軍事博物館、
中国革命博物館

〈台湾〉中正記念堂、霧社蜂起事件、
愛国乙女サヨン遭難之地碑

〈韓国〉独立記念館、安重根記念館、提岩教会、
戦争記念館、パゴダ公園、
西大門刑務所歴史館

〈朝鮮〉朝鮮革命博物館

〈ベトナム〉軍事博物館、ホーチミン廟、

ソンミ記念館、統一会堂、
クチの地下トンネル

〈カンボジア〉 ツールスレイン収容所、
キリングフィールド

〈タイ〉 カンチャナブリ戦争博物館、
JEATH戦争博物館、泰緬鉄道

〈シンガポール〉 セントサ島戦争資料館、晩晴園、
チャンギ刑務所博物館

〈日本〉 広島平和記念資料館、長崎原爆資料館、
如己堂・永井記念館、
沖縄県立平和祈念資料館、
ひめゆり平和祈念資料館、
南風原文化センター、第五福竜丸展示館、
埼玉県平和資料館、川崎市平和館、
立命館大学国際平和ミュージアム、
大阪国際平和センター、
大久野島毒ガス資料館

문화 일보

1998년 7월 8일 수요일 23

요즈음

“일본 50代가 나서 韓·日관계 개선시켜야”

■ ‘韓赤에 대북지원금 5천만원’ 낸 대기업가 고마쓰 씨

일본 시마네(島根)현에서 벤처기업인 고마쓰(小松)전기산업을 운영하는 고마쓰 아키오(小松昭夫·54·사진) 사장이 7일 대한적십자사를 방문, 鄭元植(정원식) 총재에게 대북지원금 5백만원(5천만원 상당)을 전달했다. 그는 지난해에도 독립기념관 운영비로 1백만원(1천만원)을 회사한 바 있다.

—한국을 방문해서 대북지원금을 낸다는 게 쉽지 않은 일인데 한국과 특별한 인연이 있는가.

“시마네현이 한반도와 가까워 예부터 친근감을 갖고 있을 뿐이다. 또 30, 40대의 전후세대보다는 이 시대를 두루 체험한 50대들이 한·일 관계를 풀어야한다고 생각했다.”

—한쪽에 기부금을 낸 이유는.
“일본에도 적십자사는 있다. 그러



민간기구가 (일본)정부 눈치를 보며 지원사업조차 하지 않는데 대해 경종을 울리기 위해 한적을 찾았다.”

—대북지원작업에 참여하게 된 동기는.

“인간은 누구나 굶주리거나 부당하게 학대당하지 않고 편안하고 자유롭게 살 권리가 있다. 북한체제에 대한 견해는 다를 수 있지만 북한 사람

나 북송 일본인처고 항방문사업이 중단된 후에는 일본적십자사마저도 대북지원사업을 하지 않고 있다.

들도 최소한 인간적 대접을 받아야 한다는 생각을 갖고 지원금을 냈다.”

—앞으로도 대북지원사업을 할 계획이 있는가.

“돈 몇푼 주고 식량을 얼마 주는 것은 근본적인 치유책이 되지 못한다. 내년부터 북한 근로자들을 일본에서 고용, 북한에 경제적 도움을 주고 근로자들의 의식도 변화시키는 사업을 시작할 계획이다. 99년부터 건설 작업에 들어가는 시마네현 역사기념관에 북한노동력을 활용하는 방안을 적극 검토중이다.”

시마네현이 고향인 고마쓰 사장은 마쓰에공고 졸업 후 73년 고마쓰전기를 창업한 고졸출신 엔지니어이다. 85년 개발한 고속 자동문이 일본 전역에서 돌풍을 일으키며 벤처기업인으로 주목받고 있다. <李美淑기자>

(文化日報 H10.7.8)



大韓赤十字社·鄭元植總裁に北朝鮮食糧支援金500万円を寄贈 (1998年7月)

〈提言〉

日中、信頼回復への道

平成10年2月19日、島根県八束郡鹿島町の恵曇漁港に中国からの「集団密航」がありました。

その中に、李雪梅さんという25歳の妊婦が含まれていました。出入国管理法違反（不法入国）の罪に問われた李さんは、日本に来たのは中国の人口抑制策の下では2人目の子供を出産できず、「第2子出産のための緊急避難だ」と主張。

7月22日、松江地方裁判所で1審判決があり、長門栄吉裁判官は検察側の懲役1年の求刑に対し、密入国行為は有罪としながらも「心情は同情に値し、酌量すべき余地は大きい」と「刑免除」の判決を言い渡しました。李さんは、判決直後、出産を理由に広島入国管理局から1ヵ月間の仮放免の許可を得、島根県内の身元保証人に引き取られました。

これに対し、松江地方検察庁は判決を不服として、8月1日、理由を明らかにしないまま控訴。

その後、8月31日、李さんは松江市立病院で女兒を出産。女兒は日本国籍は取れませんでした。

弁護人の水野彰子弁護士は、国に李さんの難民認定（国籍のある国で社会的・政治的に迫害される恐れがある外国人が生活保護などの面で日本人と同じ待遇が受けられる保護制度）を申請していました。しかし、9月29日、広島入国管理局（法務省）は申請を不認定としました。これにより、10月末で在留期限が切れ、女兒ともに強制退去させられる可能性が出てきました。このため、李さんは10月1日、不認定に異議申し立てをしました。

強制送還の対象となった後も仮放免は認められていたため、李さんは島根県を出て、東京都内のボランティアグループの寮に身を寄せていました。その後、病気になり入院、女兒を児童相談所に預けました。ところが、平成11年1月8日、病院で診察を受けた後、ボランティアの付添人に「外の空気を吸ってくる」と言い残したまま、「日本語も話せない、所持金もない」という状態で失踪。女兒は児童相談所に預けられたままとなりました。毎月行う更新手続きの期日である1月20日になっても行方知れずで、28日には仮放免の期限も切れました。

2月15日、広島高裁松江支部（角田進裁判長）で、被告人不在のまま控訴審の初公判が行われました。その中で、弁護側は「この先の身の振り方に不安を抱き、将来を悲観した」と失踪の理由を説明、就労目的の逃走ではないことを強調しました。裁判は即日結審し、判決

は4月26日の予定でしたが、4月19日、「判決を直接言い渡すべき被告人が不在」ということで、無期延期となりました。

戦前、中国に日本軍が侵攻、そして敗戦の混乱時に、大陸には多くの日本人「残留孤児」が残されました。当時の厳しい政情と衣食住が極度に欠乏する中、中国の人々は自分の子供と偽って日本人の孤児を育ててくださいました。また、官憲の皆様も日本人の子供と知りながら、それを公にされませんでした。「戦争中、中国で残虐な行為を働いた日本人の子供とわかれば、どんな迫害に遭うかわからない。また成長した後、正業に就くことも難しくなる」との思いから、中国人の子供として育てていただいたはずです。

このような歴史的経緯と、近年、地域レベルでも姉妹都市縁組み等たくさんの方々の努力と費用をかけ、官民あげて国際親善が推進されている現状を考えれば、衣食住の満ち足りた現在の島根県で誕生した女兒のいる李雪梅さんに対して示した島根県司法当局（松江地検・裁判所・弁護士界）の対応は、国際親善に対するこれまでの努力を無にするものです。それにとどまらず、「人間としての基本的要件を備えていない」と言われても仕方がありません。

有罪か無罪か、刑の執行か免除かを論ずる以前に、日本の地で生を享けた女兒の将来について思いをめぐらせたことがあったでしょうか。母親が法廷の場に立たされたということ自体が、その子にとって、中国に帰ろうと日本で生きようと、あるいは世界のどこで生活しようと「国を捨てた密航者の子供」というレッテルが生涯つきまとうことを意味します。また、その女兒が将来出産する子供もまともな人生を歩むことが不可能になります。

憲法の根本的精神である「基本的人権の尊重」の意味を体得していれば、李雪梅さんを裁判にかけられないはずで、仮に起訴されたとしても、それを受理してはならず、弁護士も最初に「子供の将来を考えれば、この問題は法廷で扱うべきではない」と主張すべきではなかったでしょうか。

特権意識だけ肥大化し、自分の発言や行為が相手や周囲そして国際関係にどのような影響を及ぼすか考えることもできない、人間性の欠落した人々の集団「島根県司法界」……戦後の経済発展の過程でエコノミックアニマルといわれ世界で孤立化が進む中であって、今回の対応により、国家の要である司法界の実態が全国・世界に発信されてしまいました。

このように司法界の言動が一般社会と乖離する要因はいろいろありますが、なかでも社会との接点である弁護士界に大きな問題があるように思われます。独占禁止法に違反した弁護士料の協定料金制度、弁護士会に所属しなければ弁護士活動が不可能な閉鎖性、徒弟制度としての「いそろう弁護士制度」、一度資格を取れば一生審査がない「終身弁護士免許」。きわめつけは、島根県の弁護士会は、「非合法的な利益供与」として、裁判所内に弁護士事務所「待合室」という私的利益の提供を受けているという事実です。

これらにより、司法界内部の癒着が進み、裁判制度が司法界に属する人たちの権益と金儲けの道具になっているのが実態です。このため、裁判官、弁護士同士の馴れ合い体質を生み、かつ顧問弁護士制度を通じて政・官・財が癒着、社会を蝕む根源的理由となっています。

このような司法界の現状を放置すれば、島根県民・日本人全てが世界の人々に非人間的集団とみなされてしまいます。国民がこういうことを見過ごすことが戦争勃発の遠因となってきたことは歴史が示す通りです。世界唯一の平和憲法を持つ日本は、この点を最も重要視すべきではないでしょうか。

ここに、「国籍法を改正し、李雪梅さんの女兒に日本で初めての2重国籍実現」を提言します。成人に達するまで2重国籍を認め、制約のない生活環境を保証すべきです。

成人に達した後、子供本人に国籍選択権を行使させるのが、基本的人権を標榜する国家の本来のあり方ではないでしょうか。これを機会に、日本でも国籍について非論理的な「血統主義」から「出生地主義」へ転換・2重国籍実現を提唱いたします。

アメリカでは国内で生まれた子供はアメリカ国籍を取得できる「出生地主義」を取っています。これに対して「血統主義」の日本では、父親だと思われる人が外国籍の場合、日本国内で産まれた子供でも日本国籍を取得できません。最近、ドイツでは血統主義から出生地主義へ転換し2重国籍を認めようという議論が高まり、すでにフランスやベルギーでは帰化における2重国籍を容認しています。そんなことをすると、海外から膨大な数の人々が日本に押し寄せ、国内秩序が混乱すると危惧する人々がいます。

しかし、「出生地主義」への転換は、日系企業のアジアでの展開が急速に進み、食糧の70%以上、エネルギーの95%を輸入に依存、高齢化が進む日本が世界で生きていく上で必要不可欠ではないでしょうか。双方の文化を理解する人が日本国内に出現し「架け橋」として活躍するようになれば、最近世界的に話題になっている『文明の衝突』でハーバード大学のハンチントン教授が述べているような日本の孤立化と滅亡の回避につながります。

過去の歴史を踏まえることなく、「外国人が増えれば国内秩序が混乱する」ということばかりを強調するような、ものごとを長期的、多面的、根源的に考えることのできない不見識な人々や、たとえわかっているにもかかわらず自己保身から何も発言せず、行動にも移せない無責任な人々が、日本では司法界を筆頭に支配的な地位に就いています。その弊害が子供の問題をはじめ現在起きている深刻な社会問題の元凶になっているといっても過言ではありません。

第2次大戦中、ドイツの一般大衆は、時の政府がユダヤ人に対して残虐行為を働いていたことをそれとなく知っていたにもかかわらず、何も行動を起こさなかったことが、人類史上例のない大量虐殺につながったのは周知のことです。

同様のことは、日本でも起きました。戦前、支配的な地位にある人たちの不見識と無責任

を国民が放置した結果、軍部の暴走を許し、経済的困窮に陥り、満州事変、第2次世界大戦へと突入、最近大きな問題になっている「731細菌部隊」に代表されるような非人間的な行為の末に、人類史上唯一の被爆国となってしまいました。

今を生きる日本人・島根県民の義務と責任において、この運動を進めることは、李雪梅さんの子供の未来への道を拓き、日中信頼回復、そして世界の中で信頼される国（小渕総理のめざしておられる「有徳国家」）への第1歩と確信します。法治国家である以上、社会改革は司法界から始めるしかありません。とめどなく不祥事が続くのは、今までこの部分にメスが入れられなかったからにほかなりません。

これを機会に新しい日本をつくるべく議論の輪を広げ、未来への道筋を見つけようではありませんか。世界的な激動期の今起ち上がらなければ手遅れになります。

（記名・無記名問いません asyura@hns.gr.jp）

——最大の加害者は最大の被害者である——

妊婦の難民申請認めず

鹿島の中国人集団密入国

広島入国「迫害の裏付けなし」 管理局

日本で第三子を出産するため、二月に島根県鹿島町に集団で密入国したとして、一審で入管難民法違反罪ながら刑を免除された中国人李雪梅被告（三）が申請していた難民認定について、広島入国管理局は二十九日までに、中国で出産による迫害を裏付ける具体的な証拠がないとして、申請を不認定とした。同被告は合法的に国内に滞在できなくなり、入管に再審査を求め異議申し立てする意向を固めた。

同被告は、今後の仮放免申請の結果や控訴審に関係なく、八月三十一日に島根県内で出産し、十月末で在留期限の切れる女兒とともに強制退去せられる可能性もある。担当の水野彰子弁護士は「不認定の理由がいまいで納得しかねる」と不満を表した。

刑事裁判では同被告側は「緊急避難」による無罪を主張。松江地裁は七月、「被告や胎児の生命、身体に差し迫った危険があったための行為で、同情に値する」として刑の免除を言い渡し、松江地検が同判決を不服として控訴している。

難民認定申請の通知は、本人が出向いて直接確認することが条件。李被告はこの日、松江市母衣町の広島入管松江出張所を水野弁護士らとともに訪ね、担当者から結果を聞いた。併せて一カ月間の仮放免申請の更新手続きを取った。

難民認定は、国籍のある国で社会的、政治的に迫害される恐れがある外国人が、生活保護などの面で日本と同一の待遇が受けられる保護制度。法務省によると、日本への密航者が出産を理由に難民申請したのは初めて。李被告側は、中国で女兒を産んだ後に強制中絶を受けており「再び中絶するのは嫌だった」などとし、異例の「温情判決」も出たことで、難民申請に対する同省の判断が注目されている。

入管によると、今年は八月末現在、全国で八十四件の申請に対し八件が認定された。しかし年間五十件から二百五十件程度の申請があった平成六年から昨年にかけ、毎年一件の認定にとどまり、厳しい審査結果が出ている。

(山陰中央新報 H10.9.30)

宇宙に浮く南京事件告発本の邦訳

THE
RAPE
OF
THE HISTORY OF THE MASSACRE
1937-1938
NANKING
IRIS CHANG

邦訳が出版延期になった旧日本軍による
南京大虐殺を書いた「ザ・レイプ・オブ
・ナンキン」



アイリス・チャンさん

難航した翻訳作業

「日本の戦争犯罪が海外でどうみられているか、日本人は知る必要がある」――硬派出版社柏書房が邦訳刊行を決定したのは昨年五月。海外で大きな話題になっている本が、肝心の国内で知られていないことへの焦りからだった。

とは裏腹に邦訳作業は難航した。柏書房によれば、原著には事件に關与した軍人の名前や關連する出来事の人年代を間違ふ事実誤謬や不正確な記述、写真の誤用が数十カ所あった。そのうちチャンさんが訂正に応じたのはわずかに数十カ所。『間違ひを含んだ本を、そのまま出版できない』と

表層深層

「サ・レイプ・オブ・ナントス・オリス」
「クレールをつけたんが
ごとうと日本を善悪にで
てい

邦訳が出版延期になった旧日本軍による
南京大虐殺を書いた「サ・レイプ・オブ
・ナンキン」

判断した同社は、邦訳書を
解説する編一南宮大伴
とミツバノの同時行方
を決めた。この苦肉の方
が、ヤンさんへの不信を結
果なつた。

二月十日、ヤンさんは
同社に対し、なぜ解説さ
の出版を事前知らせなか
ったかと抗議。同社は二
冊の出版延期を決め、ヤ
ンさんとその再発禁に棄出
したが、手紙といは難問。
邦訳出版中の可能性浮
上している。

不信感を隠せず
ヤンさんは八年前日
生まれ。ルソフである
の歴史を調べる過程で京
野井を知り三千万以上
の犠牲が行われた。日
本政府は事件性を認めて
いるとの思いで筆を止
めてきた。米國で南宮作
品が広く知られていか
たとともに、米アジ
アはゼンリョナル取
る公式、米政府は日政
府公使館保護を求める
決議案への支持が集ま
った。新華社より日本左
翼を上げ、日本文壇
の星を上げ、日本人の
愛国は米国人よりも人

アジアを好んだ。「興
業」以来日本は「興
業」非暴力主義教育者
が多い」と論じたが、傍
人に水。

日本国内には、腐敗希
定する「新しい歴史教科書
を作る会」が、歴教委の場
合を詳細に指摘し、シボ
ワノを開設。同会副会長
の岡田信博・東大教授は
「出版の延期は当然の結果
秘秘たる醜聞の成果だ
と書かれたのは大変驚き
は」とする。

「これだけの動向が海外へは
早朝のニュースとしてであ
らぬのも事実で、ヤン
さんは「歴史問題」統制と
言論の自由ない。日本は
右翼への生で日本は
言論の自由ない。日本は
出版でさえならぬ「ジェ
ン」を不信任を隠してい
ないが、日本の説明不足指摘
ヤンさんへの不信は欧
米アジアメディアは
書評の事実表裏のある
否かを問題とし、日本側
の主張守派が新聞に出記
述の不正確を指摘する。
「約束と記述。議論は徹
底的に深められたま
す。」
ジャーナリスト、中
・フルマさんは「願望は中
國の主張をのみにとど
欠く多いこと」上
「日本で南宮作品に取引
は多くの書が出ている
ことは、ほとんどの米國
にはない」として日使
の関不足を指摘する。

「ホロコースト」の
著者の遺稿刊行、フ
長子大教授は「政府側
査査情報提供済況
と特許する時代は冷戦
も終わって。戦争が
人間の記憶にと戦争
を離す作業世界中心統
理の意図で、日本は
もと自らの必殺がある
のではないか」とい

(山陰中央新報・共同通信社配信 H11.3.5)

邦訳の出版延期

真偽で批判、著者と確執

日中戦争の一九三七年末から翌年にかけて、旧日本軍が多数の南京市民らを虐

を、元兵士の回顧録や内外の学者の見方などを交えながら描写している。

殺、暴行したとされる一南
昨年春ころから、記載の

「京事件」を告発し 米国内 犠牲者数やその根拠 掲重
ゴズタ、ミラー、二つを 写真の真偽をついて「日本の

「刊誌」が批判を始め

キンの日本語版の出版がた。四月には、齊藤邦彦駐

延期された。原作の掲載
米大使が「不正確で一方的

真の信ぴょう性や過激な描
な見解だ」などと発言。中

写に対して批判があり、東
国の在米大使館が「南京大

京の出版社が改訂を打診し、**「虐殺は歴史的事実」と反論**

た。しかし、著者側が原作
する事態に発展した。

に忠実であるように求めて、出版交渉が音焦て乗
出、出版交渉が音焦て乗
出、出版交渉が音焦て乗

のあがたためだ。この間、
の間違ひなど約十カ所の修

出版社が脅迫されるなど不正には応じたものの、訳注

や解説を付けることについて

著者は六八年生まれの中
て拒否したという。

国系米国人ジャーナリス
そこで柏書房は、南京事

ト、アイリス・チャンさ
件の研究成果や、月刊誌に

ん、原作は九七年末に出版
登壇した批評家を転載して別
の本でまた一回刊行

さね、米紙大三の書や、
ノで敷置された。これま
し、英語版も出そろった。

出版予定がチラシなどで

中国と台湾でも
広まると、柏書房に出版取

翻訳されている。南京陥落
りやめを要求する電話が寄

までの経過や虐殺の模様――せられるようになった。二二

(朝日新聞 H11.2.21)



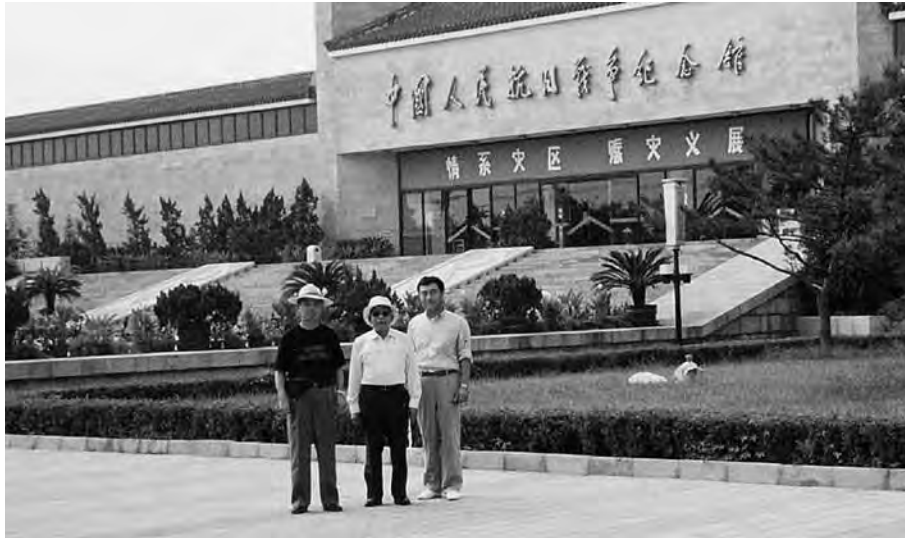
◀ 旅順・日本軍監獄跡にて（一九九八年八月）
左より河原八郎氏（株）エブリプラン社長、
小松昭夫、張玉芝氏（旅順包装工場総経理）



▶ 侵華日軍南京大虐殺遇難同胞記念館にて
（一九九八年八月）
左より小松昭夫、森脇周一氏（三光電業（株）
会長）



◀ 蘆溝橋にて（一九九八年八月）
左より河原氏、森脇氏、李曉明氏（大連三高
機電控製有限公司副総経理）



▲蘆溝橋・中国人民抗日戦争記念館にて
(一九九八年八月)
左から小松、森脇、河原氏



▲南京・記念館内当時の新聞記事の展示

▶同記念館内蠟人形



▶同記念館内蠟人形(人体実験)



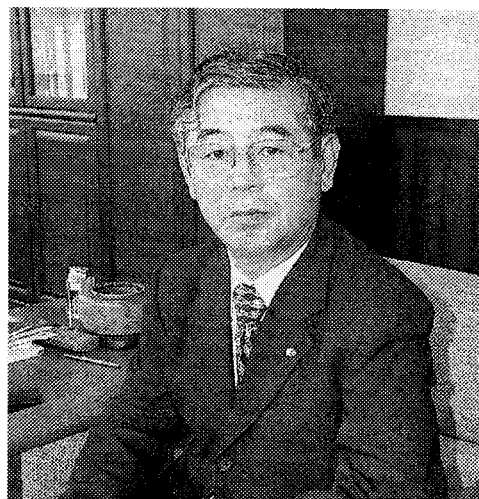
▲旅順・日本軍監獄跡の扁額「永矢不忘」



▲同記念館「全国中学校・愛国主義教育基地」の表示

島根県八雲村から、北に宍道湖を望む松江市乃木福富町の「松江湖南テクノパーク」にこのほど新社屋を移設した電機機器製造メーカー、小松電機産業は「シャッター」に着目してニュービジネスを成立させた。従来は主に防犯目的だった金属性のシャッターを、軽い抗菌シート地で自動開閉する「シートシャッター」に変身させたことから、工場などの産業用に急成長。現在、この分野では全国シェアの60%を占める。また、新社屋移設の記念事業として、中国の26の大学と多くの専門家が編さんした歴史資料「伝世蔵書」を購入するなどユニークな試みも目立つ。小松昭夫社長(54)に、こうした企業理念を聞いた。【堀川 誠】

小松電機産業社長 小松 昭夫さん



1973年に島根県八雲村で創業。社の合言葉は「社業を通じて社会に喜びの輪を広げよう」。85年にセンサーで人や物を感知して、自動的に開閉する高速シートシャッター(シート地のシャッター)「門番」を開発し、これを機に全国展開。東京にも支社を置いて事業を拡大し、シートシャッターの省エネや防じん、食品衛生などのメリットを生かして全国の工場や倉庫などに導入されている。さらに上下水道制御・監視システムなども開発。小松社長は「従業員が自由かつ達に、仕事ができる環境を作ること、気を配っています」と話す。従業員86人。資本金1億円。年商約42億円。

——新社屋は宍道湖のすぐそばですが、水辺を選ばれた理由は。

私の10年前からの構想を具現化する第一歩の土地。物事は人の思いが確立して、道筋が見えてくる。そういう場所はどこかと探していたとき、市が造成中のこの土地を知り、新社屋を建てました。昔、ロサンゼルスは砂漠だった土地にダムを建設して湖を作り、そこから発展した都市だと聞いたことがある。人の創造力、構想力、バランス感覚

電機業界 ソフトの時代へ

——アジアの中でも特に中国との友好に力を入れているようですが。

4、5年前に韓国を訪れた時、日本と韓国、中国の歴史について、今の我々が

「伝世蔵書」は中国政府や企業グループ、専門家が約6年かけてまとめた歴史書です。従来、日本には国立国会図書館と東大図書館の二つしかなく、わが社

をどう見ますか。

これまで、電機業界はハード中心でしたが、これからソフト中心の時代。自動

車、生命保険、金融機関など世界的に再編成の機運が

ある。今、日本は変革期です。こういう時は原点に

戻ることが大切です。原点には二つあり、一つは目に見える

何をしなければならぬかを深く考えた。情報化、交通機関の発達で国境は低くなっている。日本とのあつれきの解消、信頼関係の再構築

自分自身も、言っただこと、やっただことを立証しなければ信用が得られない。人間の社会には必ず

合性を保たなければなりません。私が掲げている、貴重な

た「中海本庄工区の干拓地事業計画」、松江市を観光

だけだなく、一般市民にも安心して暮らすことのでき

る都市にする「松江心の都構想」。これらの具現化の

ために、これからの活動し

ていきます。

ていきます。

ていきます。

ていきます。

ていきます。

ていきます。

ていきます。

ていきます。

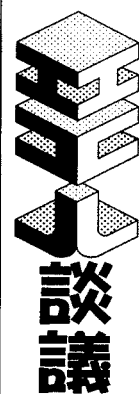
ていきます。

ていきます。

ていきます。

ていきます。

ていきます。





『伝世蔵書』購入記念の楯

中国では歴史上、2度の大がかりな文献整理が行われました。明朝の永楽帝による『永楽大典』（1403～1407）と、清朝の乾隆帝による『四庫全書』（1772～1781）で、中国の2大文化遺産と言うべきものです。

1997年3月、誠成企業集団（中国）の企画・全額投資と海南国際新聞出版社の刊行による『伝世蔵書』は3度目の大規模な文献整理であり、中国国内26の有名大学研究機関の学者、専門家、2700名が6年の歳月を費やし完成したものです。

先秦から清末に至る1,000種類の歴史、小説、医学、宗教、兵法、占術、芸術など、全30,000巻、総字数3億にのぼる膨大かつ貴重な資料が、簡体字により収録されています。（伝世蔵書パンフレットに依る）

小松電機産業(株)では、平成10年(1998)5月、新社屋竣工・創業25周年記念事業として、この『伝世蔵書』を民間としては初めて購入。この書物が、日中両国の信頼の回復と、よりよい関係が築かれるきっかけとなることを願って、島根大学に寄贈。

2. 心の首都(松江市市街地再開発構想)

趣 旨

本企画は、近年、荒廃著しい青少年問題の解決のため、人間本来の価値観（利己から利他へ）を育む教育の場を創出することをめざします。

日本の戦後教育は断片的な知識の記憶を偏重してきました。「命とは何か」「人間は何のために生きるのか、何をなすべきか」を考えさせ、社会における自己の役割意識を高め、「心の進化」を促す教育を怠って、今日に至っています。加えて、今の子供たちはコンビニエンスストア、自動販売機に代表される命と人のぬくもりの感じられない便利一辺倒の消費生活と、テレビやコンピュータゲームによる「仮想現実」に浸っています。その結果、とくに都会では子供たちの「生命感覚」が希薄になり、多発する残虐な犯罪の原因のひとつになっています。

命の原点の体感と、教育による死生観の確立が、心のゆとりと進化を促す。

そのための「心の首都」として、衰退著しい松江市寺町界隈を、寺院を活かして再開発。新しい時代を拓く、「真理に立脚した心の教育の街」「人間教育旅行（修学旅行）の街」「人生の師との出会いの街」が誕生することになります。

概 要

◇大講堂

松江市大橋川南部・寺町界隈の寺院を残し、墓地のみ移転。

跡地に、多くの人が同時に調理できる設備の整った、宿泊可能な「昼敷き大講堂」を多数建設。そこで、「命の原点の体感と、死生観確立の教育」を実施。

中海・宍道湖圏のドリームマリンランドで自ら捕獲した魚貝類を観察、自分の手で調理して食べることにより、「命をいただいて生かされている」ことを体感、「いかに生きるべきか、何をなすべきか」「人間の定義とは」を議論する中で、各人が本来の役割にめざめる「場」ときっかけを提供。

また、「食」についての基本的な考え方の講話や、調理の基礎、作法の実習を行います。

災害等の非常時には、大講堂を応急生活施設として活用。この地域は出雲・米子の両空港から近く、また周辺には多くの港湾が整備されており、人々の緊急・大量移動に最も適した地域です。

現在、非常時の避難所として体育館が使われますが、非人間的な環境といわざるをえません。

これに対して、「心の首都」に建設される大講堂は畳敷き、可動式間仕切り、多数の調理施設も完備しているため、人間として最低限の生活が保証されます。

◇高徳顕彰と人間としての生き方を後世に伝える ハイテク五重塔

構想実現にご尽力いただいた方々の「高徳」を永遠に顕彰、人間としての生き方を後世に伝える「展望台付きハイテク五重塔」を建設。

塔の中は「陰と陽」の空間で構成。

「陰」には、斎場、弔問交流の部屋、貸衣装・貸しロッカーなどを設置。

また、各寺の住職や、この構想に協賛してくださった方々の像も安置。

「陽」には、「人生と健康」をキーワードとする展示場・研修室を開設し、心身ともに健康になる考え方と食事の研修を実施。

さらに、人間の生き方のモデルになった先人に学ぶ殿堂を開設

◇一村一志運動記念館

古来、日本は瑞穂の国といわれてきたように、水田稲作によってアジアの中でも独特の文化を育んできました。しかし、山国のため傾斜地がほとんどで、宿命的に稲作は水害との戦いでした。このため、全国に治水事業に生涯をかけた偉人が多く生まれました。今日の豊かな生活は、その上に築かれたものです。

その志を後世に伝え、次なる時代を担う人々の指針とするべく「一村一志運動記念館」を設立。

旧日本銀行松江支店または支店長官舎に、島根県はもとより全国の治水の偉人の業績とエピソードを集め、コンピュータグラフィックスと蠟人形で展示。



心の首都(松江市市街地再開発構想)

イメージ

心のインフラ整備

——「寺院のあるまち」を活かして、現在の社会問題解決を——

＊平成11年（1999）には松江市で「第6回寺町サミット」が開かれる予定になっています。「寺町」という地名が残っており、そこに多数の寺社仏閣が集積しているという条件を満たす7つの市——長野県飯山市、福井県大野市、石川県金沢市、岐阜県岐阜市、新潟県上越市、富山県高岡市、島根県松江市——が平成6年（1994）に「寺院を生かしたまちづくり」を統一テーマに「寺院群都市会議」を結成。以来、毎年1回開催されているのが「寺町サミット」です。

その趣旨は「人々の価値観が多様化し、従来の画一的なまちづくりから、地域文化や伝統を生かしたまちなみ形成など、個性あるまちづくりへと転換が進められつつあるなか、寺院のある風景の特性や、その文化的・歴史的な価値を再認識し、21世紀に向けて各々の個性を生かした寺院群のまちづくりについて考えたい」（「第5回寺町サミット」パンフレットより）というものです。

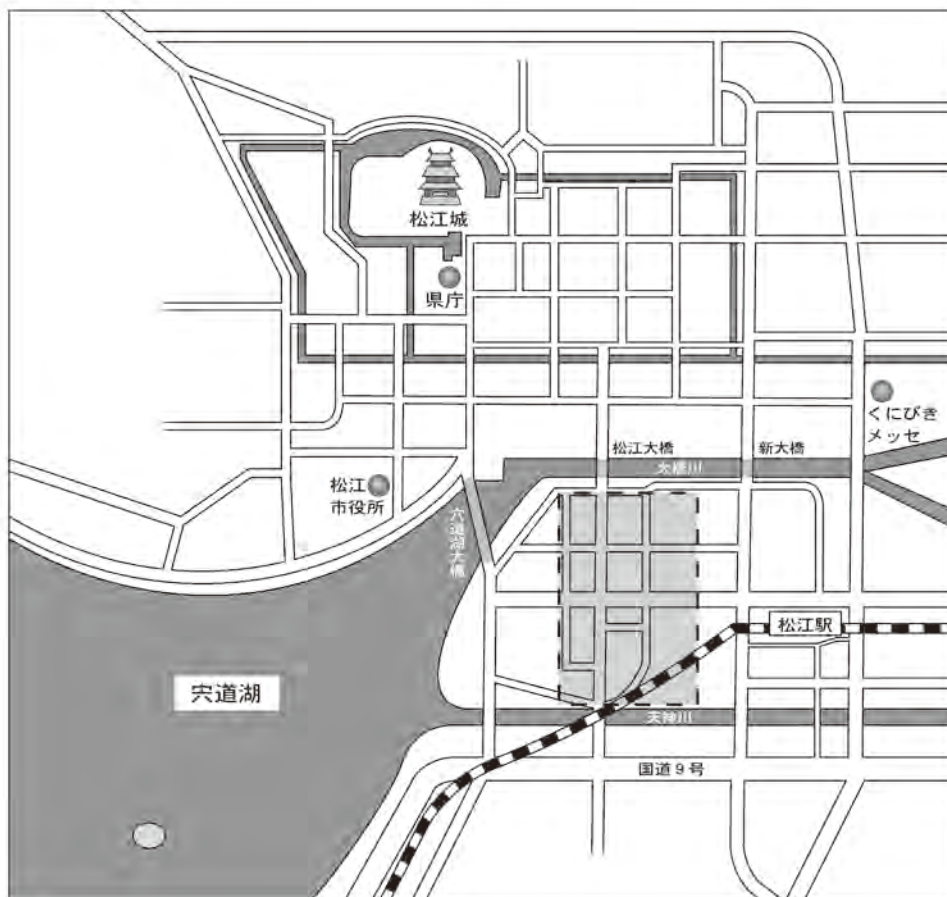
松江市の場合、市内118の寺院の内、大橋川南側の「寺町」周辺地区に26の寺院が集積しています。現在、「寺町」周辺地区は寺院、民家、商業施設、飲食店、そして約9000基のお墓が混在し、雑然とした景観になっています。近年、この地区の高齢化と人口減、商店街の衰退など「空洞化」現象が顕著になってきました。まさに、21世紀に向けて「寺院を生かしたまちづくり」が大きな課題です。

＊「各寺院群の誕生から形成までそれぞれ固有の歴史を保有しています。歴史を知ることは未来を探ることにもなります」（「第5回寺町サミット宣言」より）

松江市の「寺町」寺院群は、松江藩初代藩主堀尾吉晴が松江を城地と定め、慶長12年（1607）頃開始された松江城の築城とともに寺を強制的に移転させ、防衛線として城下町の南東部に集積させたもの、という説があります。

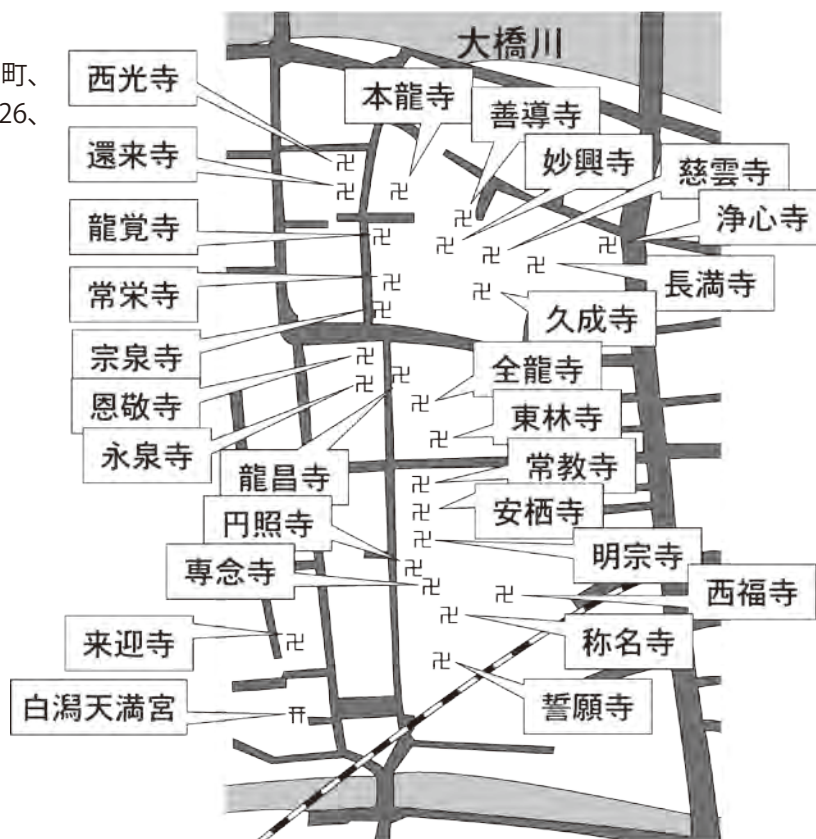
しかし、狙いは単に「防衛」のためだけだったのか。なぜ、宗派の異なる多数の寺院を集めたのか。堀尾氏3代、京極氏1代、松平氏10代という藩主の変遷との関係はないのか。寺院の境内ないし隣接地に墓地を設けたのはなぜか。

このような点を、歴史を振り返って検証することは、「寺院を生かしたまちづくり」をめざして、未来への道筋を切り拓いていく上で必要不可欠であると考えます。



寺町周辺

松江市 3 町（寺町、天神町、和多見町）でのお寺の数 26、神社 3



松江市寺町周辺の寺院

寺 院 名	宗 派	寺町での創建時期
1. 浄心寺	曹洞宗	慶安3年（1650）
2. 善導寺	浄土宗	正保元年（1644）
3. 本龍寺	真宗大谷派	慶長15年（1610）松江開府時
4. 西光寺	真宗大谷派	慶長年間（1610年頃）松江開府時
5. 還来寺	真宗大谷派	不詳
6. 龍覚寺	曹洞宗	応永年間（1394～1427）
7. 常栄寺	曹洞宗	永禄6年（1563）
8. 宗泉寺	曹洞宗	文安2年（1445）
9. 妙興寺	日蓮宗	慶長年間（1610年頃）松江開府時
10. 慈雲寺	日蓮宗	慶長年間（1610年頃）松江開府時
11. 長満寺	日蓮宗	天正10年（1582）
12. 久成寺	日蓮宗	不詳
13. 恩敬寺	真宗大谷派	寛永14年（1637）
14. 永泉寺	真宗大谷派	不詳
15. 龍昌寺	曹洞宗	文正元年（1466）
16. 全龍寺	曹洞宗	不詳
17. 東林寺	浄土宗	慶長13年（1608年）松江開府時
18. 常教寺	日蓮宗	不詳
19. 明宗寺	浄土真宗本願寺派	慶長18年（1613）
20. 西福寺	浄土真宗本願寺派	不詳
21. 円照寺	浄土真宗本願寺派	寛永7年（1626）
22. 専念寺	浄土宗	慶長13年（1608年）松江開府時
23. 称名寺	浄土宗	慶長13年（1608年）松江開府時
24. 誓願寺	浄土宗	慶長13年（1608年）松江開府時
25. 来迎寺	浄土宗	慶長年間（1610年頃）松江開府時
26. 安栖院	曹洞宗	不詳

※東林寺は平成11年に移転。

「郷土の偉人」にスポット

児童文学・小説・漫画の3点



洪水防ぐため岩山くりぬいた周藤弥兵衛

育成に結び付ける。

HNS研究所は、水処理装置な

の三点セットで紹介することで、活字離れが言われる子供たちに読書の機会を提供する。

郷土の偉人にスポット——。HNS（人間・自然・科学）研究所（島根県八雲村、小松昭夫社長）

（松江市、小松昭夫代表）は、江戸時代に四十二年かけて岩山を削

成、社会貢献を担当している。活

材育成の「刺激剤」

人材育成の「刺激剤」

HNS研究所

小説・児童文学・漫画を出版

り、切り通しを開いた周藤弥兵衛 動の一環として地域の「人と水」

を紹介する小説、児童文学、漫画をテーマにした出版を続ける予定

を同時に出版した。郷土のために、全国の自治体などに「郷土の

生涯をささげた先人の足跡をたど 偉人」の再発見を働き掛ける。先

ることによって、町おこしや人材 人の活動を小説、児童文学、漫画

周藤弥兵衛は出雲の国日吉村

（現在の八雲村）の下郡（大庄屋）

で、洪水を繰り返す意宇川の流れ

を変えるため、五十六歳から岩山

をくりぬく作業に入り、一七四七

年、九十七歳で切り通しを完成。

菊池寛の「恩讐の彼方に」で知ら

れる「青の洞門」に先立つ事業と

される。本の価格は小説千四百円、

児童文学と漫画がそれぞれ千三百

円。

（日本経済新聞 H7.4.19）

激動する市場経済

押し寄せる産業や文化、商品化と環境問題、急変する価値観、従来の成長経済の構造そのものが今、まさに崩壊しつつあります。

日本経済、企業の先行きは？

企業、行政、学校に新たな役割が求められています。利益追求の企業活動による付加価値の時代から人間・自然・科学の新しいかがわを見直し、本物の価値の創造をするときではないでしょうか。

江戸時代の農村指導者二宮尊徳翁は、私達に新たな時代のあるべき理念を教えてください。

理念なき経済は非難である。経済のともなわぬ理念はたわごとである。『一家を興し、万家を興す』

そこで、私達は、御門代を切り拓くため、企業・行政・学校の協力のもと、御事業を生み出す様としてHNS「ニュー・マシナー・サイエンス」研究所を設けたいしました。



HNS

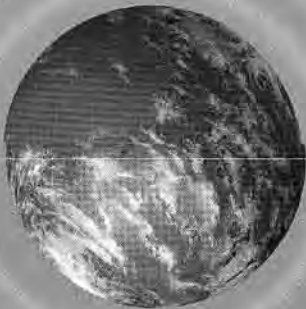
すべての企画に共通する基本的手段は？

人・水・食・住・衣とハイテククロジーの融合による創造です。

出版活動。そして...

各地域共通の事業
出版記念シンポジウム開催
漫画・児童文学小説の発行

一村一志運動



小さな湖が、世界をおおう。

ローカリティのネットワーク



新しい時代をめざして、高い志のネットワークの創造！

私達は、この運動を全国に広げるため、共感のできる方々とあなたの郷土の「太兵衛」に光を当てる活動を繰り広げたいと考えています。
このような私達の趣旨にご賛同くださる方々の積極的なご支援をお待ちしています。この事業を良き輪に、高い志と共感のネットワークを、全国に、全世界に広げようではありませんか。また、「HNS研究所」は、この事業を基盤制度によって運営することを考えており、財団法人の設立を検討中です。この趣旨をよくご理解いただき、ご賛同いただける方々のご意見、お問い合わせをお待ちしております。

私達は、人類の未来のために、いかなる役割を果たすべきか、歴史の中に模索する。この運動は、郷土の人々の知識と生活のために生涯を捧げた偉大な先人にスポットを当てて現代に蘇らせ、その足跡をたどることによって未来への道筋を発見する。そのような先人の生涯を漫画・児童文学・小説の出版活動を通して日本全国の市町村に広く紹介し、それをかきまきりに一連の事業展開をめざします。

清原太兵衛翁の偉業に学ぶ 鹿島町長 山本清澄 (清原太兵衛翁後援会)

古来、出雲の国の大阿・斐伊川は、西に流れて大津湾に注いでいました。ところが、今からおよそ300年前、松江藩主松平直政公府の直後の寛永16年(1639)の大洪水で流れてはなくなり、東の穴道湖へ注ぐようになり、松江城下は浸水、水害に悩まされ続けていました。松江藩の神請方が体得となった清原太兵衛翁は、一生の悲願として穴道湖開きを志し、藩に許可を願い出る事。前後2回、ついに1785年(天明5年)3月、74歳で若し、苦難の工事3年、身命を賭して大工事を完成しました。太兵衛翁は川開き目前に没しました。穴道湖の開きによって穴道湖周辺の水害が緩和され、新田が開墾されることにも、松江藩領海間に新たな歩道が開け、今日の鹿島町の産業経済の発展の礎石となった功績は大なるものがあります。鹿島町合併40周年の記念事業として「清原太兵衛翁の偉い志」を顕彰することによって、今後の発展の道筋を学び未来に生かすことを願っています。





偉人・周藤弥兵衛の伝記

HNS研究所が出版

念く 記で 江松 シン

島根県八雲村を洪水から救った江戸時代の偉人・周藤弥兵衛の一生を描いた伝記がHNS（人間・自然・科学）研究所（松江市千鳥町、ホテル

周藤弥兵衛の伝記出版を記念して開かれたシンポジウム。松江市千鳥町、ホテル一畑

科学）研究所（松江市、小松昭夫代表）により刊行され、二十八日、松江市内のホテルで出版を記念するシンポジウムが開かれた。

同研究所は、制御機器メーカーの小松電機産業（八雲村、小松昭夫社長）が昨年十月に設立。地元

の先人の偉業紹介を通して郷土愛をほぐもうと伝記出版の準備を進めてきた。

周藤弥兵衛は、八雲村の治水に生涯をさげした人物で、五十歳代半ばから四十年余りにわたり岩山を削り、はんらんを繰り返して

(山陰中央新報 H7.4.29)

「郷土の偉人」を発掘

一村一志運動を提唱
HNS研究所が伝記



この「一村一志運動」もその一環。事業を導き、地域に貢献した先人の活動や、小説、児童文学、漫画の形で広く紹介し、これからの社会を考える一助としていく。

これまでで登場したのは「清原太兵衛」と「周藤弥兵衛」。ともに江戸時代、島根の地で水を害から人々を守るためにすべてをかけて尽力した人物で、「清原太兵衛」は周島町が合併四十周年記念事業として製作したもの。原作（小説）は一般公募され、遠く北海道からも問い合わせが来たという。

同研究所の佐々木武男本部長（人間・自然・科学）研究所は「今の子どもたちにとって、松江市木部町が展開しているユニークな「二村一志運動」を模範とし、困難に自分で立ち向かう人々の伝記出版が実現している。この時代、それが大切ではないだろうか」と話す。

同研究所は地元企業、小松電機産業の小松昭夫社長が設立。現代社会の行き詰まりを打開するため、人と自然、科学の関係を一から見直すことをテーマに掲げている。

自分たちの町を、地に足着いた日々の営みを大切に思ふ中から、少しずつ地域が変わってきている。食品の安全や環境に対する組合員の関心を活動の基盤に、島根県生協、郷土の先人たちの足跡をさまざまな形で残し、次世代につなぐとする島根県の人々の試み。二十一世紀へのカウントダウンが始まった。山陰各地で躍動感あふれる動きが続いている。



現代にふがえた「清原太兵衛」の物語。写真：山陰版

(朝日新聞 H10.5.30)

佐陀川開削に尽力「清原太兵衛」



応募小説
児童文学
マンガ

3冊セット 鹿島町が出版

郷土の偉人
もっと知って 全戸に無料配布

鹿島町が、同町内の佐陀川開削に身をまきた「清原太兵衛」をテーマに懸賞募集した小説が、このほど出版された。小説に併せて「清原太兵衛」の児童文学とマンガも刊行され、三冊セットで全戸配布。町では「郷土を開拓した偉人の業績を大人から子供まで知ってもらいたい」と話している。

小説は昨年、町合併四十周年記念事業として一般から募集。昨年七月から十二月までに全国各地から九人が応募した。作品を島根安短大の藤岡大拙学長らが審査。最終選考に残った四編の中から、小説としての面白さや歴史的な資料を十分に生かした内容などから、松江市東本町の寺井敏夫さん（65）の「A島根県共済農業協同組合連合会専務」の作品が選ばれた。

小説はA5判、百九十二ページ。江戸中期、清原太兵衛が水害に悩む松江城下を見て水路の開削を決意。宍道

人気上々の 清原太兵衛伝

佐陀川開削に活躍



郷土の偉人伝として静かな人気を呼んでいる「清原太兵衛」

郷土見つめる機会に

松江の書店 5週連続「ベスト10」

発行所は、県内の地元「めざまし」を除く人気が一店に集まる「ベスト10」の書店。松江市殿町の今井書店、十月十七日に初版

る表現で描かれている。この小説に併せて町では、将来を担う若い世代にも先人の偉業を知ってもらおうと、マンガ（小室孝太郎作）と児童文学（村尾靖子作、高田勲挿絵）も刊行。三冊セットで町内の全世帯二千四百六十一戸と、学校や公民館などに無料配布した。

(山陰中央新報 H9.10.8)

(山陰中央新報 H9.12.4)



清原太兵衛ゆかりの佐太神社にて
(現地説明会)



読書感想文表彰式



シンポジウム・パネリスト



基調講演：
藤岡大拙 島根女子短大学長

◎清原太兵衛顕彰出版記念事業『記録集』より

はじめに

湖岸から望む宍道湖の夕景は、幻想的な雰囲気をつただよわせて、絵のように美しい。訪れる旅人たちは、出雲の国の原風景に出会い、思わず感嘆の声を発するのである。景色ばかりではない。宍道湖は「宍道湖七珍」でも知られるように、味覚の宝庫である。だが、今はおだやかに水をたたえる湖も、かつて寛永年間（江戸初期）の大洪水で、出雲の大河「斐伊川」が流れを変えてから氾濫を繰り返すようになり、沿岸の村や町を洪水の渦で巻き込んだ歴史をもっている。

車で松江温泉を西に湖岸線を走ると、やがて浜佐田の新茶屋前橋に差しかかる。北に真っ直ぐに伸びている川がある。すぐそれが人工のものであることがわかる。宍道湖から日本海（恵曇）に通じた「佐陀川」、「清原太兵衛」が心血を注いで開削したものである。この開削によって、積年の水禍を免れ、鹿島、松江をはじめ沿岸の諸地域の産業経済文化が発展してきた。しかし、この治績は、とかく忘れられ勝ちであった。

鹿島町は、平成8年に合併40周年の記念すべき年を迎えられ、記念事業として『清原太兵衛翁の高い志』を顕彰することによって、今後の発展の道筋を学び未来に生かすことを願って顕彰出版を企画された。

この企画にあたって、『郷土の人々の環境と生活のために生涯を捧げた偉大な先人にスポットを当て現代に甦らせ、その足跡をたどることで未来への道筋を発見する。』一村一志運動の提唱者小松昭夫氏が主宰するHNS（人間・自然・科学）研究所に委託され、漫画・児童文学・小説の3部作として出版された。

小室孝太郎氏（漫画）、村尾靖子氏（児童文学）の両作家に執筆が依頼された。また、小説は、懸賞小説として公募したところ、現地見学会など開催する中で、北は北海道、南は九州の各地から関心を寄せられた。応募作品の中から、寺井敏夫氏の作品が最優秀賞に輝き出版の運びになった。

その後、清原太兵衛顕彰会では、「清原太兵衛シンポジウム」を開催され、広く太兵衛翁の治績の顕彰と偉業の継承に努められた。その一環として小中学生の読書感想文を募集されたところ、339編の応募があり一部をここに収録した。

今、小中学生の問題がクローズアップされている。「さめている」「きれている」「表情がない」など、さまざまな言葉で指摘され、「心の教育」が叫ばれながら問題は深刻化している。しかし、この子供たちの感想文を読み、「素直に感動している子供たち、自分の夢をふくらませている子供たち、何をなすべきか模索する子供たち」に驚きと期待を抱かずにはいられない。大人が何をなすべきか問われている。

本書は、この一連の活動の記録集である。熟読いただき各地でこのような試みの輪が広がることを期待してやまない。

平成10年5月1日

清原太兵衛顕彰事業、懸賞小説審査委員長

藤岡大拙（島根県立女子短期大学学長）

清原太兵衛顕彰会が鹿島町内の小学生、中学生を対象に清原太兵衛の本を読んだ後での読書感想文を募集したところ、339編の応募がありました。

審査の結果、最優秀賞に3名（小学校低学年の部・高学年の部・中学生の部各1名）が入賞。ここに最優秀賞の感想文を掲載いたします。

□「清原太兵衛」を読んで

東小学校3年 木村愛実

わたしが清原太兵衛という人を知ったのは、鹿島町の社会科の副読本を読んだ時でした。

はじめは、川を作った人であるということだけしかわかりませんでした。でも、この本を読んでではじめていろいろなことを知りました。

佐陀川は、雨がふったときは水がにごり、水かさがふえ流れがはやくなり、流されていきそうです。わたしがいつも見ているそんな佐陀川が、人の手で作られたなんて、ふしぎでした。川はしぜんにできたものだ、と思っていたからです。それが、何百年もむかしに、人の力で作られたなんて信じられません。

今のように、大がたダンプカーやクレーン車のない時代に、人の力だけでできるなんてすごいと思います。

わたしが一番心にのこったのは、自分の体のことよりも、人のことを心配して、川を作りたいと太兵衛さんが思ったところです。思いやりがある人だったんだなあと思いました。

それに、小さいころからのゆめを、あきらめないなんて、すごいと思いました。今、わたしにも、ゆめがありますが、大人になってもそのゆめをもっていられるか、自しんがありません。

太兵衛さんが工事をはじめられたのは、74才になってからだそうです。いやなことがあってもくじけずに、小さいときからずっと考えていたことを実行したのです。

何度も何度も反対する村の人たちに、せっかくなうったくいをぬかれて、大へんだったんだろうなあと思います。太兵衛さんはくいをぬかれないようにするために、頭をつかい、村の人たちがねむっているあいだに、くいうちは終わったそうです。わたしは、太兵衛さんはいつねむったのかなと思いました。

川ぞこをほるさぎょうは、頭の中で考えていたこととは大ちがいで、かなりむずかしそうでした。

太兵衛さんは、朝のまだうすぐらいころから江角の海岸へ行って、つめたい海の中に入り、体を清めたそうです。つめたくて、こごえ死にそうだったことでしょう。太兵衛さんは、じっとだまって入ったそうです。わたしは、つらい思いを何度もしたんだなあと思いました。

1787年の秋の終わりごろに、佐陀川はかんせいしました。よろこんでいる人々の声が聞こえるようで、わたしもうれしくなりました。

わたしは、太兵衛さんの本を読んで、いろいろなことを知りました。その知ったことは、今では考えられないことばかりでした。

友達のうちに遊びに行くときにいつも見る佐陀川は、よくごみがういています。

この佐陀川はたくさんの人の力と苦労のおかげで作られたことを思い、わたしたちは、この川をよごさないように、川を大切にしていかなければならないと思います。

□ありがとう！清原太兵衛さん

恵曇小学校4年 坂本優希

私が住んでいる町は、太兵衛さんが作ってくれた佐陀川の近くの古浦です。川には、みなと橋がかかり、古浦と恵曇の町を結んでいます。私たちが松江に用がある時は、佐陀川をながめながら横の道を通って行きます。

4年生になって、社会科で太兵衛さんの事を習いました。いつも見ていた佐陀川が太兵衛さんの作った川だと知ってビックリしました。あんなに長くて大きい川がどうしてできたのか、知りたくなりました。本を読んだり、佐陀川見学にも行きました。太兵衛橋や太兵衛きねんひなどいろいろなものを見ました。そして、私は、太兵衛さんてすごい人だったんだなぁと思いました。

昔、穴道湖の水が大雨がふるたびにあふれ、大きなひがいが出ているのを見て、「ぼくがこう水をなくしてやる。」

と、小さいのに国を救おう!!と考えるなんて私にはそうぞうがつきません。私だったら、こんなこう水とかがあっても人がするからいいや、と思うにちがいありません。でも太兵衛さんはちがいました。どうしたらこう水がなくなるかずっと考えて、何回も工事願書を出して、12回目でやっと願いがかなったのです。一度思った事は、かなうまであきらめない太兵衛さんの気持ち、私もそんな強い心がほしいです。

工事がはじまって、うなだと、かたの内のところはどしゃがくずれて、作業をしていた人たちがどろにのまれてたくさんなくなりました。

その時も太兵衛さんはあきらめず、お百度まいりをして工事がぶじに終わるように祈りました。佐太神社のたたりだと言われても、まけないでがんばった太兵衛さんって、本当にすばらしいと思います。

太兵衛さんのことを知るまで、私は、佐陀川をただなんとなく、見ていました。でも太兵衛さんや工事をいっしょうけんめいにした人たちについて勉強をして、今までとはちがう川のように見えてきました。いろんな人のくろうを合わせてできた川、佐陀川。私たちのくらしを便利でゆたかにしてくれる川です。

私も、太兵衛さんのように、次の時代によろこばれる何かをしたいと思います。その何かはまだ分からないけど、たくさんの勉強をしたり、いろんなことにちょうせんして、みつけていきたいと思います。

ありがとう清原太兵衛さん。

そしてずっと私たちを見守っていて下さい。

□清原太兵衛について

鹿島中学校3年 安達洋子

私はあまり佐陀川に縁がなく、家も近くないし、学校の登下校の道も川の近くを通りません。だから、この川を見るのは学校の音楽室と、松江市内へ行く時だけです。

私は、その音楽室から見える景色がとても好きです。そこからは、校庭に立ち並

ぶ桜の木と、その背後にどっしりとかまえた佐陀川が見えます。この川を高い所から見下ろすととても大きく、とても広く見え、とても穏やかな気持ちになります。

春は桜が咲き匂い、花卉は川の方へと散っていきます。佐陀川は、花卉だけではなく、桜そのものを飲み込んでしまうような、そんな迫力さえ感じさせます。そういう風を感じるのは、やはり、清原太兵衛と、太兵衛の率いた作業者達の川への強い思いがあったからだと思います。

この佐陀川をつくった、清原太兵衛という人の名前は、小さい頃から学校や家で何度も聞かされていて知ってはいましたが、太兵衛の生涯については何一つ知りませんでした。興味すらわかず、ずっとこのまま名前だけのおじいさんで終わるところでした。

しかし、今は違います。太兵衛の夢や人生、考えを知ってから、私にとって憧れの人のような存在になりました。

太兵衛には、幼少の頃から夢がありました。洪水から村を守ることです。太兵衛の住んでいた村は、毎年暴風雨に襲われ、嵐の過ぎ去った後はひどいものだったそうです。いたるところに転がっている家畜の死がい。鼻をつくにおい。病に倒れる人。大きなどろ水の川となってしまった村。そんな時倒れた父。太兵衛の目に映るのは、暗く悲しいことばかりでした。

だから、もう二度とそんな風景を見なくてすむように、という思いがこの夢にはあると思います。そして、この夢を決して忘れることなく、寝る間も惜しんでひたすらその一つの夢を追いかけていた太兵衛の姿勢を知り、自分も夢をあきらめたらいけないなと思いました。どんなに無理だと思うことでも、その夢のために毎日こつこつとがんばれば、いつか、清原太兵衛のようにおじいさんになってからでも、きっとかなうんだというような気持ちになりました。

もちろんその夢をかなえるためには、いろいろと苦しんだりする時期もあると思います。太兵衛も、付近の住民の抵抗や土質の悪さ等多くの問題にぶちあたり、何度も克服して、そして川をつくりました。時には、一緒に戦った作業者の命を失うこともありました。それでも夢をあきらめなかったこと、そういう人が、かつてここに存在したということが、私にはとてもはげみになります。

私には、まだ年齢的にも若いということもありますが、ただ一つの何かのために、苦しんだり泣いたり、危ない橋を渡ろうと思ったこともありません。それに、これからの人生で、自分を捨てて必死になるということが無いというのも嫌です。間近で見ても、テレビで見ても、何かのために必死になっている人は、とても素敵だと思います。そして、必死になった分だけ、その分だけ結果を残しています。清原太兵衛は、とても長くて大きな川を残しました。それは今になっても多くの人達に使われ、役立っています。

清原太兵衛がいたから、今この町で米が作られ、清原太兵衛がいたから、今水害で悩むこともありません。もしいなかったら。そう考えると、この人は私達の恩人です。

今、私には夢があります。その夢はまだまだ遠くて、細かいところでいろいろと迷っています。でも、清原太兵衛のように、あせらず、ゆっくりと考えていこうと思います。

3. ゼロエミッション・小規模理想郷 (中海・宍道湖圏域の新構想)

趣 旨

ますます深刻化しつつある環境問題、食糧問題、エネルギー問題の解決の糸口を見出すためのプロジェクトです。

廃棄物を出さないゼロエミッションに基き、自然循環の中で文化的な社会生活が十分に自立・存続しうることを証明するテストケースとし、自然と共存した21世紀の社会システムモデルを、国境を越えて提案。

干陸予定地の中海・本庄工区をはじめ中海・宍道湖圏域において、先駆的「インテリジェントバイオ（情報微生物工学）技術」と、出雲の地政学・歴史文化との融合をめざす実験場を創出。「ゼロエミッション・小規模理想郷」の出現と、新たな「環境観光産業」の創出を促します。

このプロジェクトの議論・研究・構想・調査・広報・企画・設計・建設・運営という流れの中で、共感の輪が広がり、21世紀を担う人物づくりとネットワークが広まるものと確信します。

また、食糧危機が懸念される21世紀、このプロセスを世界に情報発信し続けることで、日本の信頼回復と、平和・友好に重要な役割を果たすことが期待できます。

概 要

第 1 ス テ ッ プ

このプロジェクトの実質的第1歩として、回分式活性汚泥方式とコンピュータ制御による「パッケージ水神」の技術を活用した「農業集落排水事業松江市長江地区浄化センター」が完成いたしました。

中海・宍道湖はヤマトシジミの全国生産高の70%を占め、「宍道湖七珍」など多くの水産資源に恵まれています。しかし、中海のアカガイの死滅、宍道湖のヤマトシジミの大量死などが示すように「水質悪化」が深刻化、水質改善は緊急・

最重要テーマです。

下水処理プラントは、日本下水道事業団（建設省所管）、全国土地改良事業団体連合会、日本農業集落排水協会（農水省所管）などの所轄官庁外郭団体と業界団体との癒着システムにより、技術開発がなおざりにされ、性能が低く、外観だけ華美で、建設費、運転・管理費とも極端に高いプラントがつくられ続けています。これが、施設が普及しても中海・穴道湖の水質の浄化が進まず、下水道料金が高い理由のひとつであると推察されます。

「農業集落排水事業長江地区浄化センター」はこのような背景のもと、地元研究開発型ベンチャー企業として5年にわたる極限的アプローチの結果、松江市宮岡寿雄市長のご勇断により、ゼネコンと地元研究開発型ベンチャー企業との島根県初のジョイント方式で発注いただきました。

松江土建(株)の建築土木技術と、小松電機産業(株)の微生物情報処理技術（岸博先生指導）を組み込んだ「パッケージ水神」、そして小松電機産業(株)と菱農エンジニアリング(株)の機械装置設計技術、曾田鐵工(有)の製缶技術を結集、平成11年3月、竣工に至りました。

これにより、環境機械装置産業と環境情報産業という新産業を創出するための新しい流れの第1歩を踏み出すことができました。これを契機に、世界に通用する技術開発が進み、新しい時代を担う企業群が輩出されることを願うものです。

なお、「パッケージ水神」は、平成7年（1995）、科学技術庁第54回注目発明選定証を受証した技術を活用したシステムで、松江市のほか島根県内木次町、掛合町、佐田町、三刀屋町、仁多町、鳥取県江府町で採用されています。

このたび竣工した施設は、処理人口1,260人、日平均340m³の生活廃水を処理します。処理方式は、1つの槽（回分槽）の中で流入、攪拌、ばっ気攪拌、沈殿、上澄水排出、汚泥引抜きを行い、微生物の働きにより、流入汚水の処理を行う方式で、次のような特徴があります。

- ①本施設の中核「パッケージ水神」は計測・自動制御・監視機能が一体化したシステムになっており、公衆回線に接続するだけで機能します。盤面にスイッチ・計器類がなく、タッチパネルによる対話方式で、初心者でも簡単に操作でき、ソフトのバージョンアップによる高品質の維持と、量産が可能です。
- ②本施設では効率的攪拌を「逆円錐台形槽」により実現、また電子計測自動制御

情報処理により高度処理（脱窒素）と省エネを両立。

- ③同質の生活リズムの農業集落排水では避けられない、極端な流入水量変動に対しても、安定して省エネ・脱窒素運転を維持できます。
- ④情報処理装置により蓄積されたデータは、機器運転管理、水量・水質管理、機器異常時・施設故障時の原因特定、保守点検時期の特定等を容易にします。将来、量産化をめざした見直しと合理化が進めば、飛躍的なランニングコスト低減につながり、発展途上国への爆発的普及が見込まれます。
- ⑤施設での機器運転と、水質の因果関係を解析、データが蓄積されることにより進化するシステムであり、水管理技術者を育成するプログラムとして類例のない現場の生きた教材を提供します。
- ⑥公衆回線を使用して、学校やコミュニティセンター等で臨場感あふれる処理場の状況を大型スクリーンで映写、環境教育に新しい手法を提供することになります。

矢道湖の水質改善進まず

COD、窒素、リン横ばい

矢道湖周辺の自治体や議員でつくる第六回矢道湖水質汚濁防止対策協議会（浅野俊雄会長、二十五人）がこのほど、松江市内のホテルであり、十年度の矢道湖の水質測定結果が鳥根県から報告された。化学的酸素要求量（COD）、窒素、リンの三項目とも横ばいで、県が湖沼法に基づいて設定している矢道湖水質保全計画の目標値をいずれも上回り、水質改善が進んでいないことが明らかになった。

調査は、建設省出雲工事事務所と県衛生公害研究所が、毎月一回、矢道湖と大橋川の五カ所で実施。CODは、月別で四番目に悪い値（七五〇値）を使って年ごとの推移を比較。窒素、リンは年平均値で比較している。

報告によると、CODは一〇〇・三リットルで、各調査地点とも前年より〇・三リットル上昇し、水質が悪化。窒素は同〇・四四リットル、リンは同〇・〇五リットルで、ほぼ横ばいだった。

県は五年から十年までの五年間で達成する水質保全の目標値としてCODで同四・一リットル、窒素〇・四四リットル、リン〇・〇四リットルを設定している。

最終年度で目標を達成しなかったことについて、県衛生公害研究所の石飛裕水質科長は「下水道整備などで流入する窒素やリンなどは削減されているが、水質の改善にまでは至っていない」と分析した。

報告を受けた同協議会は本年度、下水道整備の予算枠の拡大など国に要望することを決めた。県は本年度新たな水質保全計画の策定に取り組む。

汚濁防止
対策協会で報告

（山陰中央新報 H11.6.1）

し尿・雑排水処理施設
さらにグレードアップ

自動制御と監視機能一体化

「パッケージ水神」を発表

小松電気産業が開発



小松電気産業株式会社（本社・東京都八雲村）小松昭夫社長は二十日、自動制御と監視機能を一体化したし尿・雑排水処理システム「パッケージ水神」を新しく開発したと発表した。昨年十月に発表した「NEW水神」を改良したもので、今までオーダーメイドで作っていた製品をイージョーダー化、タッチパネルを使用することによる操作性の飛躍的な向上がポイント。

同社では一九九二年、N T Tの公衆電話回線とコンピュータを使用した上下水処理システム「やくも水神」を発表。従来のコストや管理の問題から設置が困難とされていた農山村の下水処理の低コスト化、イージョーメンテナンスを可能にした。さらに、昨年は機種種を改良した「NEWやくも水神」を発表。佐田町反

辺集落排水集落排水処理場に第一号機を設置し運転を始めた結果、放流水中のCOD（化学的酸素要求量）を再利用可能水準まで引き下げることに成功。さらに、窒素濃度も従来機種の十分の一から十五分の一まで低減した。

この日発表された「パッケージ水神」は、今まで別々のシステムで構成されていた計測制御と監視機能を一体化。計測・自動制御・監視が一つになり、公衆回線につなぐだけでシステムとして機能。一ホストから、十か所の処理場・四百五十か所の中継ポンプを管理することが可能。また、

従来機にあったスイッチ・メーターなどのハードウェア部分を全てソフトウェア化し、タッチパネルでの操作を可能にした。また、誤った設定に対してのチェック機能が充実し、操作ミスの危険性を大幅に軽減。盤面から計器・スイッチがなくなり、感電事故の心配がなくなったことが大きな特徴。

従来機のやくも水神は県内の十市町に三十二カ所、鳥取・兵庫の各町に十九カ所、また昨年発表されたNEWやくも水神は鳥根・鳥取阿保七カ所に設置されている。パッケージ水神もすでに大原郡木次町に納入され、来年度から稼働すること。飯石郡掛合町でも来月納入を予定している。

パッケージ水神は、プラント建設がオーダーメイドからイージョーダーメイド方式をとったことなどから、NEWやくも水神の自動制御方式（四千万円）に比べ、同方式で三千二百万円となり大幅なコストダウンに成功した。

小松社長は、「水処理プラント（コンピュータ）によるパッケージの自動制御」を十カ所程度建設し、管理システムを確立することに「広く全国・世界に情報を発信し、この地を『水のメッカ』とする」などと今後の展望を示し、「新社会システム産業の創造により、『夢とロマンと使命感』を持った若者の定住を図る」としている。

排水処理をシステム化

小松電気産業 機能追加・変更簡単に

制御機器製造の小松電気産業（島根県八雲村、小松昭夫社長）

は、計測制御と監視機能を一体化した排水処理システム「パッケージ水神」を開発した。制御部分をソフトウェア化し、標準化することによって設置後の機能追加や変更に対応できる。操作の安全性も高いという。

集落排水処理向けに売り込む。従来、水処理施設の維持管理は専門家の経験に頼ってきたが、新システムでは、コンピュータに履歴を残すことにより、処理プロセスの実績と評価が可能になった。様々な処理パターンを検討し、現場に最適な方法を採用する上で高いレベルの目標を達成できるとしている。

また、制御部分のソフトウェアを進めた。処理場ごとに機械の種類が異なるため注文生産がほとんどだったが、新システムでは標準機能のデータを変更することで、導入後の仕様変更にも簡単に対応。本体前面の液晶入力装置で動作条件などを設定しながら、運転状態や計測値を画面で確認できるため、設定ミスの可能性が小さい。さらに、制御盤内の機械を操作する必要がないため感電事故の心配もなくなるという。

最大十五カ所の処理施設と四百五十カ所の中継ポンプ場の監視が可能。処理対象人口が五百人のタイプでは、電気工事などを含め二千三百四十万円。自動制御方式を採用した千八百人のタイプは同六千九百五十万円。

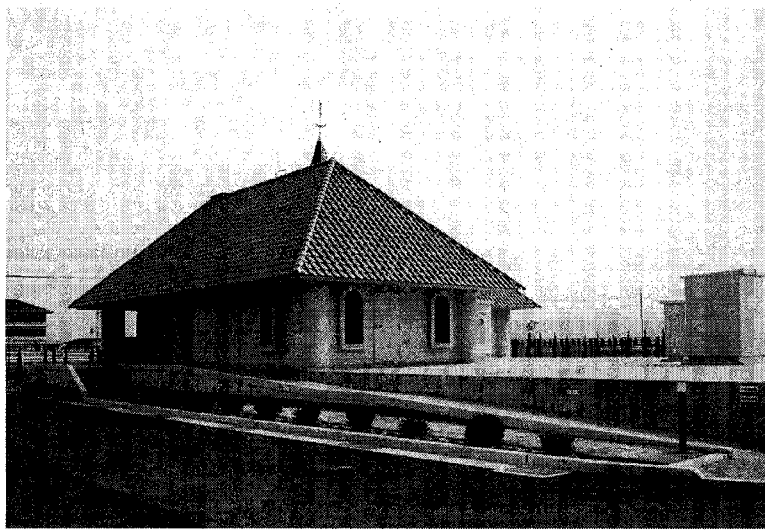
（日本経済新聞 H7.11.21）

（島根日日新聞 H7.11.21）

松江の小松電機産業など3社

農業集落排水用

プラント開発



共同開発した装置が採用された松江市長江地区浄化センター処理場（松江市打出町）

長江の排水事業で稼働

電子制御機器メーカーの小松電機産業（松江市乃木福富町、小松昭夫社長）はこのほど、菱農エンジニアリング（島根県東出雲町、貫井三郎社長）など二社と共同で、農業集落排水用プラントを開発した。プラントは、松江市長江町の排水事業に採用され、四月から稼働している。

電話回線で遠隔地操作

処理パターン蓄積も

共同開発したのは、小松電機産業、菱農エンジニアリングと曾田鉄工（島根県東出雲町、曾田礼蔵社長）の三社。

プラントは、七年に小松が開発した集落排水遠方監視自動制御システム「パッケージ水神」と、菱農と曾田の二社が開発した「新型上澄水排出装置」を組み合わせた。パッケージ水神は、排水処理装置の

共同開発したのは、小松電機産業、菱農エンジニアリングと曾田鉄工（島根県東出雲町、曾田礼蔵社長）の三社。

計測、自動制御、監視の機能を一体化させたもので、電話回線などを使って遠隔地にいながら、装置の操作や制御ができる。コンピュータ制御のため、操作履歴を残しておいて、処理パターンの蓄積や評価ができる。誤った設定に対して、重複したチェック機構が作動し、設定ミスを少なくする。

菱農が設計し、曾田が製造を担当した。タンク中の排水が含んだ混合物を沈殿させ、上澄み部分の水を抽出する仕組みで、処理水の放流や、沈殿した汚泥の排出をより効率的に行えるようにした。

プラントの処理方式は「回分式活性汚泥法」。同方式は一つの反応槽の中で、汚水の流入、ばっ気、かくはん、混合、沈

殿、上澄水の排出、汚泥の引き抜きなどの処理を時系列的に進行させる。このため、一定プログラムに基づいた運転制御が必要で、その役割をパッケージ水神が担う。

プラントは、農業集落排水事業長江地区事業に採用され、松江市打出町の処理場内に設置された。水質はBOD（生物化学的酸素要求量）が一リタリ二百ミリリットルから二十ミリリットルに、SS（汚濁物質）が二百ミリリットルから五十ミリリットルに減少する。また、T-N（全窒素量）も四十三ミリリットルから十五ミリリットルに低減されるという。

小松社長は「業務内容の異なる企業が共同で事業を請け負い、それぞれのノウハウを共有することで、環境機械装置と環境情報産業という新分野を目指したかった」と話している。

（山陰中央新報 H11.4.24）

農村部の下水施設設計

農水省関連法人が独占

国の補助事業

農村部の下水道普及を目的に国の補助で行われる「農業集落排水事業」の処理施設認定をめぐる、農水省が同省OBの天下り先になっている社団法人を申請窓口に指定したため、この法人が関連業務の受注をほぼ独占していることが7日分かった。窓口の指定

は2年前に廃止されたが、独占状態は変わらず、この法人は手数料や指導料で1997年度に21億円以上の事業収入を上げている。農水省OBらによる公益法人が同省の後押しで巨額の利益を得ている構図が浮かん

だ。この社団法人は「日本農業集落排水協会（東京都港区。現在、17人の理事のうち谷山重孝理事長をはじめ6人が農水省OBで、一般職員も計72人のうち同省からの出向者とOBがそれぞれ約1割を占めている。農業集落排水事業は、事業を計画する市町村が都道府県を通じて農水省に申

請。補助を認められた市町村は汚水処理施設の設置計画（基本設計）と、処理能力や処理方式などを定めた実施設計の両方を作成する必要がある。浄化槽法などで、実施設計については建設相の認定を得ることが義務づけられている。農水省は事業が始まる前

請。補助を認められた市町村は汚水処理施設の設置計画（基本設計）と、処理能力や処理方式などを定めた実施設計の両方を作成する必要がある。浄化槽法などで、実施設計については建設相の認定を得ることが義務づけられている。農水省は事業が始まる前

請。補助を認められた市町村は汚水処理施設の設置計画（基本設計）と、処理能力や処理方式などを定めた実施設計の両方を作成する必要がある。浄化槽法などで、実施設計については建設相の認定を得ることが義務づけられている。農水省は事業が始まる前

請。補助を認められた市町村は汚水処理施設の設置計画（基本設計）と、処理能力や処理方式などを定めた実施設計の両方を作成する必要がある。浄化槽法などで、実施設計については建設相の認定を得ることが義務づけられている。農水省は事業が始まる前

農業集落排水事業
ことば
の遅れた農村部に小型の生活廃水処理施設を建設することを目指す。1983年から実施されている。河川の汚染を防止する目的もある。

り、総事業費の50％が国の補助で、99年度は約1356億円が国費として計上されている。農水省は2006年度までに全国3万5000集落に普及させる計画を進めている。

国知事会や全国市長会などから「特定の公益法人の仕事を保証するためではないか」と批判が出たため、農水省は97年2月に覚書を廃止したが、処理施設メーカーの関係者は「協会が独占する実態はいまも変わっていない」と証言している。農水省は覚書の廃止以降、協会の受注割合は低くなっており、独占ではない。どこに発注するかは自治体が判断すること」と話している。

第 2 ステップ

既存の農業集落排水処理施設を、「複合微生物動態系解析における複合発酵（E M B C 情報微生物工学）」を駆使した、汚泥のまったく出ない「エネルギー触媒水製造プラント」に改造。その近隣で、処理水（エネルギー触媒水）を活用した無農薬・無肥料・無餌の「インテリジェントバイオ農場・養魚場」の実験に着手。

●複合微生物動態系解析における複合発酵

（E M B C = Effective Micro-organisms Brewing Cycle = 情報微生物工学）とは？

汚泥の出ない画期的なシステム

- ①「高嶋開発工学総合研究所」が開発した浄化システム。
- ②バイオテクノロジーを応用して、有効微生物群を共存・共栄・共生させ、発酵合成・複合発酵させることにより、排水中の有害物質を水・炭素・ガスに分解する、つまり原子を消失させ、汚泥をまったく出さない画期的な技術であり、従来とは比較にならない上質の水を再生することが可能。
- ③さらに、この水を同研究所独自開発の「アモルファスマテリアル浄水機」でろ過することにより、水道水より上質な水に再生できるという驚異的な浄化システム。
- ④有害な薬品などは一切使用しない、自然界の発酵微生物によるまったく新しいこの浄化システムにより、廃棄物やスラッジの消失、ローコストの排水処理、リサイクルによる水資源の確保などが可能となります。

●「複合微生物動態系解析における複合発酵」の概念

◇微生物には「好気性－明」「好気性－暗」「嫌気性－明」「嫌気性－暗」の4つのタイプがある。従来の排水処理法は「好気性－明」菌による「発酵－分解－腐敗－分裂」のステップにより処理されるもので、酸化という有害作用をもたらしてきた。たとえば、悪臭、汚泥の堆積、処理質の低下など。

◇複合微生物動態系解析における複合発酵（E M B C 情報微生物工学）は、微生物の持つ機能と基質および情報を利用し、情報微生物工学として用い、発酵法、増殖法および誘導法を駆使することによって、これまで不可能とされてきた4つのタイ

プの微生物を共存・共栄・共生させることに成功。

◇E M B C工法でとくにベースになるのが「嫌気性一暗」菌。これと光合成微生物とは互いのチャンネルに融合作用を起こさせ、共存・共栄・共生の源となっている。

◇微生物の共存・共栄・共生により、「発酵—分解—合成—発酵」というサイクルが生まれ、還元という有効作用をもたらす。たとえば悪臭やスラッジの消失、処理水質の真水化など。

◇共存・共栄・共生の状態を継続して、生菌数を飛躍的に高め、微生物の高度化による微生物融合と、微生物酵素の高濃度化による酵素結合結晶を生じさせることによって、すべての微生物を有効作用に導くことができる。このことを「複合発酵法」という。

※本稿は高嶋康豪博士著『蘇生・回帰の科学—エントロピーをエコロジーに—』『E M B C情報微生物工学』に基き作成。また、「バイオステーション構想」は高嶋開発工学総合研究所より原案、資料をご提供いただき、高嶋康豪博士はじめスタッフの皆様のご協力を得て作成しました。（詳細は資料編参照）

第 3 ス テ ッ プ

「宍道湖東部浄化センター」で発生した汚泥を「エネルギー触媒水製造プラント」に導き、「エネルギー触媒水」を製造。

農水省および歴代の知事、関係者の長年のご努力によって完成した「中海干拓揖屋地区」（約203ha）において、「エネルギー触媒水」を活用した無農薬・無肥料の「バイオステーション」の実験を開始。

現在、その実証試験場用地として揖屋地区内5.3haの農地を取得すべく、島根県と交渉を進めています。

また、意宇川河口に「エネルギー触媒水」を放流することにより、魚の集まり具合と発育状態を調査。

これらにより「バイオステーション」を中海干拓安来地区および弓ヶ浜地区に広げ、中海・宍道湖圏「ドリームマリンランド」実現の可能性を探ります。

費用とエネルギーを消費するだけの従来の排水処理施設を、驚異的な価値を生み出す施設へと180度転換するコペルニクスの発想によって構想されたプロジェクトです。

「宍道湖東部浄化センター」のデータ（平成9年度末時点）

処 理 量	約31,000m ³ ／日，約940万m ³ ／年
処 理 能 力	45,000m ³ ／日
計 画 水 量	142,790m ³ ／日
汚 泥 排 出 量	1,500m ³ ／年 (脱水ケーキ，70%焼却)
運 転 管 理 費	6 億 4,000 万円 (市町村からの委託費用約9 億円，建築費別)
人 員	県職員9 名，維持管理業者 53 名
敷 地 面 積	18.8ha

◎構想の背景

①中海・宍道湖圏は、出雲・米子の両空港から近いなど交通至便の地。古来「緑むすびの国」として栄えてきた経緯もあり、多くの歴史的遺産と自然環境に恵ま

れ、観光資源、水産資源が豊かです。しかし戦後、周辺の都市化・工業化にともなう生活様式の急激な変化、中海干拓事業、東部浄化センターの建設等により急速に水質が悪化。中海ではアカガイが死滅、宍道湖ではヤマトシジミ（全国出荷量の70%）の大量死が発生しています。

②世界的な環境保護の趨勢から、水処理施設から発生する汚泥の海洋投棄や焼却は、1999年以降全面禁止となります。国は高温の溶融炉での汚泥処理を推奨していますが、炭酸ガスの排出、ダイオキシンの残留などの問題に加え、1基150億円というコストの問題もあって、出口のない状態になっています。

③中海の水質悪化・汚泥堆積の主要原因は窒素・リンの流入。水処理施設で水を浄化しても、中海圏の土壌は火山灰質で水はけがよく、中海周辺の農地に撒かれた窒素・リンも分解されないまま中海に流入、水質悪化が進んでいます。現在の浄化システムの導入が進んでも、一方に干拓地での化学肥料農法が存在するかぎり、本質的な解決はありません。

④「宍道湖東部浄化センター」は「中海干拓揖屋地区」と隣接、意宇川の河口に位置しています。

「宍道湖東部浄化センター」に「エネルギー触媒水製造プラント」を設置、排水中の有害物質を資源とし、「エネルギー触媒水」を製造。揖屋地区の農業用水として活用すれば、化学肥料は不要となり、窒素・リンの中海への流出もなくなり、自然で安全な農作物の生産が可能になります。

また、エネルギー触媒水を意宇川に放流すれば、中海の水質も飛躍的に向上すると同時に、中海の藻・魚・貝類にも画期的なエネルギーを供給することになり、意宇川河口での魚の効率的捕獲も夢ではなく、1石何鳥もの効果が期待できます。

⑤出雲地方には、長年の地道な努力により高度な有機農法技術と経営ノウハウが蓄積され、それを担う人材も育成されています。

その代表例として、木次乳業㈱、㈱風土プラン、㈱井上醤油店の3社が結集、島根県大原郡木次町に5haの土地を確保、自然に生かされる中から安全な食材の生産とその啓蒙普及活動を行う場「食の杜」の建設が進んでいます。1.5haの有機ぶどう農場を中心にワイン工場、食品加工工房、宿泊・交流施設を備え、1999年7月竣工予定で、まもなく「緑の中のユートピアモデル」が誕生します。



第 4 ス テ ッ プ

干陸予定地の中海・本庄工区1400haを含めて中海・宍道湖圏を、E M B C 技術の活用により、「ドリームマリンランド」として再構築。

近海漁業の鉄鋼廃船を、バイオテクノロジーと太陽光技術を活用した「エネルギー触媒水製造プラント船」に改造。

湖底に堆積した汚泥を莫大な費用をかけ浚渫・投棄するという従来の発想を脱し、富栄養水、堆積した汚泥をこの船に汲み上げ、爆発的生命連鎖を促す「エネルギー触媒水」に変え、湖に戻します。

水門と建設された後一度も使用されていない排水ポンプを活用、塩分濃度を調節。これらにより、魚・貝・藻類の飛躍的増殖が期待でき、広く市民に公開することにより、失業・将来の食糧不安への備えともなります。

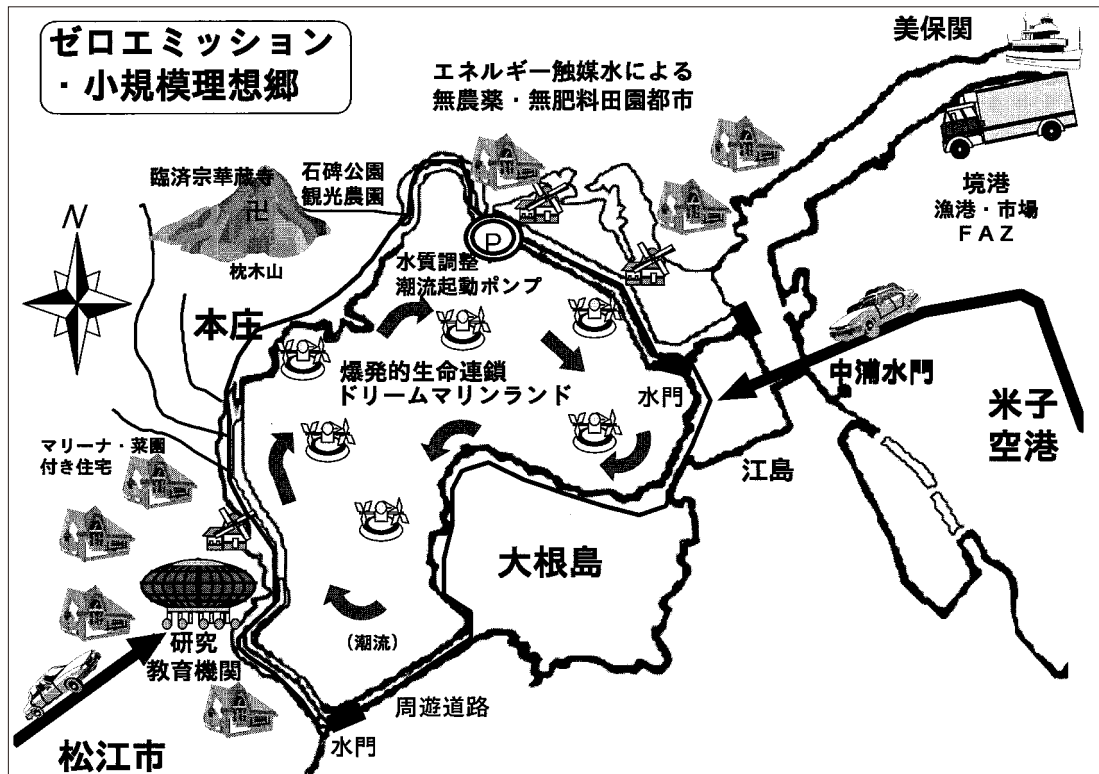
蘇生技術の研究開発を進めるなかで、中海・宍道湖を「豊穰の海」に再生、あらゆる既得権益から開放されたユートピアにすることも夢ではありません。

このプロジェクト実現のための議論・研究開発がスタートすれば、松江市長はじめ関係者のご尽力により整備が進められている国際文化観光都市松江、および出雲大社・玉造温泉等既存の観光地とあいまって、出雲—松江—米子間の広域的な活性化が促進されます。

この技術の研究開発が進み、世界とりわけ緊張状態が続く北東アジアに広まれば、恒久平和実現に向けての第一歩にもつながります。

宍道湖・中海の諸元

	単 位	宍道湖	中 海
水 面 積	km ²	80.3	96.9
水 容 量	億m ³	3.66	5.21
平 均 水 深	m	4.5	5.4
最 大 水 深	m	6.4	8.4
滞 留 時 間	年	0.3	0.4
流 域 面 積	km ²	1,288.3	595.2
流 域 人 口	千人	271.8	158.8
流 域 市 町 村		3 市 12 町 1 村	4 市 5 町 1 村



日本周辺の水産資源維持へ 漁獲量24%削減必要

水産庁試算

日本の周辺海域（三つ内）の水産資源を現状レベルで維持するには、漁獲量を全体で二四％ほど削減する必要があります。との水産庁の試算結果が三十一日までに明らかになった。

これを漁船の削減だけで行くと二万四千隻、約六万五千人の漁民が対象になることから、一部の漁業者からは早くも生活への影響を懸念する声が上がっている。

これが実現すると、数年内に計三百二十七万トンの漁獲量のうち、七十九万トンを百九十億円相当の削減が必要としている。これにクロダイなど地域性の強い魚種を加えると、計約五十万トンを約二十億円の漁獲を控えるければならないという。削減規模は毎年、資源評価をして設定する。

これを実現すると、数年内に計三百二十七万トンの漁獲量を維持できる見通しだが、過去の最も資源量が豊富だった水準に戻すには、さらに種類ごとに三〇―五〇％の削減の上乗せが必要としている。農水省官庁は、この数値について「いろいろな前提を置いており、そのまま（削減目標）数値にはならない」と指摘。この夏にも新しい水産行政の基となる法律策定に向けて議論している同庁の検討会の結論をまとめ、漁業関係者と十分協議した上で具体化した考えだ。

(山陰中央新報・共同通信社配信 H11.6.1)

◇海・島・山の中で暮らす理想住空間

出雲・米子両空港に近接した交通至便の中海周辺部（干陸後に承水路に予定されている区域を中心）に、海・山・島に囲まれた理想的な水辺の住空間を創出。

自分の投資（寄付）した資金、提供した技術・労働によって建設の進む「地球ユートピアモデル地区」の中で、マリーナと菜園が付帯した住宅に住み、目の前のドリームマリンランドで取れた新鮮で安全な食材を食べ、風力・太陽などクリーンエネルギーを用い、自然循環の中で廃棄物ゼロの地域を創造。

◇中海・宍道湖圏域観光風力発電施設

中海・宍道湖圏域に風力発電施設を建設。

その風力発電施設から、中国電力鹿島原子力発電所、原発資料館を巡る「エネルギーとエコロジーを考える島根半島ツアー」やシンポジウムを企画。観光を通じて、エコロジーへの意識変化を促します。

第1号風力発電施設として、中海干拓揖屋地区のバイオフィーム実証試験場付近に、「ウィンドファーム」建設も考えられます。

◇人生を考える石碑公園

「太陽の國出雲」構想のために、知識・知恵・技術・土地・資金等をご提供いただいた方々の石碑を建立し、枕木山・自然遊歩道沿いに石碑公園を建設。

石碑には、ご本人の生い立ちから寄付されるに至った来歴までを刻み、子供から大人まで、人間の生き方について学ぶ「人生を考える石碑公園」に。

このプロジェクトは不況下、バブル期に世界から集めた名石の在庫に悩む石材業界の支援にもつながります。

◇癒しと出会い、失業時代にお金のいただける観光農園

観光客に農作物の収穫作業をしていただき、収穫量に応じてお金をお支払いする、大失業時代に歓迎される「観光農園」。

◇次の時代をつくる高齢者のための ハイクオリティ高層マンション

中海・宍道湖周辺にある松江赤十字病院、松江市立病院、島根県立中央病院（出雲市）、鳥取大学医学部付属病院（米子市）の4大病院の隣接地に、見識が高く、豊富な知識をお持ちの高齢者の方々にお住まいいただく高層マンションを建設。

デンマークのケア思想である「人生の継続性の尊重」「残存能力・潜在能力の活用」を基本に、病院と連携しての健康管理、病気治療、介護・介助などの健康・医療サービスのほか、日常生活全般にわたる手厚い支援サービスを提供。

そして、当施設を生活拠点とし、長年培ってこられたノウハウを次世代に伝授。元気なうちは研究・教育施設にお出かけいただき、移動が不自由になった場合は、当マンション内において指導。

こうして、晩年はあらゆる人が教育者として人生をまっとうできることが人間として自然な生き方（死に方）であり、ある人物の晩年のありようが次の時代を担う人物の創出に大きな影響を与えた例は歴史上、枚挙にいとまがありません。教育の根源的なポイントはこのあたりにあるのではないのでしょうか。

◇人生を考える空間

人生を考える場所として、近在寺院（華蔵寺）の修復整備を提案。

また、キリスト教史上2回目の1000年祭を迎える記念事業として、教会の誘致も考えられます。

グリーンな風

独仏の原発はいま

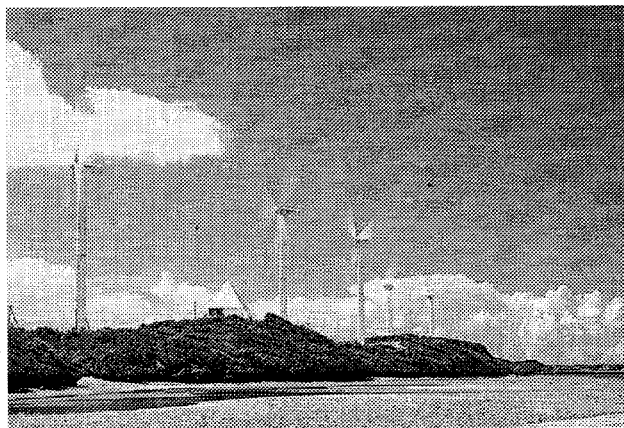
▽④△

原発の運転を徐々にやめる「脱原発」の方向で政府と産業界が合意したドイツ。背景を探るうちに、ここ数年で風力発電が急速に伸び、世界一の規模になっていることが分かった。最大時の発電量は、すでに原発3基分に達している。非政府組織（NGO）のドイツ風力エネルギー協会のワグナー代表によると、現政権は2010年までに風力や太陽光など自然エネルギーだけで電力消費の10%を賄う目標を掲げている。ドイツの全原発（19基）の約6基分に相当する量だ。原発取材のため、ドイツ西部のアウトバーン（高速道路）を車で走っていて、3基の風力発電を見掛けた。近くまで寄ってみた。

小高い丘の上に高さ50メートルの塔がそびえ、頂上でプロペラ状の風車がシュッ、シュッと小気味よい音をたてて回っていた。その後もアウトバーンや列車で同様の風車を何度も目にした。調べてみて驚いた。ドイツでは1998年末までに風力発電機が5000基以上設置され、最大発電能力は287万キロワットに達している。国民の目には日常的な景色、現実的なエネルギー源と映っているのだ。

風力発電は、文字通り風まかせで、最大出力が常に出るわけではない。だが、地球温暖化の原因となる二酸化炭素は出さないし、原

進む自然エネルギー開発



国内では積極的に研究導入を進めている沖縄電力・宮古島の風力発電機。一部はデンマーク製＝沖縄電力提供

多様化へ法と予算で援助

発のような事故のリスクや数十万円の隔離が必要な核廃棄物の問題もないという利点がある。

ドイツ政府は、こうした風力発電の特長を評価し、コール前政権時代に超党派で合意して91年から法律で

バックアップしてきた。「自然エネルギー優遇買い取り法」で、風力発電や太陽光発電は、通常の電気料金の9割で電力会社が買い取るという制度だ。

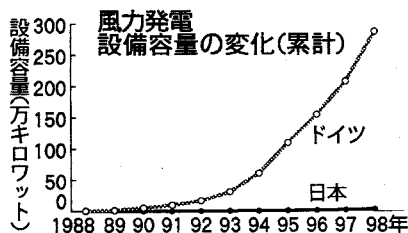
例えば、一般の電気料金が1キロワット時あたり10円だとすると、風力発電でできた電気は9円で電力会社が買い取る。設置業者側からす

△風力発電▽自然エネルギーの中では低コストで、クリーン、無尽蔵が特長。日本は98年末に約100基・最大発電容量約3万キロワットで、ドイツの約90分の1、10年前のレベルだ。世界的に見ても日本は第12位。技術や開発能力はありながら、導入が遅れているといわれる。

ると、9円より安く電気をつくれば、利益が見込めることになる。このためドイツでは多くの企業や団体が「風力に投資すれば、もうけることができる」と判断し、建設に拍車がかかった。その結果、90年と比べて現在は50倍以上の発電能力になり、関連産業は隣国のデンマークを含めて、約2万人の雇用を生み出した。

昨年10月に成立した社会民主党・緑の党連立政権は「自然エネルギーと省エネ促進は最優先事項」で政策合意した。この4月からはエネルギー税を導入し、その税率をエネルギーの効率化や自然エネルギーの開発、促進に充てる。

欧州連合（EU）も、自然エネルギーを2010年までにエネルギー全体の12



ドイツは電力の約30%を原発に依存している。この比率は日本とほぼ同じだ。エルベ川畔、ニーダーザクセン州グアレベン村へ行った。人口約600人。見渡せば山が見えない牧草地帯だ。比較的安全していることされる岩塩層(塩が岩石状に固まった地層)があり、ドイツ政府は深さ約800mの穴を本掘り、高レベル放射性廃棄物の最終処

大島 秀利（特別報道部）

振り返って日本はどうか。
今の日本の高レベル放射性廃棄物最終処分は「ステンレス容器」に結めて深地層中に安全に埋設する一方針だ。ひたたくいえば、人間の手の届かない深い所に置いて埋めこぼさないで、というところだ。仮に、放射能の害がほぼなくなるのが50万年とみて、も、それほど安定した地層がこの地震国のどこにあるのだろうか。国にわかには信じられない。1

核のごみは数十万年



の私たちの生活のあり
しうを憂へて、いかに
しうを憂へて、いかに
世代のことや、いわゆ
途、国が今後消費を伸
ばさうと考へなけれ
ばならぬといふとすべ
うと私たちは急激な右
肩がりのエネルギー
消費を、してはいけない
と思ふ。資源でも、環
境でも、地球がもたな
くなるからだ。

原子力発電は「未来
のなにか」と始まった。
じかに、「核のごみ」
を未だゆだねるべき
得なくなっている今
は、立ち止まることに
す。未来のため」では
ないか。

メールアドレス kishanome@mbx.mainichi.co.jp

「未来構想」テーマに松江でシンポ I区は干陸せず 漁業振興に

小松HNS研究所代表が私案

中瀬・本庄区の将来的な利用構想について、小松電機産業代表は、湖床のヘドロ除去に循環処理システムを導入することを提言した。同日、「I区」研究所代表は、本庄区を中心とした「総合企画研究事業」の「I区」は干陸しない栽培漁業に利用し、貯木場周辺と西部にHNS研究所が松江市内の港で干拓・造陸する案を提案し、統一して開かれたシンポに参加した。この席で小松

代表は、本庄区を中心とした「総合企画研究事業」の「I区」は干陸しない栽培漁業に利用し、貯木場周辺と西部にHNS研究所が松江市内の港で干拓・造陸する案を提案し、統一して開かれたシンポに参加した。この席で小松



(島根日日新聞 H8.9.24)

中海の夢 一冊の本に



「母なる中海」を手にする小松社長

小松電機産業社長の
提案を森氏が執筆

干拓に賛成か反対で揺れる 小松電機産業(島根県八雲村、本、『母なる中海』気水湖は島根県の中海(なかつみ) 問 0852-541166) 二十一世紀文明の予言(タ) 題に新たな活用方法を提案した の小松昭夫社長の主張が、イマモンド社、森清著) になった。

「小松私案」は海水と淡水が混じり合う気水湖として世界的にも有数の資源である中海を利用、栽培漁業や農業、観光などを核にして「自然と人間が溶け合った二十一世紀の新産業を創造する」というもの。

「太陽プロジェクト」と名付けており、官に頼らず民間の賛同者による出資と組織(ベンチャー・カブ・アミ・太陽)で事業を推進する。

これまで多くの中小企業、経営者を紹介してきた著者の森氏(山野美容芸術短期大学教授)は「夢とロマンと使命感が際立っている。地域に根差す中小企業の経営者にぜひ、読んでほしい」と語っており、小松社長も「これからが夢実現の勝負」と新たな闘志を燃やしている。

(松江)

(日刊工業新聞 H9.12.9)

中海から羽ばたけ、世界へ熱いメッセージ（中央が森清氏の著書「母なる中海」）



情熱は宇宙へ広がる

「母なる中海」(森清著、ダイヤモンド社)という本に出会いました。干

い考えたらいかがでしょうか？

先日、「母なる中海」汽水湖は二一世紀文明の子宮（森清著、ダイヤモンド社）という本に出会いました。干

い考えたらいかがでしょうか？

さて、本題に入りましょう（五月二十一日付に続く）。「そうです、そうなんです。だから「もーだめだ」とか「やっても無理だ」とか「田舎はダメ」など、マイナス発想の言葉は厳禁なのです。会社の中なら「マイナストーク一回につき百円の罰金」ぐらい考えたらいかがでしょうか？

はい、どうでしょうか？

音楽の世界でもよく言われますが、「聴覚に優れたシンガー（ステイビー・ワンダー）は歌がうまい」など、音（ことば）は聴力とは比例するのではないのでしょうか？

そうですね、聞き分けってご存じですか。私はDJをしているせいか、この聞き分けが案外得意なんです。実際、家などでテレビを見ながらレコードを聴けるので、とっても便利です。時間の節約にもなりますし…（他人に言わせると、変態なそうです）。

さて、本題に入りましょう（五月二十一日付に続く）。「そうです、そうなんです。だから「もーだめだ」とか「やっても無理だ」とか「田舎はダメ」など、マイナス発想の言葉は厳禁なのです。会社の中なら「マイナストーク一回につき百円の罰金」ぐらい考えたらいかがでしょうか？

拓問題でも揺れる中海を中心に、二十一世紀の日本と世界へ向けて、独自の「夢とロマンと使命感」に生きる、地元山陰のベンチャー企業経営者の考えと、山陰を愛する男としての情熱が如実に描かれていました。

その中でも「今やらずにいつやる。俺がやらずに誰（たれ）がやる！」

「歴史は一人から始まる、歴史は一人ではできない！」が特に印象深い主張です。

こんなに小さなこどもでもみんながそう思えば、最高の山陰、最高の日本、最高の世界と宇宙まで広がっていくような気がします。

（マイナストーク撲滅キャンペーン実行委員長・太田丈盛でした）

「世界には、多種多様な言語があります」
「言葉とは何だろうか」と考える「音」おの「音」の形状と



隔週水曜
シリーズ

「先か、光が先か」とよく言われますが、インドのヨガの考え方は宇宙が誕生した時に「あーおーむ」と言がしたそうです（そういえば日本には、これによく似た発音で「あーん」の呼吸という表現があります）。
例えば、赤ちゃんが母胎から生まれた瞬間「オギャー」と第一声を発しますが、生まれて自分の間は、光は感じるものの目はほとんど見えないそうです。しかし、しっかりと耳は聞こえているとか！

（山陰中央新報 H9.6.4）

本庄工区について独自の構想を提言

人と自然との ハイテク融合

小松電機産業社長

小松 昭夫氏



良質ヘドロで 海洋牧場実現

「つくり、人と水、食、街とハイテクの融合を考えたのですが、その一環の構想の一部です。ポイントは、島根県が干潟を計画している一七七町をそっくり水面で残し、反対に堤防と陸の間の五町を埋め、そこを有機農業の地にするわけです。」

「これは水面では何をするかといふと、まったく新しい栽培農業、いわば洋牧場、これまでの工業と違って、このままの状態で、とどろきの底産物と見なされている藻類、リン、ミ

「これは水面では何をするかといふと、まったく新しい栽培農業、いわば洋牧場、これまでの工業と違って、このままの状態で、とどろきの底産物と見なされている藻類、リン、ミ

「中海・本庄工区」陸にの既存産物をそのまま活用して調製した構想を提言しています」

湖底に生命連鎖

「コロンブスの卵のよう

「私はこれまでにN.S.人な構想ですね。ただ、本質・自然・科学・研究所の問題が気になりますので、

「この良質なヘドロは中

「九月十三日午後一時

「中海・本庄工区」陸にの既存産物をそのまま活用して調製した構想を提言しています」

「九月十三日午後一時

「中海・本庄工区」陸にの既存産物をそのまま活用して調製した構想を提言しています」

(日本海新聞 H8.9.9)



ゼロエミッション・小規模理想郷（中海・宍道湖圏域の新構想）
イメージ



ゼロエミッション・小規模理想郷（中海・宍道湖圏域の新構想）

「観光風力発電施設」「石碑公園」「観光農園」 イメージ



ゼロエミッション・小規模理想郷（中海・宍道湖圏域の新構想）

「ドリームマリンランド」「海・島・山の中で暮ら理想住空間」 イメージ

4. 未来を拓く研究・教育機関

趣 旨

「太陽の國出雲——地球ユートピアモデル事業」構想を議論、計画、そして自己発展的に具現化するプロセスを通して、「人物」の養成を行う機関です。

人類の英知が芽生える社会の創造に向けて、21世紀を担うリーダーを輩出するべく、

- ①命の原点の体感と、教育による死生観の確立
- ②言葉と表情、コンピュータ・テクノロジーを活用したコミュニケーション能力の向上
- ③専門知識・技術の習得

の3点を基本に、「人物」養成のためのカリキュラムを研究開発。

概 要

資質ある人々を公募。

「人類の特性とは」「人間の定義とは」という根源的・多面的・長期的視点から歴史、哲学、経営学、テクノロジーを学習・研究。

また、本事業を具現化するための議論・構想・調査・設計・建設・運営の各段階を通じて、「実学」を教育。

人類共通の目的「天寿が全うでき、楽しく愉快に持続的に生きられる地球社会の創造」をめざし、地政学的・今日的社會問題の中から目標を定め、それを具現化する過程で進化していく人物を養成する「インキュベーター（孵化器）学園」。

経営変革の新戦略

「ナレッジ・マネジメント」

⑬

△領域を超え共同創造の場
△昨秋、米カリフォルニア大学バークレー校に日米



基礎
コース

研究最前線④

欧の知識研究者と企業幹部約四十人が集まった。今最先端をいく注目のナレッジ・フォーラムである。この定例会をリードするのは同校の知識学特別名誉教授職と企業幹部が一堂に会し、

対話を通じて、知識について領域を超えた共同創造の場を形成していることだ。参加者は個の創造性と組織環境の本質を様々な研究事例から探究した。さらに知識の応用の基礎となり、

るVでは一体、どのようなものになるのか。そこでは日本の「場」の概念が注目のイネイブラー（成功要因）となった。場とはナレッジ・カーが共有する知的、情的相互関係性が創出される物理的、心理的空間をいう。・S・ブラウン所長は、プ

もの」として新たな経営言語を示唆した。
△知識時代のリーダーシップ
V知識時代には組織構造と共にリーダーシップのあり方も変化を迫られる。指示を与えるマネジメントよりも、人を発奮させるリーダーシップが求められる。創造的な人々や環境に過剰干渉してはならない。時として場の創造性を壊してしまうからだ。

になることによるマネージング」も重要であることが指摘された。
バークレー校でのこうした領域を超えた対話は①知た領域を超えた対話は①知識創造と産業能力②知識移転と企業の組織学習③継続的イノベーションの組織化④芸術、科学、ビジネスの創造性のコンテキスト（文脈）の役割——という重要課題にまで及んだ。翌日は共創の成果をサンフランシスコ・ベイ・エリアの人々に、オープンフォーラムとして一般公開した。

を語り、企業知力の向上法、ナレッジ・マネジメントの未来、さらにはクリエイティブビジネスと知識について熱心に語り合った。このフォーラムの成果は同校の「カリフォルニア・マネジメント・レビュー」（一九九九年春季号）に論文集としてまとめられ、世界に発信される。

関心高まる「場」の概念

同時にその創出に影響する知識の共有や利用の技術、構造にも言及した。その結果、真に有効な将来の知識組織は、今日の企業のものとは非常に異なるであろうということだった。

△知識の生態系を育て
こうした共感の場と信頼に基づく対話の場を通じ、個の暗黙知（表出化以前の知識）が豊かになり、新たな知識が生み出されていることが報告された。場とプラクティス（実践）のコミニティーの概念は、東洋

ラクトイスのコミュニティでは、従来のマネジメントとは全く異なる見方が必要であると主張。「知識の生態系（ナレッジ・エコロジー）は、基本的にダイナミックなものであり、管理するものでなく、はぐくむ

が必要なのを知ることである。「完全に見えない存在になることによるマネージング」も重要であることが指摘された。

を語り、企業知力の向上法、ナレッジ・マネジメントの未来、さらにはクリエイティブビジネスと知識について熱心に語り合った。このフォーラムの成果は同校の「カリフォルニア・マネジメント・レビュー」（一九九九年春季号）に論文集としてまとめられ、世界に発信される。

こうして、日本発の知識経営理論が世界で注目され、企業内の形式知に偏重しがちな欧米のナレッジ・マネジメントに大きな影響を及ぼしつつある。

知識経営システム研究会



未来を拓く研究・教育機関
イメージ

●「太陽の國出雲——地球ユートピアモデル事業」 構想の誕生過程

- 1988年4月 島根県商工会連合会とタイアップ、若手経営者20名を集め小松電機産業創業の場所にて「知草塾」を始める。
- 1989年6月 異業種7社で協同組合「テクノくにびき」設立。設立記念式典、参加者300名。
- 1990年10月 韓国企業「東宇技研」とシートシャッター「門番」の業務提携。
- 1991年1月 中小企業研究センター賞受賞（社団法人中小企業研究センター）
- 1991年10月 ニュービジネス大賞受賞（社団法人ニュービジネス協議会）
- 1993年1月 地域社会貢献者賞受賞（日刊工業新聞社）
- 1994年11月 「神在月縁むすび全国大会」開催。参加者260名。基調講演：ピーター・タスカ氏（クラインオート・ベンソン証券会社ストラテジスト）。パネラー：下村澄氏（（社）ニュービジネス協議会顧問）、ピーター・タスカ氏、小松昭夫（小松電機産業（株）社長）。分科会座長：大西啓義氏（アクティビビジネス（株）社長）、武原誠郎氏（イムカ（株）社長）、植原紘治氏（隼塾塾長）、橋谷博氏（気象湖沼学研究室代表・前島根大学理学部教授）、首藤健次氏（（株）マザーズシステムジャパン社長）、分科会コメンテーター：岸博氏（農村環境研究会代表）、治郎丸明穂氏（エディター）、小室孝太郎氏（漫画家）、山田鋭次郎氏（東洋化工（株）社長）、影山和夫氏（島根中央ホンダ（株）社長）、藤原洋氏（（株）エリアサイエンス・総合政策研究所所長）
- 1995年4月 HNS（人間・自然・科学）研究所設立。代表：小松昭夫。
「一村一志運動」提唱。『治水の偉人周藤彌兵衛』（漫画・児童文学・小説）発行。「周藤彌兵衛シンポジウム」開催。参加者280名。コーディネーター：長野忠氏（山陰中央新報社論説主幹）、パネリスト：村尾靖子氏（児童文学者）、小室孝太郎氏（漫画家）、唐沢勝敏氏（全国中学校社会科教育研究会長）、内田充則氏（島根県企画振興部参事）、内田文恵氏（島根県立図書館主幹）、交易場修（ライター）
- 1995年4月 第54回注目発明選定証受証（科学技術庁）
- 1995年6月 「人と水と食のシンポジウム」開催。参加者250名。講師：久司道夫氏（イースト・ウエスト・ファウンデーション会長・食と平和への貢献でスミソニアン博物館殿堂入り）、岸博氏（農村環境研究会代表・ラグーン式水処理の開発者）
- 1995年11月 「第1回神在月縁むすび世界大会」開催。参加者600名。主催：世界八百万委員会・会長千家尊祐氏（出雲大社権宮司）、事務局長・山本謙氏（（財）しまね技術振興協会顧問）、ヒーリングミュージック：宮下富美夫氏（音楽家）、基調講演：草柳大蔵氏（評論家）、久司道夫氏、パネラ

ー：下村澄氏、朴熙澤氏（在日本韓国民団島根県地方本部団長）、望月照彦氏（多摩大学教授）、久司アベリヌ偕子氏（久司道夫氏夫人・マクロビオティック啓蒙家）、中村豊秀氏（ヒューマンコミュニケーションセンター所長）、分科会座長：橋谷博氏、井上裕義氏（(株)風土プラン社長）、分科会コメンテーター：植原紘治氏、岸博氏、首藤健次氏、武原誠郎氏、話題提供者：佐野茂氏（元鳥取県水産試験場境港分場技術士）、石飛裕氏（島根県衛生公害研究所）、中西正己氏（京都大学生態学研究センター教授）、召古裕二氏（日本ミクニヤ(株)社長）、木村俊博（HNS研究所所員・元島根県環境保全課長）

- 1996年3月 地域活性化貢献企業賞受賞（日本経済新聞社）
- 1996年5月 HNS研究所「中海本庄工区の未来構想」発表会開催。参加者500名。講師：久司道夫氏、小松昭夫（HNS研究所代表）
- 1996年9月 HNS研究所「中海本庄工区の未来構想」シンポジウム開催。参加者500名。講師：安達生恒氏（島根大学名誉教授）、小松昭夫、パネラー：坂本巖氏（島根医科大学助教授）、長谷川泰治氏（(株)テクネ研究所代表取締役）、岸博氏
- 1996年9月 研究会「ベンチャーアカデミー太陽」設立。
- 1997年3月 「第2回縁むすび大会」開催。参加者600名。講師：斑目力曠氏（ネミックラムダ(株)会長）、望月照彦氏、七田真氏（米国ニューポート大学日本校教育学部教授）、竹内日祥氏（日蓮宗妙見閣寺住職・国際永久平和祈念祭典協議会理事長）、孔健氏（チャイニーズドラゴン新聞社社長兼主幹・孔子の75代直系子孫）、大西啓義氏、日野佳恵子氏（ハートストーリー代表取締役）
- 1997年5月 ダイヤモンド社刊・森清著『母なる中海—汽水湖は二一世紀文明の子宮』出版。
- 1997年6月 韓国独立記念館に100万円を寄贈。
- 1998年1月 HNS研究所『治水の偉人・清原太兵衛』（漫画・児童学・小説）発行。シンポジウム開催。参加者250名。講演：藤岡大拙氏（島根県立女子短期大学学長）、パネラー：長野忠氏、寺井敏夫氏（小説著者・JA共済連代表理事専務）、村尾靖子氏、小室孝太郎氏、福井哲郎氏（前生馬公民館館長）、朝山芳圀氏（佐太神社宮司・清原太兵衛顕彰会理事）
- 1998年5月 中国『伝世蔵書』を島根大学に寄贈。
- 1998年7月 韓国赤十字に北朝鮮食糧援助資金500万円を寄付。
- 1998年8月 島根、東京（9月）で開かれた「共生文明フォーラム・混迷からの脱出」で文明法則史学の林英臣氏、小松昭夫講演。参加者200名。
- 1998年10月 小松電機産業(株)セミナーホールにて環境微生物学博士・高嶋康豪氏の講演会開催。演題「新たな地球と生命の蘇生に向けて」。参加者200名。（高嶋博士は1999年6月、ラスベガスでの国際学士院第3回世界大会で「環境と微生物および動態系科学とニューサイエンスについて」のテーマで基調講演、その理論を世界に向けて発信）

（※肩書は当時のものです）

異業種7社で新事業

テクノ
くにびき
松江で設立記念式典

松江市、八雲村に本社を置く自動制御装置メーカー、運送業、コンピュータソフト開発、建設業など業種の異なる企業7社が、技術・経営ノウハウを統合した新しい事業展開を目指して四月に設立した協同組合「テクノくにびき」の設立記念式典が十六日、松江市千鳥町のホテル一畑で開かれた。

小松電機産業、小松電気製作所、八雲自動車、システム工房エム、大島タンポール、新陽電工、岩田建設の七社。当面、小松電機産業の開発した自動制御シートシステムと上下水道計装システムの応用化に取り組む。シートシステムの応用については、国の中小企業融合化組合の認定準備を進めている。また、長期戦略として、



協同組合「テクノくにびき」設立記念式典であいさつする小松昭夫理事長—松江市千鳥町、ホテル一畑

記念式典には、地元企業の経営者ら約三百人が出席。小松昭夫理事長が「利益追求でなく、人間らしい生き方を求めて協同組合を設立しました。異業種が協力してテクノロジーで新しい事業を起こし、島根県の発展に少しでも

(山陰中央新報 H1.6.17)

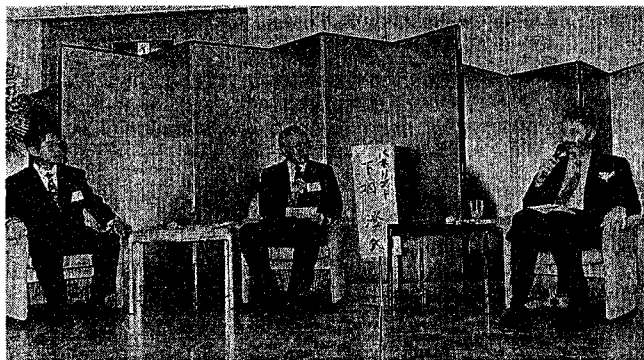
時代は「組織から個人」

講演など国際経済学ぶ

松江で神在月
全 国 大 会

激動する国際経済など世界レベルの問題を、全国の

神々が集う出雲の地で考えるという、「神在月縁むすび全国大会」（同会実行委員、県、県商工会連合会主催）が二十六日、松江市千鳥町のホテル一畑で行われた。大会には県内外の財界人ら約二百六十人が参加。まず、英国クライント・ペソン証券会社ストラテジストのピーター・ダスカさんが「企業家精神の回復と日本の元気の回復」のテーマで基調講演。「世界的不況で資本主義が行き詰まる中、日本経済も成長から成熟に向かわなければならぬ」と主張。また「企業が人材を育てるのではなく、優れた人材が企業を興す」と、システムの時代から個人の時代への変化を強調した。



国際経済について意見を交換するパネリスト—松江市千鳥町、ホテル一畑

(山陰中央新報 H6.11.27)

和食の知恵を世界に

人と水と食のシンボ 250人参加、意見交換

松江



自然食メニューを囲んで交流する参加者たち
＝松江市朝日町の松江東急イン

環境保護や自然食に関心「食のシンポジウム」が七日、山陰県から約三百五十人を招き、松江市朝日町の松江東急インで開かれた。

小松昭夫同シンポ実行委員長が「出合いの第一歩」とあいさつ。独特のバイオ処理法で湖沼浄化に取り組む津田氏（農林環境研究会）の報告に続き、国際的な自然食運動を指導する久司道夫氏が「健康の快便と世界平和」と題して講演した。肉食偏重など各国での食生活の乱れや健康破たんに触れた久司氏は、「環境に支配される人間だが、自らの食物はコントロールが可能。調和のとれた日本食は世界で最も優れている」と述べ、自然と食文化を残す山陰から伝統食の知恵を世界に伝えようと呼びかけた。

講演後の交流会では、有機農産物でできた作物や新鮮

(山陰中央新報 H7.6.9)

な地元産の食材を使い、「小」で入りの玄米ご飯「アツ」のパン粉付焼き」など十五種類以上の特別メニューが、全大会（会場：松江市）すの。参加者は言葉を打ちながら情報交換をし合っ

21世紀へ世界の共生探る

「神在月縁むすび世界大会」

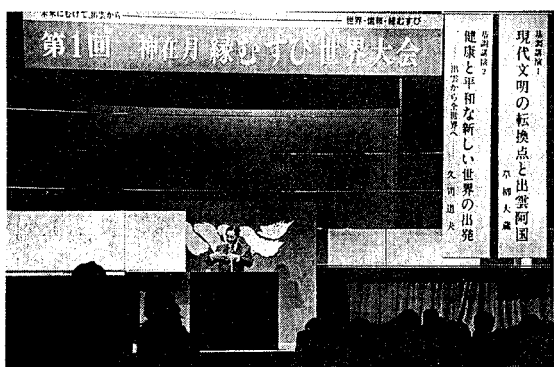
文化経済人講演、討論熱っぽく

松江

縁結びの神話でゆかり、二十一世紀に向けての共通の出雲地方で、人間同士、目的、目標を深めあつた。国際的な信頼関係を築くことと、二十日、「第一回神在月縁むすび世界大会」が松江市西川津町のくにびきメッセで開かれた。参加者らは講演、パネルディスカッションを通して、参加した。

大会は前衛音楽（ヒーリングミュージック）の宮本富美夫氏のライブで開幕。評論家の草柳大蔵氏、哲学者の久司道夫氏がそれぞれ講演。小松昭夫氏、松電機産業社長ら五人のパネリストが「世界との共生・競争を目指して」をテーマに討論するパネルディスカッション、分科会があった。

このうち草柳氏は「現代文明の転換点と出雲阿国」をテーマに現代文



現代の文明について講演する草柳大蔵氏＝松江市西川津町のくにびきメッセ

(山陰中央新報 H7.11.24)

経 営 を 語 る

一隅を護り、千里を照らす



小 松 昭 夫

小松電機産業株式会社 代表取締役

H N S (人間・自然・科学)研究所 理事長

エコー・コンサルティング(有) 代表取締役

ビッグプロジェクトを通じて パラダイム転換を

(ベンチャー・リンク 平成 10 年 5 月号掲載分・一部修正)

アジアの片隅の日本

「近い将来、アジアの片隅に日本という国があった、という時代がくる」。ある国際的に有名な政治家の言葉である。

「応任の乱と明治維新が同時に起きるような乱世に突入した」という論者もいる。

私も、長い間、同じような危惧を抱いてきた。

私たちが直面している状況は、まさしく日本民族存亡の危機といっても過言ではない。一過性の不景気などという認識で彌縫策^{びほうさく}を弄し、根本的な構造改革を怠れば、依頼心の強い無気力人間と我欲の塊のような人間ばかりが棲む「鬼が島」と化す危険性がある。

経済のみならず、政治、社会、教育など様々な局面で今、一気に噴き出している諸問題の解決策は、従来の思考や認識の枠組の延長線上にはもはや存在しない。

私は、現在の閉塞状況は、パラダイム転換のためのビッグプロジェクトによってしか打破できないと考える。

そのためには、すべてのことがらを原点に帰って考え直す必要がある。その上で、人類共通の価値観に基づいたビジョンを提示しなければならない。

中国の諺に、「繁栄の極みに衰退の芽は生じ、衰退の極みに繁栄の芽は生じる」という言葉があるが、私は現在の危機は、将来の繁栄の礎を築くための、またとないチャンスとして生かせると考えている。

今こそ、たんなる景気対策の次元にとどまらない、人間復活を目的とした、歴史の評価に耐える行動を起こすときにきている。

好景気の定義

「景気がいい」というのは、どういう状況を指すのだろうか。

物がよく売れ、企業が儲かり、回り回って庶民の懐や国庫を潤す。これが、表面的な解釈である。

だが、私は「個人が楽しく愉快に生きている状況」と定義している。

果てしない人間の欲望を活用し、理想社会ができあがる方向に導く。各個人が、その目的達成のため、自分の役割を自覚、それを強制されずに果たして、楽しく愉快に活動している。そういう状況を「景気がいい」というのである。

次に、「企業とは何か」。

企業の「企」という字は「人」を「止める」と書く。止まる人とは、顧客のことである。企業は顧客、すなわち消費者なしには存在できない。

ところが、人は本来立ち止まることを嫌う。そういう人間を止めておくためには、立ち止まるほどの価値のある何かをたえず創り出さなければならない。そういう創造行為が企業活動である。

だから、人間の欲望に歯止めがないように、企業活動も企てに次ぐ企てで進んできた。そのこと自体は非難されるべきことではないが、そこに利己主義と競争のための競争が加わったため、だんだん社会や人間性に歪みが生じるようになり、人類の存立基盤を脅かす環境汚染も深刻になってきた。

そういう問題を是正するのが事業家の役割である。私は、「事業家とは経済活動を通じて社会変革をめざす者」と定義している。

いくら崇高な目的を掲げても、事は始まらない。その目的を具現化するための目標のイメージを絵や数字に置き換える。そして、それに賛同する人たちが集まり、役割分担、計画を立て、組織をつくり、人々の欲望がより高次元になるような制度をつくる。さらに、富の再配分におけるプロセスの中で、心の進化が促され、意識改革が無意識のうちに行為されて、未来を担う志を持った思考力豊かな人物が育っていく。これが、事業である。

今、自然環境と調和がとれ、節度と思いやりが生まれる持続可能な共生社会へ向けて、新たな事業が求められている。その事業のプロセスを通じて、競争と共生が矛盾なく両立する道筋が生まれてくる。

「守成」の時代

21世紀に共生を許される人間の条件は「天寿が全うでき、楽しく愉快に持続的に生きられる地球社会の創造」を目指し、それぞれの置かれた立場に立って具現化すべく目標を定め、役割を担うこと、と考える。

500万年前に誕生したといわれる人類が、火や道具を使い、農業を営み、産業革命を経て、今日の工業化・情報化社会を築き上げてきた歩みは、この究極の目的を追求する過程ととらえることができる。

「飢餓と殺戮の社会」から「天寿が全うできる社会」への移行期を「創業」の

時代、そこから次の「楽しく愉快に持続的に生きられる地球社会」へと歩みを始めた段階を「守成」の時代と定義している。

未開地や発展途上国では、飢えや殺戮の問題は未だ解決されていないが、先進国では、科学技術の急速な進歩によって生命を脅かされる心配は少なくなっている。

つまり地球は、創業から守成への転換期と位置づけられる。東西冷戦が終わり、人類は初めて、名実ともにそのような段階を迎えた。

では、どのような転換が必要なのか。

創業の時代には、「霸道」、すなわち武力や権謀術数で国が治められる。そして、この時代は政治家・官僚が主導。

対して、守成の時代は「王道」。この時代は、事業活動を通して修羅場を経験した、社会心理学者アブラハム・マズローのいう自己超越実現欲求の段階に達した民間が主導。

「飢餓と殺戮の社会」から効率的に脱する手段として、霸道は確立されたものである。

派生する犠牲を承知の上で、ホンネとタテマエがあることを常識とする文化を創る。また、人心が物欲・権力欲を肥大化させるよう諸制度を作ることにより、新しい技術に興味を持つ人が増え、その技術により物が作られ、さらにその物が新しい技術を生む。とくに戦いの中では、これが急速に循環。平和時には、この成果は、衣食住を満たし得る社会を作る上で大きな役割を担ってきたのである。

とはいえ、このような理論や手法は、一時的なものでしかありえない。それを平和な時代においても、永遠のものであるかのごとく大衆を欺くことで、霸道は成立していた。

霸道から王道への転換

一方、王道は永続可能な本音の理論・手法である。

大事なことは、状況が変わったら、理論・手法を根本的に転換することである。さもないと、副作用により人心・肉体の崩壊を通じて社会が滅亡する。と同時に、周辺諸国に多大な損害を及ぼす。

戦後の日本は、大量生産・大量消費の物質万能主義で突っ走り、経済大国となった。しかし、規格製品を効率的に生産することは、戦時経済の優先課題である。それがそっくり戦後に持ち込まれたことは、戦争中にだけ通用する一時的な理論・手法を、永続可能なもののようになり、大衆に錯覚させ続けてきたということである。

私は、日本において、霸道から王道への転換点は、1985年、ドル高修正のため為替市場への協調介入が決まった「プラザ合意」だったとみなしている。しかし、当時も構造改革が叫ばれながら実現せず、そのままバブルに突入し、現在の惨状を招いてしまった。だが、今からでも遅くはない。ただし、残された時間は少ない。

大量生産・大量消費の20世紀には「物づくりとその普及のための人づくり」（霸道）が追求された。これを、21世紀には「楽しく愉快に持続的に生きられる人づくりのための事おこしと物づくり」（王道）へと転換しなければならない。「事おこし、物づくり」の過程の中に感動を甦らせ、人間の心の進化を促す施策、すなわち人類共通の目的に向かっての競争と共生が矛盾なく両立する仕組と場の設定。これが、必要とされる「パラダイム転換」のプロジェクトである。

「太陽の國出雲——地球ユートピアモデル事業」

「楽しく愉快に持続的に生きられる人づくりのための事おこし」をめざす具体的事業の場を創出するべく、私は、『東海総研マネジメント』1995年12月号で、初めて発表させていただいた、一期工事5000億円、総事業費2兆円規模の「太陽の國出雲——地球ユートピアモデル事業」に向かって、一步を踏み出そうとしている。

すでに、その構想に基づき、4つの具体的なプロジェクトの計画を、出雲において発進させている。

そのひとつが「ゼロエミッション・小規模理想郷」プロジェクトで、次のような内容である。

島根県が干陸を予定している中海・本庄工区を水面で残し、ドリームマリンランドとし、環境、食糧、エネルギーなど、人類が直面する危機をいかにして乗り切るかを模索する実験場とする。

バイオテクノロジーと光ファイバーで導いた太陽光により、湖底に堆積しているヘドロからエネルギー触媒水を作り、藻類を繁殖させ、「爆発的な生命連鎖」の起きる汽水湖として蘇らせる。

さらに、周辺にエネルギー触媒水による無農薬・無肥料田園都市を建設。ここでは、太陽・風力・水素などのクリーンエネルギーを用い、少ない水源で農業を行い、文化的な生活を送るための技術開発を進める。

これにより21世紀の新しい文化の創造をはかり、議論・研究・構想・調査・企画・設計・建設・運営のプロセスを通じて、心の進化を促し、21世紀の世界を担う人物育成をめざすものである。

志を同じくする個人、良識ある企業・団体が自発的な意思によって寄付、投資を行い、このビッグプロジェクトを推進。

つまり、従来の公共事業のような手法はとらず、新しい官民の役割を定め、計画を進める。

財政破綻の時代に、公共事業には依存できない。国債の発行は、どう言いつくらってみても、今の若い人たちに借金を残し、活動の自由を束縛する以外の何ものでもない。さらに、北東アジアの不安定要因と重なり、このままでは早晩、日本国内において地獄絵が繰り広げられる可能性も否定できない。

高齢・少子化が大きな社会問題になっている時、世代間の分離・断絶はますます深まり、最後には応仁の乱のような世代間闘争にいきつく。現在、社会で最も大きな問題となっている子供たちの残酷な事件は、このことを暗示しているのでは。

このプロジェクトは、世代・地域間の「富の移転」を促し、国内外の諸問題を解決する糸口になると同時に、難問山積みの世界情勢に新たな道筋を提案できるものと確信する。

戦後、復興期から高度成長時代を経て今日に至るまで、必死に働いた日本人の富が、1200兆円の個人金融資産として蓄積され、そのうち高額資産者約50万人で、全金額の7割を占めるともいわれている。

金融ビッグバンにより、世界のために、この資産を国外へ流動させる必要もあるが、一部は「楽しく愉快に持続的に生きられる地球社会実現」のために海洋立国・技術立国としての、日本の役割を果たすべく、この実験プロジェクトを立ち上げ、投資することが、今、必要と確信する。

アメリカをはじめ世界各国からの内需拡大要求にも応えられ、さらには、世界に誇る土木建築技術を持ちながら苦況にあえぐゼネコン業界にも朗報をもたらす。

このビッグプロジェクトは、21世紀に向けたパラダイム転換の起爆剤。これがきっかけとなり、世界各地で連鎖的な知的爆発が起こり、人類未踏のユートピア建設に向けて、多くの人々が立ち上がる。

出雲の地で生まれたこのプロジェクト（案）が、志ある人々の心に火をつけ、議論が始まり、閉塞状況が打ち破られる原動力になると確信するものである。

ラジオたんぱ経営セミナー 梶原四郎のトップインタビュー

聞き手／元NHKアナウンサー 梶原四郎 氏
(ラジオたんぱ経営セミナー1998年3月号収録)

倒産、ルンペン暮らし、そして創業

梶原 小松さんの会社は松江市に本社があり、今年の2月で創業25周年とうかがっております。会社案内を参考に、現在の事業内容をご紹介しますと、「コンピュータと制御装置・センサーを系統的に組み合わせて、新しいテクノロジーに挑戦する制御システムメーカー」です。最近では、上下水道施設の遠方監視自動制御装置をはじめ幅広い展開をされているということですが、もともとは制御装置や配電盤などのメーカーだったわけですね。

小松 創業は昭和48年2月で、10万円の現金と5万円の中古車、それに工具箱一つからのスタートで、弟と二人で始めました。

梶原 元手が10万円ですか。

小松 それでポンプの修理業からスタートしたのです。修理というのは現金収入ですから。そして次はポンプの販売ですね。

梶原 ポンプといってもいろいろありますが、どんなポンプですか。

小松 当時、島根県では水道が普及していなくて、家庭用の井戸ポンプというマーケットがあったんです。それと、トイレが汲み取り式から小さな浄化槽を備えた水洗式へと移行する時期で、これに使う排水ポンプ。また、田舎でも学校やショッピングセンターが次々に改築されるようになって、コミュニティプラント（合併浄化槽）が設置されるようになってきて、それに使われる污水ポンプ。そして次はプラントの心臓部である電気制御装置という具合に展開していったんです。

梶原 いわゆる「農村の近代化」に貢献したわけですね。

小松 そうですね。

梶原 お生まれも松江市ですか。

小松 松江から南に12kmほど山手に入ったところの、八束郡八雲村の出身です。

梶原 「やくも」は「八雲立つ出雲八重垣……」の八雲で、出雲の枕詞ですね。

小松 そうです。そこに熊野大社という神社があるんです。全国に熊野神社はたくさんありますが、その元祖という説もある神社です。その近くで創業しました。

梶原 ご生家は農家ですか。

小松 もとは地主です。

梶原 地主の跡継ぎだったのですか。

小松 祖父の代で分家して、私で3代目です。戦前は割と裕福な生活をしていたようですが、戦後の農地改革で農地がほとんどなくなり、父が3反歩ほど残った田んぼをもとに生計を立て、家族8人が何とか生き延びていった。そういう中で、私は育ったんです。

梶原 地主の長男としてお生まれになったけれども、そういう状況の中で高校を卒業され、すぐ就職なさったわけですね。

小松 私は小学校の頃から薬草を採って売ったり、筍の皮を拾って売ったり、あるいは父の作った花を、12km離れた松江市内に自転車で売りにいったり、そういう生活をしておりました。収入があまりないものですから。父は電力会社の総務、つまり事務屋でしたが、これからは事務屋では大変だということで、男の子は皆、技術の道に進ませました。6人兄弟のうち男は3人ですが、私は機械、次男は電気、末弟は化学の方に進みました。いずれも高校ですが、それで社会に出ていったんです。

梶原 それぞれ理工系、今で言う理系ですね。

小松 高校ですから、どちらかというと言職人という領域でしょうね。

梶原 それで、就職されたのが農業機械メーカーでしたね。

小松 私の家から7kmほど離れたところの東出雲町に佐藤造機という会社があり、昭和38年に松江工業高校の機械科を卒業し、その会社に入りました。島根県内の製造業で上場企業はそこ一社で、研究開発部門もあり、全国展開もしている、当時の地元では良い会社だったんです。

梶原 どんな農業機械を作っている会社だったんですか。

小松 耕耘機、テーラー、もみすり機、脱穀機などです。農業機械の総合メーカーとして、日本でも3本の指に入る会社でした。

梶原 当時は農業近代化まっさかりの頃ですから、まさに右肩上がりの時期に入っていたわけですね。

小松 ええ。

梶原 どんな仕事をされていたんですか。

小松 製品開発を手がける中央研究所に入り、耕耘機のトランスミッションや油圧機器の設計を専門に、8年間ほど勤めさせていただきました。

梶原 そのままずっと勤め続けられなかったのは、どうしてですか。

小松 昭和46年に経営が破綻して、会社更正法の適用を受けることになったんです。

なかなか引き受け手がなかったのですが、半年目によく、管財人とし

て三菱重工から早川さんという方が来られて、そして現在、三菱農機ということになっているんです。私は、3月の倒産後半月くらい様子を見まして、「自分は新しい道を拓こう」ということで辞めました。当時、社員数は1200～1300名で、私は26歳でしたが、私が辞めて以降、若い人たちがかなり辞めましたね。

梶原 辞めてどうなさったのですか。

小松 辞めて、自分で事業を起こそうと考えていました。ちょうど、父が選挙に出て落選し、家庭も経済的に苦しかったものですから。

梶原 それは地方議員の選挙ですか。

小松 そうです。大体、落選しますと借金が残ります。しかも、弟も失業中で、一家がすべて収入がなくなるという事態になりました。ところが、元地主ですから出すお金は付き合いでたくさんいる。家もかなり大きいので、普通のサラリーマンの収入ではその維持も難しい。これはもう自分で事業を起こすしかないかなと思ったわけです。そして、同じやるなら技術者として理想的な職場を作りたいという気持ちもありました。最初は、8年間設計をやっていたので、設計事務所をやろうと思いました。それで、大阪に設計事務所を開くための勉強に行ったんです。

梶原 出雲から初めて大阪へ出てきたわけですね。

小松 ええ。半年ほど設計事務所に勤めました。ところが、これは将来なかなか難かしそうだということがわかって、また、どうも自分にはちょっと合いそうにないと感じて、辞めました。その後は、ルンペン暮らしをしまして……。

梶原 ルンペンですか。

小松 パチンコ屋に行って、拾ったパチンコ玉で稼いで生活するというような……。

梶原 それは大阪でですか。

小松 ええ。

梶原 なぜまた、半年で飛び出してしまったんですか。

小松 入った会社に限ってのことで、他が全部そうだということではないのかもしれませんが、そこでやっていた機械設計というのは「紙1枚いくら」「1時間いくら」なんです。技術的なことでいろいろアイデアを出しても、お情けでプラスアルファをもらうだけ。こういう世界でした。

梶原 月給というよりは、今でいう採用労働制みたいなものですね。

小松 まあ、そうですね。これでは付加価値が非常に低いし、どこかに応援に行くというような形だから、主体性も持てない。

梶原 やはりその頃からですか、一国一城の主になってやろうと思われ始めたの

は。

小松 私けっこうサラリーマン時代楽しくやっていましたので、そんな気持ちはさらさらなかったですね。倒産しなかったら、独立しようなんて考えは起きなかったと思います。

梶原 ルンペン生活というのは長かったのですか。

小松 半年ぐらいです。これじゃだめだと思ひまして、会社を作るには物を売る勉強をしなければというので、商社に入りました。従業員10人ぐらいの、小さな機械商社でしたが、そこで物を売ってお金に換えることを学んだんです。その時初めて、手形、小切手、納品書などが一体どういうものかがわかってきたんです。

梶原 地主さんの御曹司でボンボンで育ってきて、初めて世間の波にもまれたということですね。

小松 そうですね。それと、研究所に8年いたので、お金ということに直接関係なかったですからね。

梶原 ということは、商社での経験はかなり良い勉強になったわけですね。

小松 ええ。それがあったからこそスタートできたと思うんです。

梶原 それで、いよいよ自分で事業を始めるということで、出雲へお帰りになった。

小松 そうです。

梶原 それが昭和48年ですか。

小松 47年の暮れに帰って、翌年の2月まで準備にあて、2月10日にスタートしました。当時まだ建国記念日というのは決まってい wasn't でしたが、戦前の紀元節を2月10日と思い違いして、それに合わせようと思い、その日に創業しました。

梶原 2月11日ですね、建国記念日は。1日早かったわけですね。

小松 ええ。それと、当時は失業支度金といって、失業して再度就職したり、自分で事業を始めたりすると支度金がもらえたんです。その待機期間というのがあって、その間に事業を始めるとお金がもらえないわけです。そういうこともあって、47年12月の初めに大阪から帰り、翌年2月10日に創業と決めたのです。それまでに、実家の納屋、農業用の物置ですが、そこを改造して作業場を作りました。自分たちでベニヤ板やアルミサッシを買ってきましてね。創業までの間をそういう準備にあてたんです。

梶原 まさにご生家の納屋が創業の地になったわけですね。その時の社名は、小松電機産業ですか。

小松 いえ、小松産業という名前を付けました。マーケットが見えないため、何をやっていいのかよくわからないので、「産業」と付けておけば何でも

なるんじゃないかと思ひましてね。ポンプの仕事から始めて、次第に電気の仕事が増えていった1年後に、真ん中に「電機」の文字を入れて小松電機産業とし、法人化したのです。

梶原 それが冒頭でお話になった、弟さんと2人での、10万円の元手とポンコツ車1台からの創業ということになるわけですね。それで、順調にいったわけですね。

小松 順調というか、お金を借りて始めてませんので、現金収入を得て、次の仕事のための部品を買ったり、経費を払ったり、残りを何とか小遣いにあてたりというような感じでしたね。

シートシャッター「門番」のマーケットを創造

梶原 小松さんのことを書いた本に「神話の里・出雲の国が生んだ革新的な起業家」とありますが、その所以をこれからおうかがいします。小松産業を創業された昭和48年は第1次石油ショックが起き、大変な年でしたよね。

小松 何かを持っている人にとっては大変だった。しかし、何も持たない人間にとっては逆にチャンスだったわけです。どういうことかと言いますと、オイルショックは秋からでしたが、その頃にはある程度仕入先もできていたし、いろいろなことも少しずつわかりかけて、何とか食えるようになっていました。それで、私が元居た大阪から材料を仕入れて帰り、ちょっとした物を作ると、2〜3ヵ月で、その材料がものすごく値上がりするわけですよ。ですから、オイルショックがあったからこそ、10万円のお金があったという間に200〜300万円になったというわけです。

梶原 「焼け太り」という言葉がありますけど（笑）。

小松 そうですね（笑）。

梶原 しかも、転んでもただでは起きないという。

小松 プラス面のあるいい所に転んだということじゃないでしょうか。石油を原材料とする樹脂系のもの、たとえば農業用ポンプに使うサニーホースや、樹脂被覆電線などがものすごく値上がりした。そういうものを大阪の仕入れルートで買って、田舎へ持って帰ると、いい値段で売れたんです。しばらく置いておくと、また上がったりして。

梶原 その後、昭和60年に高速シートシャッター「門番」を開発されて、大ヒットしたということですが、配電盤からシートシャッターに転じられた動機は何だったんですか。

小松 プロセスを整理しますと、最初はポンプの修理ですね。修理というのは現

金収入で、お客さんができる。できたお客さんに、今度は仕入れた新品のポンプを持って行って売る。そうすると、商いの金額も増える。次は、ポンプを動かすための制御装置を作った。それには技術料等、非常に高い付加価値がつく。制御盤は鉄のケースに入っているのですが、次の段階で、そのケースを製作しました。しかし、ポンプの制御盤だけだと田舎にはあまりマーケットがないので、ビル用の配分電盤の分野に進出したんです。そうするうちに、昭和60年に建設不況に見舞われました。まずゼネコンがあって、次に電気工事会社、その下に配電盤メーカーという構造になっていますから、建設不況になると、配電盤は半値八掛けという世界に入ってくる。そうすると、将来の展望の開けない厳しい状況に陥るわけです。そこが一つの転機になりました。建設不況の5年前の昭和55年に、私がかつて勤めていた佐藤造機の後裔である三菱農機からシートシャッターの開発を依頼されていました。山陰では、冬は北西からの季節風が吹くので、工場で働く人たちが寒いんです。5年間で30台を生産して、三菱農機や関連の会社に売りながら改善を重ねていたのですが、その不況を契機に、商品として展開できるシートシャッターを開発して、発表したんです。

梶原 シャッターというのは普通は金属製で、いわゆるよろい戸ですよ。それをシートで作られた……。

小松 これはどういうことかと言いますと、機能を分解して考えたわけです。シャッターやドアというものには、まず防犯という機能がありますね。次は、埃が入らない、風が入らない、虫が入らないといったいろいろな機能があると思うのです。そこで、防犯だけは鉄のシャッターやドアに任せて、他の機能はシートでやらせようと機能分解したわけです。たとえば、窓にも雨戸があって、その内側にガラス戸があって、夜は雨戸を閉め、昼は開けて、ガラス戸あるいはカーテンというような機能分解になっているわけですね。ところが、建物の出入り口を機能分解したものがなかった。たまたま、そういう需要が、寒いのが故にあったということです。それまでは、人が荷物を運んでいましたが、次第にフォークリフトが多く使われるようになってきた。春から夏にかけてはドアを開けっ放しで出入りしてもかまいませんが、冬場は工場内の作業員から「寒い」と苦情を言われる。かといって、いちいちフォークリフトから降りてドアの開け閉めをするのは面倒くさい。そこで、ビニールのれんがつけられるようになりました。ところが、擦れて傷がつき、そこに油污れが付着して、前が見えない状態になってしまう。それで、反対側に人がいたのに、フォークリフトが突っ込んで大きな労働災害が起きてしまった。そのことをきっかけに、ビニールのれんに代わるものはないかという依頼を受けて、シートシャッターの開発に

着手したわけです。アイデアは三菱農機さんからいただいたんです。

梶原 シートの材質は何ですか。

小松 ターポリンといいまして、糸を格子状に3～5mm間隔に編み、その両側から透明なビニールを貼り付け、表面にフッ素樹脂コーティングをした素材です。

梶原 それでシートシャッターですか。

小松 このシートは、九州鹿児島県の学校のプールを火山灰から護るために開発されたものです。昔、紫雲丸事件というのが四国の方で起きました。実は、そのとき松江の子供が大勢亡くなった。泳げない子供がたくさんいたからです。これが一つの契機になって、文部省が全国の小中学校にどんどんプールを作るようになった。それと、もう一つは日本の工業化とともに河川が非常に汚れていったということも背景にあったと思います。そうしてプールを作ったのはいいけれども、鹿児島には桜島があってしょっちゅう噴火する。周囲が水を使わない夜中に2晩も3晩もかけてせっかく水を貯めたプールに、噴火のたびに火山灰が入ってしまっていて使い物にならなくなってしまっているわけです。そのために、プールをシートで覆うという仕事が出た。当時、そういうシートは日本にはなかったんです。そこで、たしか当時の日本船舶振興会が資金を出して、桜島等火山地帯専用のシートを開発させた。ところが、プールに一通り取り付ければ終わりですから、その素材があまり使われない状態であったわけです。そういうシートと出会いがあったわけです。

梶原 それをまた利用したわけですね。

小松 ええ、たまたまそういう出会いがあった。ちょうどいいところへ転がったわけです。

梶原 シートシャッターには「高速」「ハイスピード」と付いてるんですが、これは上げ下げが高速という意味ですか。

小松 そうですね、普通のシャッターの約20倍、速いものは30倍となっていますが、それぐらいのスピードで上がるんです。

梶原 パッと上がるんですか。

小松 そうです。開発当初は、上がる時も下がる時も約0.7m/秒で同じスピードでした。最近のものは、上がる時は1.4m/秒、下がる時はその半分の0.7m/秒です。下がる時あまり速いと危ないものですから。

梶原 センサーか何かで自動的に上下するんですか。

小松 はい。開発当初は超音波センサーでしたが、最近は赤外線センサーを使っています。

梶原 それが「門番」という商品名で売り出され、大変なヒットとなり、ニュー

ビジネス大賞を受け、一躍、小松電機産業株式会社の名前を全国に知らしめたのですね。

小松 はい。

梶原 それだけ需要があるということは、それまでの金属製のシャッターなどを使っていたものが、「これは便利だ」ということになったのでしょうか。

小松 そうですね。私自身は、そういうマーケットが日本にそれだけあるとは、当時全然わかりませんで、やって3年目に「ひょっとしたら、そこそこ行くかもしれない」という気にはなりましたが、まさかここまでになるとは、初めは全然思いませんでした。

梶原 年間にどのくらい売れたんですか。

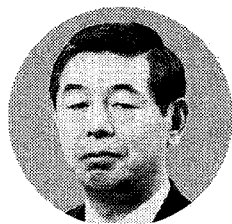
小松 昭和60年にスタートして、最初の1年間で100台、翌年が300台といった単位でしたから、会社として運営できる数や金額ではありませんでした。

梶原 それが、急速に伸びていったわけですね。

小松 日本列島を縦断する高速道路が開通したこと、ちょうどこの頃がファックスの普及期に重なったこと、それと工場の3K追放というブームに乗れたことなどが、うまく立ち上げられた理由ですね。

商品、サービスなど事業内容の新規性と実績、経済・社会的貢献度を審査の対象とするニュービジネス大賞は小松電機産業（島根県八雲村、☎0852・54・1166）が受賞し

大賞 小松電機産業



小松 昭夫社長

た。超音波センサーを組み込んだビニール製の自動開閉シャッターの開発が評価された。
小松昭夫社長（47歳）は、ヤッター以上に開閉数が多いため安全性と耐久性を持たせることだったという。今では韓国に輸出、現地生産も計画。台湾、ドイツに続いてタイにもサンプル出荷で市場を世界に求め

ニュービジネス協議会（略称・NBC、会長・関本忠弘氏）は、このほど九一年度の「ニュービジネス大賞」の受賞者二十七人を発表した。今年は島根県の小松電機産業がNBC大賞を受賞したほか東京、大阪など大都市以外の企業が八社と多数を占めたのが特徴。アントレプレナー大賞は山一カレット、ソフマップの二社で、いずれもリサイクル事業で表彰された。NBCでは「各地域のNBC協議会のネットワークが確立、活動が活発化したこと。環境問題への関心が高いことの反映」と意義つけており、今後地域で地道に活動する各NBC企業との交流を積極的に展開していく方針だ。ここで主な受賞者を紹介す

NB大賞受賞者の横顔

▶上◀

「盛大な表彰式でビックリしました」と喜びを率直に語る。「NBCには未加入で知らなかったが、これを機会に加入することにした」と言う。開発した商品の名称は「門番」。開発時の最大の苦勞は「鉄のシ

地方企業

廃棄

（日刊工業新聞 H3.10.30）

梶原 「門番」は相当大きいですね。

小松 当初は、幅5m以下でしたが、今は幅10m、高さは大体4mくらいです。

梶原 ということは、これは簡単に運んで流通させるというわけにはいきませんね。

小松 まったくおっしゃる通り、そこが一番のネックになるんですよ。とくに私どもは島根県、山陰ですが、需要があるのは太平洋ベルト地帯で、なかでも広島や東京周辺が一番多いんです。始めて間もなくの頃は、大きい長尺物も運送業者さんが結構喜んで運んでくれたんですよ。ところが、トラック業界も自動仕分け装置を導入してだんだん小さな荷物を運ぶ、クロネコヤマトさんのような業者が増えてきて、それにともなってトラックの方もアルミケースが付くようになってきて、大きい物を運ぶのを嫌がるようになってきました。4mまでは路線便に載るけれども、それ以上になるとチャーター便で自社で運ばなければビジネスはできない、ということになってきたんですね。その辺が一番、次の展開へのネックになったんです。

梶原 その流通コストを、どんなやり方で下げたんですか。

小松 そこがニュービジネス大賞をもらった理由の一つにもなっているのですが、その当時は「ジャストインタイム」という言葉が流行語でした。

梶原 カンバン方式ですね。

小松 ええ。それをそうではなく、お客様から「希望納期」を聞き、そして私どもの方から「確定納期」を逆に連絡するようにしました。サイズによっても違いますが、4tのロングボディに14~15台積める。そこで、ある一つの地域で14~15台になるようにして生産していく。お客さんに少し待ってもらったり、逆にちょっと早く送ったりしましてね。運送ということを主眼において生産計画を立て、お客さんにお願いして、納期をその生産計画に合わせていただくわけです。

梶原 つまり、ユーザーにはちょっと我慢していただくということになりますね。

小松 そうですね。

梶原 しかし、コスト的にはその方がお得になりますよ、というわけですね。

小松 そうです。それは、シートシャッターという分野、いわゆるマーケットを私が創造したからこそできたのであって、他のどこかがやっていたら、「希望の日にきちんと届けてくれよ」と言われて、どうにもならなかったでしょうね。その後、ライバルメーカーも出てきましたが、マーケットを創造したことによって、こういう納期の決め方が業界のルールになってしまったわけです。

梶原 大ヒットした「門番」ですが、順風満帆というわけにはいかなかったでしょうね。中小企業故に流されてしまいそうになったこともあったのでは……。

小松 それは何回もありますね。最初は、カタログをコピーされて、全国にばらまかれるということが起きました。その会社は、当社から「門番」を仕入れて売りたいと頼みに来られて、私どもも了解した。まさか、カタログをコピーされ、当社の名前は消し、自分の会社の名前を入れて配られるなんて、考えもしなかったですからね。そこは有名な会社でしたから、うちの方がコピー商品扱いされてしまうんです。「門番」というブランドも同じ、カタログのデザインも一緒に、社名だけ違うものですからね。これが一番目の難関でした。

梶原 どう対応されましたか。

小松 すぐ抗議をして、カタログを配布しないように言いました。ところが、全国2000社にダイレクトメールを打たれていたもので、いくら言っても効果がないわけです。ちょうどその頃、シャッターメーカーの中で業界、2の文化シャッターさんから、ぜひ業務提携したいという話がございました。業務提携の内容はO E M契約すなわち相手先ブランド供給という方法でした。そうすると、お客様は「門番」というブランドではなく、文化シャッターの製品である「エアキーパー」というブランドで買われるわけです。私どもは、お客様に対しても、文化シャッターの代理店に対しても、どこにも顔が出てこない。ですから、末端では私どもの商品と競争状態になってしまうわけです。文化シャッターさんの方が販売力があるということになると、極端な場合には下請けみたいになってしまうおそれもあるわけです。リスクはありましたが、先ほど言ったような事情がありましたので、やむを得ず業務提携することにしたわけです。ただし、3つ条件を出しました。「開発費を折半でもってほしい」。それから、「台数契約」。文化シャッターさんは全国に販売網をお持ちですから、どかっと注文を取られて、私どもに製造依頼があった場合、態勢が整っていないと納めることができませんから、それが原因で自分のところで作るとか、あるいはよそに作らせるとかされたら、うちは動きが取れなくなってしまうから、「台数契約」を条件にしました。

梶原 なるほど。

小松 3番目はメディアです。東京と島根の両方で、一般紙・業界紙に、小松電機産業と文化シャッターはシートシャッターで業務提携するということを記者会見で発表してもらおうと、この3つの条件を出しました。

梶原 なるほど。

小松 研究開発費の負担と台数契約については、まだマーケットができていなかったものですからだめだと言われました。そのかわり、大量に注文がきても、それを口実に自分のところで作ったりはしないという確約を取りつけ

ました。そして、3番目の条件だけはのんでもらいました。新聞にも派手に載りまして、そのコピーを代理店に持って歩かせ、「門番」はまちがいでなく小松電機産業が開発したものだということをPRして、それでブランドを取り返せました。しかし、このことが後々の「門番」の販売網づくりに様々な影を落としました。

梶原 大消費地である東京や大阪からかなり離れた山陰、出雲の松江という、このハンディをお感じになりませんでしたか。

小松 それはもう、まず物流でものすごく感じました。

梶原 じゃ、「東京へ出てやろう」というのはなかったんですか。

小松 先ほど申し上げたように、私は農家の長男ということもあって、両親、祖母まで含めて一家の生活を私が全て支えておりましたから。それに、私は小さい頃から決してものごとから逃げない、置かれた状況の中でどうやっていくか、こういう考え方でずっと来ているものですから。もともと、商売をやろうということで会社を辞めたわけでもないわけですし。

「社業を通じて社会に喜びの輪を広げよう」

梶原 「門番」は海外にもかなり出たそうですね。

小松 ええ。

梶原 「門番」は現在でも小松電機産業の大きな柱になっていると言えるわけですね。そこで、ここまで成長できた原動力は何だと思われますか。

小松 やはり、運がよかったということに尽きるでしょうか。よく「神の見えざる手に導かれて」と言われますね。商品を開発してお客様に買っていただき、お礼を言いに行きます。いろいろなトラブルも起きます。それに対処する。いろいろな難問も降りかかります。そういったものを一つ一つ解決していく。カタログコピー事件、バブルの発生と崩壊、新規参入の続出、コピー商品の登場など次々と問題が起きましたが、それらを全部真正面からとらえて対処してきたからこそ、今日があると思うのです。だから、何が原動力かと言われると、おそらく次々に起きた問題が、ここまで来られた要因として大きいんじゃないかと思いますね。

梶原 （笑）しかし、新商品は人間が考えて開発していくわけですから、やはりそういう土壌あるいは企業文化、そういうものが育まれていたからだと思いますが。

小松 はい、それは今振り返ってみてもまったくその通りだと思いますね。私が企業を起こす前に、全国展開をしていた農業機械メーカーの研究所に入っ

たことで、全国的視野で見られるようになっていたことが一番大きいと思いますね。それから、日本にはいろいろな機械、電気製品などがありますが、ほとんどが欧米から入ってきたものです。ところが、稲作用農業機械は日本のオリジナリティですね。そういう中で想像力や構想力が育っていったのではないのでしょうか。20歳ぐらいのときに、創造工学研究所の中山正和先生のセミナーを受けたりしましたが、そういう土壌の中で若い時を過ごしたことが、その後の私の商品開発、ビジネス展開、そしてこれからの構想などに一番大きな影響を及ぼしていると思いますね。

梶原 それは、若い社員にも当然、受け継がれていかなければならないことですね。

小松 夢とロマンと使命観の生まれる場と仕組創造のための研究、この辺がこれから一番重要なんじゃないかと思います。それはやはり構想力、オリジナリティ、あるいは自立、そういったことに非常に密接に関係あるんですね。そういう文化が生まれる土壌を地域、日本、そして世界にどう構築するか、ということではないのでしょうか。

梶原 ということは、企業というもののあり方を問い直すことにもなってきますね。

小松 とくにこれからの日本は、欧米に追いつき、追い越せというやり方はもう難しくなっているわけですから、世界が希望の持てる21世紀になるようなきちとした理論体系を確立・実証することが平和憲法を持つ日本が最優先に取り組まなければならないテーマだと思いますね。

企業の目的、社是、経営理念、それを個人ベースまで落としていって、いわゆる人類共通の目的につなげることで、新しい道が拓けると思っています。目的というのは、「目的」と書いてある。目的というのはたくさんあったら的になりませんので、結局それをずっと追求していくと、人類は何のために地球に存在してきたかということを考えて仮説を立てる必要があるわけです。そうすると行き着く先は、地球上のあらゆる人が天寿が全うでき、楽しく愉快に人生を過ごすことができる、それも持続可能にです。この辺が環境問題ともリンクしてくるわけですが、そういう地球の創造ということ、これが究極の目的なんですね。それを具現化する手段としての目標設定が、個人・企業も含め国家の目指すところです。ここに焦点を当てなかったら、共生ということもありえないわけです。

梶原 今、社是という言葉が出ましたが、「社業を通じて社会に喜びの輪を広げよう」というのが小松電機産業の社是だそうで、これが大きく会社の壁に掲げてあるそうですが、意味するところは？

小松 初期は家族と自分が生きるために、そして社員が入ってきたら2度と佐藤

造機のようにならないためにはどうすればよいかということで、そのためには貯金してということで、お金を追いかけてきたわけです。そして、まあ半年や1年はどうこうあってもその貯金で食いつなぐことができると、こういう会社づくりをやったわけです。ところが、途中から、先輩ライバル会社と真向からぶつかるようになりまして、今度はそこに追いつき、追い越せということでやっていました。

あるとき、会社の存立目的、何のために会社をやっているのかということ、ある先生から指摘され、はたと困りまして。そして、その先生から「社是が必要だ」と教わったのです。しかし、私はエンジニアですから、社是と言われても何のことかわからない。先生は「会社を経営する目的です」と言われる。そこで、「何かいいのがあったら教えてもらえませんか」と言ったら、「いや、それは教えられるものではなく、自分で考えるものだ」と言われましてね。いろいろ考えたのですが、勤めていた会社が倒産した26歳の時にたまたま辞世の句を作っておりまして……。

梶原 辞世の句を26歳で（笑）。

小松 （笑）そういうこともありまして。それがヒントになりまして、会社を創立して8年目の1981年に、人に喜んでもらうことが会社の目的だということで、「社業を通じて社会に喜びの輪を広げよう」を社是としました。その時に、世襲制を取らないことを発表したのです。そうは言っても、ついグラグラしがちなものですから、国道端に縦1.5m、横8mほどの看板を立てて、広く公表しました。そうしておけば、いろんな人が毎日見て通りますので、看板に偽りがあっちゃいけないということで、背水の陣をしいたわけです。

梶原 先ほど「会社というのは社会を変革するものでなくてはならない」と言われたのも、そういうところから来ているわけですね。

小松 ええ。

梶原 普通は、会社は利潤追求ですよ。しかし、そこからもっと目を広げて、やはり会社というのは地域社会の一員であるという考え方によるものですか。

小松 私は会社という概念を、「家業」いわゆる生業ですね、「企業」、「事業」と3つに分けて考えています。「企業」というのは企てる業で、企は「人を止める」と書いてあります。でも、人というのは移ろいやすい心があって、足もついておりますので、なかなか止まってはくれない。それを企てることによって、こちらの方を向いてもらい、商いをする。ところが、移ろいやすいわけですから、すぐに向こうに行ってしまう。そこで、また企てる。そして最後にはヘトヘトになる、ということは初めから決まっているんじ

やないかと（笑）

衣食住が足りない社会、あるいは生命の危険を顕在的に感じているという
ような時には、それが解決するまでは一つのパターンで人は動くわけです。
ところが、衣食住が足りてしまうと、よく価値観の多様化ということが言
われますが、非常に移ろいやすくなってしまうということですね。そうな
ると、どうしてもお客に迎合するようになって、ますます企て続ける。そ
して、最終的には「忙しい、忙しい」となる。「りっしんべん」に「亡」
と書いて「忙しい」ですけど、一番大切なものを、「亡」の下に「心」で
「忘れ」て、最後にはちょっとボケてお「亡」くなりになると（笑）、こ
ういふことになると思うのです。そういう社会状況になった時、人心をどの
ようにもっていくかということのための活動、これを私は「事業」と位置
づけているんです。

企業活動というのは、一般的に船に見立てられます。立派で、堅牢な船体^{けんろう}
を造り、船内にいい設備を整え、船員みんなが楽しくやれて、そうして船
団を引き連れて大海原を航海するということではないかと思うのです。

「事業」というのはそういうことではなくて、海を作ることだと。海があ
って船は初めて活動できるわけですね。嵐が来るとなれば、船は港で待機
する。しばらくすると自然界は凪になるので、それからまた出て行けばい
いわけです。「企業」というのは人の海の中に浮かんでいるものです。だ
から、人心がどんどん荒れてくると、企業もそれに合わせざるを得なくな
ってしまう。そうすると、気がついたときには持続不可能な状態になっ
ているわけです。自然界と違って、人の心というのは、人間が意志を持って
荒れを静めないと崩壊してしまう。これは、歴史を見れば明らかではない
かと思うわけです

「中庸」

梶原 最近、大企業を中心にいろいろ取り沙汰されるような事件が起きていま
すが、企業経営者の倫理といいますか、起業家、事業家、あるいは経営者
というのはどうあるべきだとお考えですか。

小松 一言でいうと「中庸」に尽きると思います。日本実業出版社から出ている
『経営者会報』の97年11月号に、頼まれて巻頭言を書きました。その中
に書いたことですが、結局「生かされながら生きる」ことが、私の考える
「中庸」であると。

自然環境と、たとえそれが不合理なものであったとしても、現在も含めた

歴史の中に築かれた社会環境に生かされ、そして人類究極の目的に向かって社会のあり方を変えるべく協調と戦いを繰り返しながら、社会をあるべき姿に変えていく。これが人間本来の生き方ではないかと。ただし、生かされながら生きるということになると、明確な目的と目標がないところには「生きる」という主体性が出てきません。その辺がポイントではないかと思います。

梶原 小松さんの考える「目標」とはどういうものですか。

小松 人間というのは大体陸の上で生活しています。そうした時に、その土地つまり自然界の特性と、それが与える人間への影響を真摯に研究する。これは地政学的な研究ということになります。それともう一つは、突然「今」があるわけではなく、歴史の集積の上に「今」があるわけです。これもよく調べてみる。こうした地政学的、歴史的な研究を深めれば、人類究極の目的を具現化するための「目標」すなわちその地域の役割が自ずと定まってくるはずで。そのように考えれば、「目的」は一つであっても、「目標」はその土地、人によって無数に存在するはずで。

梶原 そういう観点から、小松さんは社会での活動、企業の外へ向けての活動というのをいろいろおやりになっているわけですね。例の全国的にも問題になった中海干拓事業、これに対する独自の構想も、そういう観点あるいは信念に基くものですか。

小松 ええ、もちろんそれから生まれてきたものです。

梶原 あれは国家事業ですね。これに対して、民間の一企業経営者として発言されているわけですが……。

小松 日本は一応、主権在民の民主主義国家ということになっていますから、国家の問題は国民一人一人の問題なのであって、それを国と個人という具合に分けて考える方が、非論理的だと私は思ってるんです。国家事業は一人一人の国民の事業であり、地域の人一人一人の事業でもあるわけです。だから、対立する概念ではなく、国の問題は我々国民の問題を内包しているということではないでしょうか。昨今の日本のように、G N P世界第2位ともなれば、アジア、世界の中の役割という視点も必要不可欠ではないでしょうか。

梶原 中海干拓というのは昭和20年代に閣議決定されてスタートしたということですが、この間に農業事情が変わり、農地を造成してもしようがないという状況になってきて、今中断されているわけですが、これに対する小松さんの対案とは、具体的にどういうものなのですか。

小松 これは、森清先生にお書きいただいて、ダイヤモンド社から出版されました『母なる中海』という本に詳しく載っております。また、ビデオも作っ

ております。一言でいいますと、中断しているという現状、そして今までの経過、それを全て一回受け入れる。そして、それを現在の社会情勢、あるいは将来を見通した中で、当初の計画通りやるよりも、もっと大きな効果が期待でき、今いる人たちが元気が出てくるようなことをする。ただし、世の中が非常に不安定になってきていますので、いつどういうことが起きるかわからない。仮に私の言っている方法でやったとしても、途中で中断ということも起こりうる。その時に「副作用がない」ということが大事です。

それからもう一点は、こういう事業をやることが日本の安全保障につながる。あるいは世界の大きな問題を解決するための一つのモデルになる。たとえば韓国、ヨーロッパ、またアメリカ等にとっても、「これは一つの参考になる」と受け止められるような形にもっていくことが、G N P 世界第2位という国の果たすべき役割ではないかと思うわけです。

梶原 「そこで21世紀型の産業を起こす」と言っておられますが、具体的には干拓をしないということですか。

小松 しないというわけではありません。ひっくり返したんですよ。実は、中海岸本庄工区というのは1400㍍あって、それを囲む堤防も、ポンプ場もすでに完成していて、あとはポンプを動かして水を外に出せばすぐ干陸できるというところまでできてるんですね。そのできてるものは100%そのまま使うというのが私の提案ですが、それはともかく、その水を外に出すために水路が設けられている。その水路の部分の逆を埋め立てて、これから干陸するという部分はそのまま水面として残すんですよ。逆転の発想なんです。そういう具合にしますと、さっき私が言ったこと全てが論理的にもつながる。

しかし、そのためにはいわゆる省水型、少ない水で農業をやり、文化的な生活も可能となるような、そういうキーテクノロジーを開発する必要がある。たまたま私は、会社スタート時からポンプを扱い、以来ずっと水に関わり続けてきました。そういう中で、バイオテクノロジーを利用する水処理技術の専門家の岸博先生との出会いがあって、そのキーテクノロジーを事業化するめどがついたものですから、それで「じゃあやろう」ということで、第一歩を踏み出したわけです。

梶原 そのために研究所などを設立されたりなさっているわけですね。そうすると、小松さんが現在やってらっしゃることは、小松電機産業という会社の経営の部分よりも、むしろその外部の社会に向けての活動の方がウェイトが高くなっているわけですね。

小松 そうですねえ、「V S O P」という言葉がありますね。サントリーのお酒

にもありますけど。若い時はV「バラエティ」に「バイタリティ」。いろんなことを一生懸命やる。そすしますと一つくらいものになるものが出てくる。それがS「スペシャリティ」。ところが、社会はなかなか自分の思うようにはいかない。いろいろありますので、そこで自分なりの人生観というものができ上がる。そうするとO「オリジナリティ」、余人をもって代えがたいというようなものができ上がってくるのです。そのうちに、身内の人間や友達などが亡くなるということが起きてきて、死というものを自分の中で現実の問題として考えられるようになり、弁証法的な考え方が身についてくると、P「パーソナリティ」ができてくる。人はそういうプロセスを経て成長するものだと思うんですよ。そうした時に、創業者というのはどうしても自分の会社に非常にこだわりますので、なかなか後継者の養成というのは難しいんですね。だから、自分の会社よりも他のことの方に目が向きますと、結果として後継者が育ちやすい環境が生まれるんじゃないかなと（笑）。

梶原 社長は「元気で留守がいい」（笑）。

小松 大体、昔から一番良い子供の教育は親が死ぬことだと言いますから（笑）。

梶原 ちょっと会社の話に戻りますが、これからの事業展開戦略というのは、どうお考えですか。もっと多角化しようとか、海外展開をもっと広げようとか、そういうお考えはありますか。

小松 「門番」はニュービジネス大賞をいただきましたが、その受賞披露パーティを島根県で開きました折に、ご縁があった韓国企業の「東友」、現在の「東宇技研」に技術の無償供与をすると発表いたしました。これは、その当時の宮沢喜一首相が韓国に行かれた時、「最近、日本はちっとも技術を教えてくれない。帰られたら、もっと韓国の人たちに技術を教えてくれるように、あなたから言ってください」と韓国側から言われたという記事を読んでいたものですから。それと若い時、韓国でいろいろなことを経験しておりまして。やはり島根県というのは韓国と……。

梶原 近いですね。

小松 歴史的にもいろいろなつながりがあります。そういうことで、ちょうどいい機会だと思って、「門番」の技術が無償供与したわけです。それで、韓国でも6割以上のシェアになっております。

梶原 さらに海外展開することを考えておられますか。

小松 ええ。基本的には、全世界に技術の無償供与ということでやっていこうと考えております。

梶原 会社の合い言葉は「おもしろ、おかしく、たのしく、ゆかいに」だそうですが、これはどういうことですか。

小松 人類は何のために生まれてきたのかと考えていきますと、結局、「おもしろ、おかしく、たのしく、ゆかいに」生きられる地球を創るためじゃないかと、それも持続的に。こう考えると、大体世の中うまく行くようになってるんじゃないかなと（笑）。

梶原 なるほど（笑）。

小松 何を目的にし、それを具現化するための手段としての目標に何を設定すれば持続的にそのようになれるかということを研究した結果得た言葉です。論語の中に、物事を勉強して「知ってやる人」は「好きでやる人」にはかなわない、「好きでやる人」はこれを「楽しんでやる人」にはかなわないという言葉があります。もう一つは、松下幸之助さんの『経済百話』というのがあるんですが、その中に「商売のコツ、覚えた価値は百万両」という言葉があるんですね。

梶原 「商売のコツ、覚えた価値は百万両（笑）。

小松 「その心は、天馬、空を行くがごとし、ゆかいなり」というのがあるんです。じゃあ「ゆかい」とはどういうことかを追求していくと、先ほど言いましたように、人類共通の目的を具現化するために、自分の持っている一番の優位性、どこをホームグラウンド、あるいはバックグラウンドにしているかを考えて目標設定する。その目標が正しければ、何でこんなにうまくいくんだろうと思うくらいに、必要な時に必要な人にも出会えて、どんどん目標に近づいていける。これが「ゆかい」で、私これを実感、体得しているものですから。おそらく、このことは人間の脳の構造ともリンクしているのではないかなと思っているんです。

梶原 「おもしろ、おかしく、たのしく、ゆかいに」ということで、ご発展を祈っております。どうもありがとうございました。

小松 どうもありがとうございました。

飢餓と殺りくがなく楽しく愉快に持続的に生きられる世界を

—世紀末の世界とアジア・日本の行方を占う—

人類史的課題に挑戦する
「太陽の國出雲——地球ユートピアモデル事業」
相互信頼に基づく日韓友好関係へ



冷戦崩壊後の混とん状況

21世紀を目前にして、現状の世界について思うことは。

小松 今年一九九九年は、古くから一つの節目と言われてきた。特に七月には何か大きな出来事があるのではないかと、とも言われ、人々の心の中に、ある種の心理的不安をもたらしている。二〇〇〇年のコンピュータ問題など、経済も大きな曲がり角を迎え、コンボ紛争、イラク問題、北朝鮮核疑惑問題などの行方も不透明で、いろんな意味で無気味に思う。

この一年のあいだ、エリツィン大統領の訪日に続いて小渕首相の訪韓、訪米、訪中、そしてクリントン大統領の訪日や訪中、金大中大統領の訪日、訪中、江沢民主席の訪口、訪日など、頻繁に首脳外交が繰り返

小松昭夫

小松電機産業社長

1944年島根県生まれ。島根県立松江工業高校卒。73年、小松産業設立。81年に小松電機産業(株)とする。85年、シートシャッター「門番」を開発・発表する。94年、NHS(人間・自然・科学)研究所設立。ベンチャービジネスの旗手として中小企業研究センター賞、ニュービジネス大賞、科学技術庁注目発明選定証、地域活性化貢献企業賞など数々の賞を受ける。資本金1億円。従業員85人。年商42億円。

げられている。これだけ集中的に外交展開が行われるのは戦後初めてのことだ。注目すべきことだ。今年は非常に重要な年になりそうだとこの予感がする。

渡辺 世紀末という言葉は、リアリティを感じさせる。冷戦崩壊後、誰もが新しい時代が来ると思った。フランス・フクヤマは「歴史は終わった」と言った。ヘーゲルの言う弁証法的な発展史の時代は終わり、「退屈であるが、平和な時代がやってくる。対立の構図はもうない」と言った。ある友人は、カント流の「永久平和の時代」がいにやってきたと言う。

しかし、私はそうした見方はあたっていないと思う。

確かに冷戦時代には非常に厳しい対立があったが、二つの大国のはざまにあって、人々はむしろ健康でいられた。それが崩れると、ありとあ

らゆる人種、宗教、カルト集団など、人間の最も原始的な集団へと無限に分散し続けている。その中で我々の理解を超える紛争が続出している。ユーゴスラビアのコンボ紛争は、そのことをシンボリックに示すものだ。

我々は、そうした冷戦崩壊後のわけの分からない状況の中におかれている。そういう不安感があるものだから、世紀末という言葉が妙な現実感で響いてくる。小松社長が述べた二〇〇〇年問題は単なるテクニカルなテーマでなく、何かゾツとしたことが起きるような気がしてならない。

小松 二六歳の時、会社が倒産し、困窮生活をしてきた。家族を支え、自分も楽しく生きるためにはどうしたら良いか、悩み苦しんだ。紆余曲折を経た後、第一次オイルショックの時、兄弟二人で事業を立ち上げたのですが、その頃といまでは社会と経営環境ががらりと変わった。

国家経営の面というと、飢餓と殺りくのない社会をつくるための覇道の時代から、楽しく愉快に持続的に生きられる社会を創造するための王道の時代への転換をうまくやらないと文明そのものが崩壊する。そのためには現状の問題点を根源的・長期



世紀末——世界は大いに揺れている。戦後冷戦体制の終えんは、必ずしも平和と安定をもたらすものではなかった。民族・宗教・地域紛争の頻発、発展途上国の貧困と飢餓の惨状など、21世紀を迎え人類が解決すべき課題は多い。情報・通信革命と経済のグローバル化で「地球村」が形成されつつあるが、国境を越えた「共生社会」にはほど遠い。果たして、世界はどこに向かい、アジア・日本はどう進むべきか、既成の企業概念を乗り越え、「地球ユートピアモデル事業」に取り組む小松電機産業・小松昭夫社長とアジア経済の碩学である東京工業大学・渡辺利夫教授に語り合っていた。だいた。

(司会は本誌主幹・姜 英之)

的・多面的に考えるということだ。具体的には、環境問題は地球誕生・生命誕生から、社会問題は人類の特性・人間の定義から考えれば道筋を見出すヒントが見えてくる。そういう考え方の中から、私は現在の事業において社是として「社業を通じて社会に喜びの輪を広げよう」、そして経営理念として「おもしろく、おもしろく、たのしく、ゆかいに」を掲げ、いま「出雲から日本を変える」という発想で「太陽の国出雲——地球ユートピアモデル事業」構想に取り組んでいる。

たとえばその中の一つに「ゼロエミッション・小規模理想郷(中海・穴道湖圏域の新構想)」があります。これは地元の島根県が干陸を予定している中海・本庄工区を情報微生物工学などの先端技術を駆使して、爆発的生命連鎖のマリンランドとして生かし、周辺にはエネルギー農業田園都市を建設するなど、環境、食糧、エネルギーなど、人類が直面する危機をいかにして乗り切るかを模索する実験場なんです。天寿が全うでき、人々が楽しく愉快に持続的に生きられる社会を造るという目的に向けての第一歩と思っている。

渡辺 人類が抱え込む課題は山積しているが、特にその一つは信じられない位、人口が増えてしまったことだ。ある先輩学者の話では、中国の生態的条件が許容できる人口は、多くても六〇〇〇〇七〇〇〇万人だそうです。現実には一二億を超えている。五〇年前の建国時には五億にすぎなかった。他の発展途上国も同様の状況だ。その結果、環境破壊、人口爆発問題は、かなり以前から経済学でも取り上げられてきたが、今度だけは、これを本当に解決しないと地球はダメになってしまうという気が強い。

危険な国家主義へのリアクション

——日本はどこまで国際化したか。

小松 島根は古来より朝鮮半島とながりが深く、シルクロードの上陸地でもありました。ある人が、日本人は渡来人を受け入れ、民族の和合が進み、世界の中で最も遺伝子レベルで混血が進んだ民族だと言った。その過程で、文化・経済交流が進み、一つの文明圏をつくってきたという背景があると思う。

私は、地政学・歴史的にみて、世紀末の混沌としたいま、シルクロード文化の執着点・発信源でもあり、醸成された独特の日本文化が人類の未来のために、何か大きな役割を果

渡辺利夫 東京工業大学教授

1939年、山梨県甲府市生まれ。慶応義塾大学卒業、同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授を経て87年より東京工業大学教授(開発経済学、現代アジア経済論)。アジア政経学会理事長(前)。著書に「成長のアジア停滞のアジア」(東洋経済新報社、吉野作造賞)、「開発経済学—経済学と現代アジア」(日本評論社、大平正芳記念賞)、「西太平洋の時代—アジア新産業国家の政治経済学」(文芸春秋、アジア太平洋賞・大賞)など多数。

たすべきときがやってきたのではないかと思うんです。

渡辺 まったく同感ですね。日本は海に囲まれた島国で、大和民族が同一種族を維持しつづけ世界性がないと思われていますが、それはウソで、我々がそう教え込まれたか、歴史学の未発展のせいにすぎない。遺跡が次々と発掘され、歴史の読みかえ作業が随分進んでいる。それから、日本が大変古来より世界性をもっていたことが実証されている。

最近の歴史学会では、新しい見解が現れている。ある歴史学者は、江戸時代の山間僻地にあったような所が非常に世界性をもっていたことを実証している。例えば、今まで辺境とみなされていた能登半島が日本海の交易の機能を担っていたということです。日本が島国で、海にロックされた絶海の孤島であるといったイメージは間違いです。こうした歴史の実証の積み重ねで、日本の文化がもとも持っていた世界性がついに明らかにされ始めた。

ところが、現代は逆に自国以外に関心が低い。極めて非国際的だ。明治は非常に国際的時代だった、開国維新のリーダーたちは外国に行った



こともないのに外国のことを考えない国が減びるという意識をもっていた。それにいまは、公の概念が薄れて、私に埋没している。国際から非国際的、公から私への潮流をいかに食い止めるかは文明的課題でもある。

すでに日本は周りからは、経済大国、軍事大国と見られ、国際化しているのだ。非国際的思考と気分だけ私といった方向に向かうと、いざ何か起きた時、一気に「国家主義」にスウィングしてしまわないか心配だ。

小松 それと関連して言えば、トヨタの社長が言っていたことが思い出される。トヨタがここまで発展した理由として、日本が海に閉ざされて

いるのではなく、世界の自動車需要に応える、いわば海に向かって開かれていたことだと答えたんです。本当にそうだと思うんです。日本のことだけを考えて生きられる時代ではなく、いまやアジア、世界を視野に入れ、人類の抱えている課題に立ち向かっていかなければならないと思います。

私は渡辺先生のおっしゃるような国家主義へのリアクション、いわば昔のような軍国主義の道に行くような危険は絶対に犯してはならないと思います。もし、そうなれば先にたたかれ、滅亡ですよ。そうではなくて、日本は世界の国の果たしえない役割を果たすことが重要だと思えます。そうすることで日本を生かすことができますし、それは人類のためにも必要不可欠のことだと思います。そういうロジックをきちんともってこそ、日本のアイデンティティを確立することができる。

戦後残された課題を解決せねば

——朝鮮半島との関わりについて。

小松 二〇世紀は戦争の歴史であつた。第一次と第二次大戦、戦後の朝鮮戦争ですね。この三つは、どち

らも二つのブロックに分かれて戦った戦争で、朝鮮戦争は多国間の最後の組織的戦争だった。それによって朝鮮半島の分断も固定化し、日本との関係も不安定なものになった。朝鮮半島は人類最後の総力戦があつた場所であり、また戦後は日韓紛争の島として竹島（韓国では独島と呼ぶ）があるが、この島に地球共生・縁むすびの像を建立するための議論を起こそうと提案した。この議論の中から世界平和への道筋が見えてくることを願うことです。

それと、最近話題になっている北朝鮮問題ですが、北朝鮮がいまのようにならしているのも、かつて日本による植民地支配にさかのぼる遠因というものを考えなければならぬ。また北朝鮮には、中国残留孤児と同様、多くの残留孤児がいると思われる。戦時中の朝鮮人への強制労働に対する補償の問題もある。そうした問題に対して、日本は戦後きちんと相手の個人レベルまで対応してこなかった。いまそれらの問題に対し、きちんと過去を見つめ直し、それを戦後の残された課題として、非常に重要なものとしてすみやかに議論を始め、結論を出し、実行することが何にもまして重要だ。このまま時間が経過することは大きな罪であ

る。「過去を忘れる者は、過去を繰り返す危険がある。過去を思い起こす者は、世界平和に新しい勇気を与える」。これはドイツのワイツゼッガー前大統領が、一九九九年四月に来日された折、長崎の原爆資料館で記帳された言葉です。「地球ユートピアモデル事業」は、そうした視点から一〇年の歳月を経て生まれたものです。

渡辺 いま指摘されたことは、なかなか難しい問題ですが、やはり日本人として取り組んでいかなければならない問題だと思います。ただ、北朝鮮の問題は、国交もなく、政策的に有効な論議ができていないのは残念なことです。いずれにしても日朝国交正常化のとりが開かれることが期待されます。

他方、日本と韓国の関係について言えば、ついに新しい時代がきたのかなあ、という気がする。私は七〇年代から、韓国に対し関心をもち、もう三〇年近くなります。しかし、その間、個人的なおつき合いは別として、どうしてこうもうまくいかなかったのかなあ、とずっと思ってきた。しかし、いまや、これからは日韓関係は本格的にうまくいくかも知れないと思いはじめた。三〇年のあいだ、初めての感覚です。金大中大統領の

対日友好的な姿勢は、やはり国民がそうさせるだけの力をつけてきたことの反映だろう。文化開放政策は画期的であり、日韓自由貿易協定の提案も出てきた。

ただ、日韓協力という場合、お互いに向き合った二国関係よりも、第三の対象に両国が顔を同じ方向に向けて協力しあう方がうまくいくのではないかと思っています。

マルチの中での 日韓協力関係を

小松 私もまったく同感です。両国関係を考える時、まずこれまでは国家の枠組みというものの正当性とは

何かが論じられてこなかった点を指摘したい。飢餓と殺りくのない世界をいかに効率的に造り出すか、その方法論の差異に国家の正統性の根拠が求められると思うんです。

二〇世紀は、競争とか協力、ハイテクノロジーを使った戦争の時代だった。科学技術の進歩がすごかった。大量の商品を作れるようになったが、自然との循環の面で環境破壊など、多くの弊害が出てくるようになった。そして食糧問題、エネルギー問題も出ています。「地球ユートピアモデル事業」は、まさにそうした問題解決のため、先端技術と自然との高次元での融合を目指している。

そうした国家の新しい理念の下に、日韓両国の友好と協力についても考え直す必要がある。日本と韓国の協力は、経済問題だけでは解決が難しい。また、二国だけでなく、北朝鮮、中国、ロシアも含め、それらの国々とのトータルの中で日韓両国の役割分担をしながら協力していくべきですね。その点、それら五カ国が共同して推進している「豆満江開発」は極めて注目される。それに対しては、地球全体から飢餓と殺りくをなくするため、地政学的に、またそこに住む民族の立場をふまえ、お互

いの役割を果たしていくことが重要だと言いたい。

渡辺 日韓協力は、もはや二国間だけでなく、アジア全体を見据えた上での協力関係へと発展させる時期にきているでしょうね。例えば、日韓自由貿易協定といった場合、日韓だけでそれをやれば、結果はうまくいかないと思う。韓国の輸入多辺化政策の下で、対日輸入制限がある中で自由貿易協定はとても無理です。協定そのものは良いことですが、それがうまくいかない場合、失敗のコストを誰が支払うか、というと、やはり両国だ。すると、これまで築いてきた協力関係が二〇年前にもどってしまふことになる。だから、やはり小松社長も指摘された通り、日韓だけでなく、周辺国とも一緒にやっていくことが両国の良好関係を保つ鍵だと思う。

先ほど述べた、日韓が第三の対象に向けて協力するということについて言えば、建設、道路、港湾、鉄道、橋梁などインフラのテクノロジーは韓国が高いものをもっている。また、その方が発展途上国にとって役立つものだ。しかし、まだODAの経験とノウハウが少ない。そこで韓国がそうしたテクノロジーを出し、日本が資金やノウハウを出



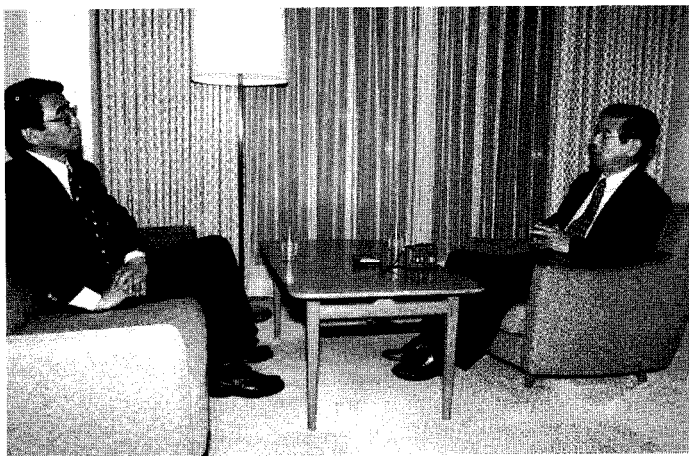
して日韓協力して、中国や北朝鮮の開発をやるということであれば、うまくいくと思う。二〇〇二年サッカー・ワールドカップは、世界に向けた日韓の共同事業だけに、これを何とか成功させてもらいたいものです。IMF体制下で経済事情が苦しいこともあって、韓国のサッカー場建設に日本が円借款すると決めたそうだが、円借款の対象としてはやや問題があっても、日韓両国の協力関係を強化する上では、とても有効だろう。いま、アジアは通貨・金融危機でこれまでの成長パターンに懐疑がもたれているが、優れた労働力と勤勉、貯蓄など、成長潜在力は依然として大きく、その将来性は明るい。日本と韓国が共同でリーダースhipを発揮して、アジア全体の経済発展につなげていくことが望ましいですね。

ローカルからグローバルへ

——「太陽の國出雲」地球ユートピアモデル事業」の具体化について。

小松 企業経営をする中でずっと考え続けてきたことは、現代は科学技術の進歩の反面、地球環境の破壊で人類の生存を脅かすようになってい

るということでした。この現実に対する危機意識がつのり、何とかいまだ人類が解決していない飢餓と殺りくのない社会をつくるにはどうすれば良いかと考えてきたんです。それをなし得た国は「楽しく愉快に持続的に生きられる社会」をつくるため、社会の枠組みを変革しなければならぬ。そのためにはパラダイムシフトが必要で、その目的の下に構想されたのが、「太陽の國出雲」



地球ユートピアモデル事業」なんです。

先にも述べたように、出雲は古来より「縁むすびの国」とされ、特に朝鮮半島とは密接な関係があった地です。出雲の歴史的・地政学的な意味に照らし、この土地の果たすべき役割、使命に気づき、出雲こそ過去から未来に向かう歴史的な時間軸に沿ってパラダイムシフトを目指した実験を行うのにふさわしいと思った。出雲発の日本の構造改革、いわばローカルからグローバルに向かうプロジェクトなんです。

その構想の具体的内容は心のインフラ整備——①人縁・感謝と戦争の歴史記念館、②心の首都（松江市市街地再開発構想）、③環境問題解決のため、ゼロエミッション・小規模理想郷（中海・穴道湖圏域の新構想）、④未来を拓く教育・研究機関です。今日の人類が抱える最も大きな問題である相互信頼関係の喪失という社会問題と環境問題を解決する糸口を見い出すためのものであり、世紀末の閉塞感を打破し、人類の新たな歴史の第一歩につなげることを目指している。

私が特に強調したいのは、小

淵首相の掲げておられる「徳のある国」をめざす上でも「心のインフラ整備」が重要ということですが。過去の戦争に際しても被害国・加害国となった背景・原因・経緯を調査・研究する中で未来志向で昇華し、関係諸国の人々との信頼関係の回復と、世界の平和と繁栄に資する、人類にとって最も貴重な知的共有財産を構築する。これは、先輩のつくった文化と資産を継承し、昔に比べればはるかに高い水準で、いまを生きる我々の義務と責任である。そのために「記念館建設を」、また、金大中大統領の訪日によって、新しい日韓関係が開かれたことを契機に、「地球共生・縁むすびの島——竹島」独島にモニメント建設を」という構想を提案しました。これをきっかけに、多くの人々の議論の輪が広がることを期待したい。

渡辺 非常にスケールの大きい、理想に燃える夢のある事業ですね。ぜひ、成功することを願っています。私も、東アジア、特に漢字文化圏の人々とは長いおつき合いがあり、ヒューマンネットワークをもっていますので、何かお役に立てればと思います。

——長時間ありがとうございました。

後 記

1998年2月初旬のある朝——東京芝のホテルの喫茶室で、小松昭夫氏を4人の有志が囲んでいました。小松氏のほかは、みな一様に疲れ果てた顔をしていました。前日からホテルに泊まり込み、延々6時間に及んで議論を重ねていたからです。今、我々はどんな危機に直面しているのか。これがテーマでした。

民族・宗教・地域・国家間の武力紛争、テロリズム、地球温暖化、オゾン層破壊、森林破壊、酸性雨、砂漠化、環境ホルモンなどの環境問題、人口爆発と食糧危機、資源・エネルギー危機、通貨・金融危機と世界恐慌、日韓・日中の歴史問題、朝鮮半島情勢、財政破綻、不良債権、貸し渋りと企業倒産、政治家・官僚の汚職の蔓延、司法の腐敗、少子・高齢化問題、地方都市と農村の荒廃、子供の凶悪犯罪等々……私がノートに書きとめた世界の危機、アジアの危機、日本の危機は100項目に及ぼうとしていました。自分たちがいかに閉塞の時代に生きているかを改めて痛感し、翌朝は絶望的な気分には陥っていました。

ひとり元気を保っていた小松氏が言いました。「ゆうべ議論した問題を解決する糸口を見出すプランをまとめよう」。みな一瞬、あっけにとられました。膨大な問題点をどう整理し、どんな対策を考え出そうというのか。一同のそんな胸中を察したのか、「大丈夫、2時間もあればまとまる」と小松氏は言いました。「私が10年かけて構想を練ってきたプロジェクトが4つある。各項目に番号をつけて、どのプロジェクトがその解決策になり得るか、割り振ってみよう」。みなは呆然としたまま、小松氏の提案にしたがって作業を始めました。すると、あらゆる危機が4つのプロジェクトにすっぽりと納まってしまったのです。本当に2時間もかかりませんでした。「じゃあ、今度は企画書にまとめる相談をしよう。まず……」言いかけた小松氏を、私はさえぎりました。「わかりました。よくわかりました。これから先は、私にやらせてください。私の役割がなくなります」。

「太陽の國出雲——地球ユートピアモデル事業——」構想を文章にまとめる作業が、こうして始まりました。

(H N S 研究所 交易場修)

最後になりましたが、本構想立案の過程で、多くの方々にご協力たまわりました。ここにお名前を記し、心より感謝申し上げます。

<順不同>

久司道夫氏（イースト・ウエスト・ファウンデーション会長）、久司アベリーヌ偕子氏（久司道夫氏夫人・マクロビオティック啓蒙家）、下村澄氏（(社)ニュービジネス協議会顧問）、草柳大蔵氏（評論家）、千家尊祐氏（出雲大社権宮司）、大西啓義氏（アクティブビジネス(株)社長）、竹内日祥氏（日蓮宗妙見閣寺住職・国際永久平和祈念祭典協議会理事長）、岸博氏（農村環境研究会代表）、斑目力曠氏（元ネミックラムダ(株)会長）、孔健氏（チャイニーズドラゴン新聞社主幹・孔子の75代直系子孫）、ピーター・タスカ氏（アーカス投資顧問(株)担当取締役）、森清氏（作家・山野美容芸術短期大学教授）、藤岡大拙氏（島根県立女子短期大学学長）、曹秀煥氏（東宇技研(株)代表理事）、長野忠氏（山陰中央新報社論説主幹）、望月照彦氏（多摩大学教授）、七田眞氏（米国ニューポート大学日本校教育学部教授）、安達生恒氏（島根大学名誉教授）、坂本巖氏（島根医科大学助教授）、橋谷博氏（気象湖沼学研究室代表・前島根大学理学部教授）、高嶋康豪氏（高嶋開発総合研究所所長・環境微生物学博士）、廣瀬勝氏（森ビル(株)特別顧問）、古畝宏幸氏（ラフォーレエンジニアリング(株)技術部部長代理）、金川弘美氏（エンロンインターナショナル駐日代表）、全在紋氏（桃山学院大学経営学部教授）、渡辺利夫氏（東京工業大学教授）、朴熙澤氏（在日本韓国団島根県地方本部団長）、松浦敬紀氏（多摩大学経営情報学部長）、北矢行男氏（多摩大学教授）、武原誠郎氏（イムカ(株)社長）、植原紘治氏（隗塾塾長）、首藤健次氏（(株)マザーズシステムジャパン社長）、中村豊秀氏（(有)ヒューマンコミュニケーションセンター所長）、山田鋭次郎氏（東洋化工(株)社長）、名倉康修氏（(株)販売開発研究所社長）、治郎丸明穂氏（(株)ミツルギ社長）、小室孝太郎氏（漫画家）、村尾靖子氏（児童文学者）、高田勲氏（画家）、寺井敏夫氏（小説「清原太兵衛」著者・J A 共済連代表理事専務）、宮下富美夫氏（音楽家）、林英臣氏（文明法則史学研究家）、古瀬豊氏（島根県中小企業団体中央会長）、山本清澄氏（島根県鹿島町町長）、唐沢勝敏氏（元全国中学校社会科教育研究会会長）、内田充則氏（島根県土木部技官）、内田文恵氏（島根県立図書館主幹）、佐野茂氏（元鳥取県水産試験場境港分場技術士）、石飛裕氏（島根県衛生公害研究所）、中西正己氏（京大大学生態学研究センター教授）、召古裕二氏（日本ミクニヤ(株)社長）、日野佳恵子氏（(有)ハートストーリィ社長）、福井哲郎氏（元生馬公民館館長）、瀧蔵健一氏（古江公民館館長）、朝山芳圀氏（佐太神社宮司・清原太兵衛顕彰会理事）、北川泉氏（元島根大学学長）、土肥誠氏（島根大学生物資源科学部助教授）、泉照之氏（島根大学総合理工学部教授）、岡本覚氏（島根大学総合理工学部教授）、池田隆氏（島根大学総合理工学部教授）、藤浦建史氏（島根大学生物資源科学部教授）、藤原義光氏（島根県総務部参事・財政課長）、影山和夫氏（島根中央ホンダ販売(株)社長）、長島徳夫氏（やくも水処理研究会代表）、後藤康信氏（原徳興産(株)社長）、森脇周一氏（三光電業(株)会長）、貫井三郎氏（菱農エンジニアリング(株)社長）、曾田禮蔵氏（曾田鐵工(有)社長）、青木通氏（(有)山陰エステート社長）、古賀隆昭氏（大昌(株)社長）、豊嶋悟氏（(株)豊島製作所社長）、山本隆志氏（(株)山元漆器店社長）、三谷忠義氏（(株)三谷設計社長）、梶谷武義氏（(有)カジック設備設計事務所所長）、桑本賢一氏（(株)桑本賢一設計事務所社長）、矢田和弘氏（(有)環境計画建築研究所所長）、僊石友秋氏（僊石建築事務所社長）、大平英雄氏（(株)ケイ・オー・デザイン副社長）、高橋德行氏（国民金融公庫総合研究所主任研究員）、織田健嗣氏（(株)アクエリアス情報研究所社長）、角田識之氏（(株)ハイネットコンサルティング社長）、姜英之氏（東アジア総合研究所所長）、小林和彦氏（サウンディオ・リサーチ(株)社長）、門田克則氏（(株)C D社長）、谷口實氏（(株)ジェムストーン社長）、吉永勝利氏

(株)マリン技研社長)、澤田利男氏(有)日農興産社長)、吉木久美子氏(有)日農興産取締役)、関谷忠之氏(有)土江本店社長)、森吉一夫氏(農業)、倉井毅氏(島根県議会議員)、石原恵行氏(山陰ケーブルビジョン(株)社長)、佐藤徹郎氏(ダイヤモンド社出版局)、早川元氏(フリージャーナリスト・「ブレーン」元編集長)、藤原直哉氏(有)藤原事務所代表)、荒木悠三氏(株)バンガード社企画・編集顧問)、新宮哲郎氏(山陰商工スタディ(株)社長)、岩田耕氏(山陰中央新報社社長付局長)、早川和宏氏(フリージャーナリスト)、金丸晃氏(山陰中央新報社記者)、李相兌氏(東洋経済日報記者)、藤原洋氏(株)エリアサイエンス・総合政策研究所所長)、長谷川泰二氏(株)テクネ研究所所長)、井上裕義氏(株)風土プラン社長・有)井上醤油店社長)、佐藤忠吉氏(木次乳業有)相談役)、佐藤貞之氏(木次乳業有)社長)、影山省治氏(有)影山製油所社長)、岡謙吉氏(東出雲町高齢者雇用アドバイザー)、今村亀太郎氏(今村商事(株)会長)、山本謙氏(元(財)しまね技術振興協会顧問)、曾田寛氏(エディター)、佐藤夏雄氏(島根県商工会連合会石見支所長)、森江利夫氏(元安来市市史編纂室)、佐藤誉志雄氏(佐藤材木店社長)、澄川すみえ氏(晴快堂漢方薬局)、李曉明氏(大連三高機電控制有限公司副総経理)、大坪ようこ氏(世李奈)、岩田伊知郎氏(岩田建設有)社長)、井上悟氏(株)アイドマ社長)、内田欣男氏(元有)米子プリント社取締役工場長)、山根尚樹氏(元有)あっぱるはうす松江オフィス所長)、西村志津子氏(株)山陰ブロック工業社長)、木村俊博氏(元島根県環境保全課長)、姚小萍氏(元小松電機産業(株)総務部)、須藤文義氏(小松電機産業(株)社長室長)、佐々木武男氏(元H N S 研究所本部長)

*本書の刊行にあたり、尾本恵市氏(桃山学院大学教授)には、論文の掲載を、また、日本経済新聞社、毎日新聞社、朝日新聞社、山陰中央新報社、新日本海新聞社、島根日日新聞社、共同通信社の各社には、新聞記事の転載をご快諾いただき、本書の発行に至りました。ここに、厚く御礼申し上げます。

.....新しい時代をひらく「一村一志運動」から生まれた.....

HNS (人間・自然・科学) **研究所の本**

郷土の人々の環境と生活のために生涯を捧げた偉大な先人にスポットを当てて現代に蘇らせ、その足跡をたどることで未来への道筋を発見する。



<人と水のシリーズ1>

周藤彌兵衛

- 漫画「治水の英雄伝」／小室孝太郎
定価1,300円（税込み・送料別）
- 児童文学「川の流れを変えた人」／村尾靖子
定価1,300円（税込み・送料別）
- 小説「治水の偉人」／交易場修
定価1,400円（税込み・送料別）
- 3冊組セット漫画・児童文学・小説（特製ケース付）
定価4,000円（税込み・送料別）
- 朗読カセットテープ児童文学2巻・小説4巻
定価6,000円（税込み・送料別）



<人と水のシリーズ2>

清原太兵衛（島根県鹿島町合併40周年記念出版）

- 漫画「治水の偉人伝」／小室孝太郎
定価1,300円（税・送料別）
- 児童文学「川を作った人」／村尾靖子
定価1,300円（税・送料別）
- 小説「治水の偉人」／寺井敏夫
定価1,400円（税・送料別）
- 3冊組セット漫画・児童文学・小説（特製ケース付）
定価4,000円（税・送料別）
- 朗読カセットテープ児童文学2巻・小説4巻
定価6,000円（税込み・送料別）



「母なる中海——汽水湖は二一世紀文明の子宮——」

森 清 著／ダイヤモンド社刊／定価1,600円（税込み・送料別）

2000年の時をへて いま蘇る！

「太陽の國」からのメッセージ！

「太陽の國IZUMO——地球ユートピアモデル事業——」

発行日 1999年7月27日 頒価2,500円（税込・送料別）
発行人 小松昭夫
発行所 HNS（人間・自然・科学）研究所

〒690-0046 島根県松江市乃木福富町735-188松江湖南テクノパーク
小松電機産業株式会社 内
TEL 0852-32-3636 FAX 0852-32-3620
<http://www.hns.gr.jp>

※この構想企画書は、国内外の多数の著名スタッフによって作成されていますので、無断転載は固く禁じます。

あなたが動く、時代が変わる。

太陽の國出雲へ！

H N S 研究所ホームページ ご意見・お問い合わせは ＜提言＞についてのご意見・情報は	http://www.hns.gr.jp webmaster@hns.gr.jp asyura@hns.gr.jp
--	---